

【涼宮ハルヒ】をやらないといけない涼宮ハルヒさんは憂鬱

茶蕎麦

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

色々と勘違いしている【私】こと涼宮ハルヒさんが【涼宮ハルヒ】をやろうとして盛大にずっこけるお話です！

この作品はカクヨム様Pixiv様でも投稿しています。

挿絵を描いてみました！ 涼宮さんのイラストですー。

二枚目描いてみました！ 喜んでくださると嬉しいです！

目次

第一章 憂鬱

第一話 葦のアルゴリズム | 1

第二話 谷口と猫属性 | 10

第三話 砂糖と塩は正直に | 18

第四話 うさぎ≠ウロボロス | 26

第五話 お天気おねーさんの嵐 | 34

第六話 フラクタルに謎 | 42

第七話 牛さんと無表情レイヤー | 50

第八話 不味いコーヒーはチキータ | 58

第九話 百万馬力へホラーハウス | 66

第十話 アプリコットティーにヨーグルト | 75

第十一話 エアバッグとゲリラ豪雨 | 85

第十二話 百億点对イルカ派 | 93

第十三話 隠し味はナルキツソス | 101

第十四話 ナイフ÷友達 | 110

第十五話 願いはアンビバレンツ | 118

第十六話 【涼宮ハルヒ】をやらないといけない涼宮ハルヒさんは

憂鬱 | 126

番外話① 長門有希の願望 | 138

番外話② 古泉一樹の望月 | 147

第二章 退屈

第十七話 井戸端会議なシーソーゲーム | 157

第十八話 キュウリをピンどめ | 166

第十九話 メロンパンな代打 | 177

第二十話 ロージン+ハイエナ

第一章 憂鬱

第一話 葦のアルゴリズム

「……………どうすれば良いのかしらね……………」

胡散臭い題名の怪しげな本の列と、女の子の色調が奇跡的に融合している我が部屋にて考え事をしながらうろうろ。

そうやって黙って色々と考えていけば沈黙が続くもの。そういえば、延々と続く三点リーダーって、まるで蟻さんの列みたいね。

蟻さんの群れが餌を取るためにフェロモンを頼りに真っ直ぐな列を作るということを、知っている人は知っていると思う。

つい観察してみたくなるくらいに見事な、この彼らの上手なお腹ぺこぺこから脱するための問題解決方法はアルゴリズムと呼ぶらしいの。

アルゴリズムというのは簡単に言えば、やり方のことね。手順、でも良かったかしら。

私の理解している範囲だと、お出かけをする前日に、お風呂に入ったり、鞆の整理をしたり、道順の確認をしたり、そんな見通しを立てておくこともお出かけをするためのアルゴリズムと言えた筈なの。

だから、私が今【涼宮ハルヒ】をやるための方法を必死に考えているのも、彼女の代わりになるためのアルゴリズムの一つとは言えないかしら。

「……………ああ、私も蟻さんみたいに違わず上手に【涼宮ハルヒ】をやりたいものね」

まずは、眉間に皺を入れてみた方が彼女らしいかしら。それとも、奇行とも呼べる行動力を生むための探究心を高める算段を付けてからの方が良いかもしれないわ。

それに、自分の中にあるらしいよく分からない力を上手く制御出来るようにしないと、皆困ってしまうでしょうね。長門さんに朝比奈さんに古泉君にキョンくん……………それにしても変なあだ名よね……………に出会う前に世界がジ・エンド、なんて笑えないし。

問題山積みだわー……あ、申し遅れたわね。私は涼宮ハルヒという名前で彼女の体を持っているけれど、涼宮ハルヒではない女の子……だと思うわ。

私が【涼宮ハルヒ】になったのは、つい先日のこと。

涼宮ハルヒが味わっていた酷い高熱が引けた後に、目を覚ました私は目の前の両親に既に実感を覚えることがなかったの。

『……………どちらさまっ…』

【あたし】が【私】になってからの第一声は、こんなだよ。笑っちゃうわよね。

でも、風邪に弱った娘が前後どころか親すら不覚というのは両親にとつてはたまったことではなかったみたい。

検査で入院が伸びてしまったのなんて、退院して翌日のいまの私にはとても笑い話にすることは出来ないわ。【あたし】じゃないけれど、とつても退屈だったんだから！

まあ、そんな過去のことなんて、忘れましょう。問題は、明日……いえ、それ以降の、大体四年後に起きるだろう諸々の事態までどう辿り着くか、よね。

……ええ。私がどうしてだか未来を知っていること、それがおかしいっていうことは分かってる。

涼しいけれど居心地悪い、白くて寂しい病院内をあちこち転がされている間に、私も色々と考えたのよ。そしてみたら頭の中に当たり前のように、未来のことが記されていたから、驚いたわ。

これから私に起きるべき……いやそれは【あたし】に起きるべきこと、だったのかしらね。

私とは性格が大違いな以前の自分だったら起こすし起きるだろうことばかりが歯抜けのよう……いや、これはピックアップされたかのよう、といった方が正しいのかしら。そんな風に脳に葉のように挟まっていたのよ。

しっかしそれがどうにも、俯瞰的っていうかテキストチックなものばかりなのよね。大概が、非日常的なもので占められているし。【あ

たし」がこの情報を知ったらどう思うのかしら。待ち望んでいたことと喜ぶのかしら、それとも……分かんないわね。

まあ、自分が世界の中心に置かれたおっきな爆弾だって、そんなの私は知りたくはなかったかな。

退院してから後、直ぐに私は自分の正体を探ったわ。

まずは、自分が世界を思い通りに出来る力がある、という脳内の記述に従って、こっそりと夢の中で遊ぶことを試してみたの。

私の中でのことなら、情報生命体だろうが、そうそう覗けないと思つてのことね。超能力者連中対策に壁を創つておくのも忘れずに。

そうしたら、明晰夢どころではない現実地続きのような感覚の中で、私は思い通りを形に出来てしまったわ。神人、っていうんだったかしら、まあそんなのを沢山創つて侍らせてから、最後は私の力で全部をぼかーん！ 楽しかったわー。

その際に、きつとりリアルでもこれと同じ事が出来るという確信を得たの。私は、目覚まし時計が鳴るきつかり一分前に起きてから、あくびと共にベルを動かないようにさせつつも、今後のことを考えざるを得なかったわね。

そのテキストの中で大事な本当ならば、他の小事も大体当たつていると見るのが自然と思うの。

私は、思いつきり私の中の未来への地図を、信じたわ。【あたし】の望みで生まれたのかもしれないけれど、宇宙人や未来人、超能力者たちと一緒に過ごせるようになるなんて、とても楽しそうだしね。

しかし、考えるに、どうにも私の未来展開にはおかしなところが多々あるの。普通に考えて、このまま自然に過ごしていれば、その宇宙人達の存在を知っている私がSOS団なんてものを作るなんて、あり得ない。何も知らない【あたし】ならば、まだしも。

そもそも、一体全体が無知な奇矯であること前提なのよね。【あたし】を反面教師にしている普通な私に、あんな振る舞い、無理。

どこがおかしいのか。それは、最初から。本来あるべき未来はどう考えても【あたし】のもの。なら、スタートラインに代わりに居座つ

ている私は何？

まるで、私が涼宮ハルヒであるのが間違っているみたい。

そう思ってから、私は異常な程の居心地の悪さを覚えたわ。コギト・エルゴ・スム。なら、考えている自分を信じられなくなった輩は、どうやってこの世に立つの？

とりあえず、私は自分の定義をし直すために、今までにない情報を欲したわ。

まずは図書館に向かって、空振って。次に【あたし】が普段見ていなかったテレビを、目を白黒させる両親の真ん前で食い入るように見ても、私は不明なままだった。

なら、と【あたし】が手を尽くして集めた、内容どころか作者の正気すら不明の本の中から……こんなところから私の証が出てきたらやだなあ、と思いつながら探ったのよ。そうしたら、それっぽいのが見つかってしまったわ。

転生、なんて文句を私の目は拾ったの。

まさか私の正体が前世の自分とは思わなかったけれど、もしかしたら、なんて気の迷いはどうしてか覚えてしまったわ。倒れかかった輩は、薫にすぎるのね。

でも、【あたし】も私もそんな死後のことなんて詳しくは知らなかった。だからウェブブラウザの検索ボックスに転生、と入れてエンターを押してみたの。

最初はサンスクリット語やら何やらで書かれた仏教用語を読み解かなければならなければならぬのかしら、なんて思っていたわ。でもそんな小難しい言葉より先に、転生したらなんちゃらとかいう小説の題名が出てきたのよ。

それも一つ二つではなく、無数にね。何よこれ、と思った私は片っ端からその似通った文章達に目を通していったわ。

内容としては……まあまあ面白かったかしらね。でも、それはきつと私だから。【あたし】だったら、来世に神様なんて頼ってないで今の自分で不思議を探して満足しなさいよ、とでもたたっ斬っちゃうんじゃないかしら。

それで、そんな数多の転生の中に、物語の主人公を乗っ取る形で一般人が転生する、っていう形があったのよ。そうすると、未来視出来るガワだけ優れた一般人が出来上がるみたい。

私はこれに、びっくりしたわ。なによまるつきりこれ、私じゃない、って。状況がびっくりするくらいに符合するのに気づいて、そうして少し間を置いてから思ったわ。

だとしたら。こんなの私はいいけれど、「あたし」がかawaiiそうじゃない、って。

それはそうでしょ？

だって、「あたし」が幾ら爆弾的でも、それでも中学校に文句を言いながらも通っている、ただの小さな女の子でもあったのよ。それこそ、世界の主人公とも呼べそうな、元気の塊で。

それを、何だかよく分からない吹けば飛んでしまうような一本の葦——私のことだけれど——で上書きしてしまうなんて、いかにも勿体無いじゃない。

でも、私は「あたし」を取り戻す方法なんて、分からなかった。いくら願っても、多分振るえているだろう神様のパワーでも、失くなったのだろう彼女を呼び戻せなかったの。

もし、上書き消去されたのじゃなかったら、どこに行っちゃったのかしら。またふらりと、帰ってこないものかしらね……とか考えた時に、私は体に電気が走ったかのように、衝撃を覚えたわ。

そうよ、先が分かっているのだから。「あたしの」居場所が失くなってしまわないように同じようにし続けていたら、その場で「涼宮ハルヒ」を返せるじゃない、とね。

だから、私は自分を定義したその後直ぐに、自分の方針を決めたわ。何時彼女が戻っても平気なように、私は「涼宮ハルヒ」をやる。

どうせ、きつとあの文章の彼ののように転生したのだから私は、既に死んでいるでしょう。なら、私なんて蝶々さんの夢のようなものだから、何時消えても仕方がない。

そう、私は勘違いしたのよね。

そんなこんなで、私は【涼宮ハルヒ】をやると決めたの。

しかし、決めたところで私は蟻さんの列を量産するばかり。そういえば、三点リーダー以外に使うしーん、っていう擬音もよく出来た沈黙表現と思うけれど意外と私が黙っている間を埋める音って結構あるものだったわ。鳩さんの鳴き声って、面白いわよね。

と、そんな風に現実逃避してしまうのも仕方ないと思うの。ぶっちゃけたところ、【あたし】をやるなんていつでも、どうすれば良いのか、分からないのよ。

この頃大体機嫌が悪かったけれど、【あたし】もそのぶすっ面を抜きにすれば意外と普通に過ごしていたから。さて、どうトレースしていけば、と悩んだ時、私は窓から道路を横切る猫さんを見つけたの。思わず、私は蟻さんを押しのけて言葉を発したわ。

「……こんな部屋に籠もって考え込んでいるばかりだから、きつと駄目なのよね。うん。一度、外に出ましょう！」

案ずるより産むが易し。そんなことわざを持ち出すまでもなく、私の葦のように根を張っている訳でもない足は勝手に動いたわ。

前の【あたし】程じゃなくても今の私だって、萌えは理解しているのよ。そう、きつと私は動物萌え！

勝手に、にこにここと微笑みを浮かべる表情筋を、もう私は抑えないわ。そう、未だ、厭世観を面に貼り付けているような、そんな濃みきつた子供になるのは、流石に【あたし】にだって早かった筈だもの。

「待って、猫さーん！」

ちよつと、遊んじやいましょう！

「にゃんにゃーん？」

「ニャー」

「可愛ーいー！」

そして追いつがる私に、足を止めてくれた三毛猫さんを、私は思う存分可愛がったわ。顎を強くさすったら嫌がるその子——あら、男の子なのね——を抱きしめ、持ち上げてそのまま公園へとゴー。

でもって彼と広場で一緒に遊ぼうとしたら、どうにも動かなくなっちゃったの。うーん、日差しを嫌っているのかしら。日陰のベンチから一歩も出てくれないのよ。

それでも一緒にいたい私は猫語で一緒に遊ぼうと誘ったわ。けれども、不勉強な私は彼の言語解読なんて出来ずに、その可愛らしさを受け取るばかり。

「ニャー」

「にゃんにゃん」

「にゃん？」

「増えたにゃー」

「にゃー」

「ニャア……」

そうしてすつかり【涼宮ハルヒ】を忘れて、ニコニコしていたら、小さな同士が現れて、隣で一緒ににゃんにゃんしてくれたわ。ああ、彼っいたらすつごく鬱陶しそう。可愛いわ。

私の隣でにゃんにゃんし始めたのは、サイドテールの萌芽のようにちよこんと髪を纏めた愛らしい女の子。それにしても、小さいわねえ。保護者さんってないのかしら。

そう思った途端に、足音が。そちらを向いたら、私ほどじゃないけれどちよこつと整った顔をしたハーフパンツの男の子が居たわ。彼は気怠そうに、少女に声をかけたの。

「何やってんだ、お前……」

「にゃー」

「あなたのお兄さんかにゃー？」

「うん。あたしの、お兄ちゃん！」

名前は、と聴くと二人分、ちゃんと返ってきたわ。妹ちゃんと揃って普通、といえはその通りの名前ね。念の為に彼にあだ名はあるか聴いてみたけれど、特に無いと返ってきたわ。

ちよつと期待と不安があったけれど、彼はキョンくんではなさそうね……まあ、いいわ。だったら【涼宮ハルヒ】として一般人をかき回してあげましょう！

「その猫さんは、木陰でゆっくりしたいみたいだし、代わりにあなた達、一緒に遊びましょう！」

「わーい！」

「は？ 俺は別に……」

「ふふ。付いてこれなかったら、罰ゲームよ！」

「きゃー、かけっこだー」

「参ったな……」

ぐずっていた彼も、直ぐに笑みをを見せて遊んでくれたわ。だからもう、そこには楽しさしかなかったわね。

思えば、この日は涼宮ハルヒというシステムに則り、つまらなそうに彼らを眺めるばかりであった方が良かったのかもしれない。でも、そんなのは嫌だったわ。だって、世界はこんなにも素晴らしいんだから！

そうして、私は私になってから初めて、目一杯遊んだの。力作の砂のお城に、失敗した逆上がりの痛み。赤くなった日差しが目に痛くて。その全てがまるで、夢のようだったわね。

そう、蝶々さんの羽ばたきより短な、泡の夢。混じりつけない彼らに交じってしまった、間違いの私。

……黄昏時って、揺らいでしまうものなのね。だから私は、こんなに私が楽しんじゃっていいのかな、とすら思ってしまったわ。

「……どうか、したか？」

それを、隣に座る彼に見透かされてしまったの。遠くで私達が積み上げた砂を崩している妹ちゃんを見つめながらも、彼は気にしてくれていた。私は、素直に返せたわ。

「そうね……なんか、私って場違いな気がしちゃって……」

「ん？ 俺はこの公園に来たのは初めてだけどな。……別に、そんなことはないだろ」

「ふふ。そういうのとは違うんだ」

そう、違う。私はエラー。世界の中心に出来た全てを台無しにしかねない、染み。優れたアルゴリズムなくしては動けない、何もなし。帰り道を失くしてうろつく、一匹の蟻。考えずに揺れているばかりの

葦。そんな風に、この時私は私を自嘲したの。

空も、夜に陰っていく。幼い私達は、一挙に世界に相応しくなくなっていくわ。でも、それでも彼は私の目をちゃんと見て、言ってくれたの。

「ったく。照れるから、あまりこういうことは言いたくないんだけどなあ……」

「……なに？」

「……俺は、お前が居てくれて、楽しかったよ」

はにかみながらも、真剣に向けられた鳶の瞳に驚愕が映った。どきんど、私の胸は一つ、高鳴る。そして、私は紅色に溺れた。

「うう……」

その後、どうやって帰ってきたか不明なままに私は家にて唸ったわ。一瞬、鏡に映った私の顔は、明らかに「涼宮ハルヒ」から遠いもの。蕩けすぎていてあんた誰、っていうレベル。

かき回そうとした普通の人間に、私の心はこれ以上なくかき乱されていたわ。私は火照った頬を抑えながら、一言。

「べ、別に私が恋したって……いい、わよね？」

どうなんだろう？

私は自分の高鳴る胸元を、一時の気の迷い、精神病の一種のせいと割り切ることなんて出来なかった。

第二話 谷口と猫属性

「ふん、ふーん」

鼻歌交じりに、北高の長い坂を進む私。うんざりするような広角だと聞いていたけれど、私にとってはそれほどでもないわね。誰かさんとは根性とストライドが違うのよ。こんなの朝の目覚めに優しい運動程度。

こういう時ばかりは、自分のハイスペックさに素直に感謝するわね。まあ、曲がりなりにも流石に神様な可能性すらある「涼宮ハルヒ」だけはある、かな。

私はブレザー男子とセーラー女子を軽く追い越して、浮かれ気分を歩調で表しながらずんずん進んでいったわ。あ、でもこれは駄目ね。らしくないわ。もうちよつと、嫌そうに歩かないと。

でも、どうやったってニヤついてしまうのは止められそうにないわ。だって、今日は待ちに待った、北高の入学式。

これから、様々な超常現象が犇めき合う、そんなイベントだらけの高校生活への道が開かれる日だっていうのだから、普通な私だって機嫌を良くして当然ってものよね。

でも、よく考えたら大事の前に気を引き締めてかかるのは、当たり前のことだったわ。ご飯を食べる前に頂きますをする時くらいには、厳粛な気持ちになっても良いはず。

ああ、そういえば今日は卵にハムだけでご飯もパンもなしのヴィーガンも裸足で逃げ出すだろう、肉食朝食だったわ。……ちよつと寝坊して、急いじやったのよね。今日は間に合いそうだから良いけれど、気をつけないと。

「はあ……よう、涼宮！ つたく、お前さんは今日もご機嫌だな！」

そんなこんなを考えていたら、タイミングが合って並んだばかりのお隣さんから炒めて萎れたほうれん草みたいに汗だくべつとりの男子に声を掛けられたの。それが飽きるくらいによく知る音色だったから、思わず私は振り向いたわ。

「おはよ。なによ、谷口。そういうあんたは今にもベそかきそうなくらいにくたびれているわね」

そうして、私は似合いもしないオールバックに拘っている東中で三年間一緒した同級の男子に軽口を叩いたの。

しっかし、こうしてまじまじ見ると、顔の形どころかその色すらとても良いようには見えないわね。私はその中身も残念なことを知っているけれど……大丈夫かしら？

そんな私の考えを察したのかは分からないけれど、目の前に降りた一房の髪を気にしてから、私の唯一の友人こと、谷口は言ったわ。

「昨日はどうにも眠れなくてき……それでこの坂はちよつと辛えよ」

「谷口のことだからどうせ、夜な夜な、怪しいサイトでも覗いていたんでしょ？ いやらしい」

「違えよ！ 緊張で寝られなかったただけだって！」

何、谷口ったら高校生にもなって、遠足の日前夜の子供みたいに眠れないくらいわくわくどきどきしていったっていうの？ こいつも随分と、可愛らしいところあるじゃない。

思わず頬を緩めながら、でも私はへそ曲がりなことを言ってしまうの。

「意外にヤワなやつねー」

「そう思うなら、これからはもつと優しくして欲しいぜ」

「嫌よ。潰れてもあんたなら、直ぐに治るでしょ？ というか、直ぐに保健室にでも行ってその酷い顔色、治しなさいよね」

「ったく。勝手な奴だ。……まあこんなの、入学式の間眠つとけば大丈夫だろ」

そして、友との会話を、楽しんでしまうのよね。そんな、普通一般が似合わないのが【涼宮ハルヒ】だっていうことは知ってるのに。

でも、私には、幾ら払い除けても差し出し続けてくる、一歩間違えたらストーリーカーというくらい……というか家の前に居たから一回通報しようとしたこともあったっけ……そんな谷口の手を無視することなんて出来なかったの。

それも、仕方のないことだと思うのよ。だって、友達の一人も居な

いなんて、寂し過ぎるじゃない！

ひとりぼっちなんて、太陽でもない私には、耐えられなかったのよ。というか、「あたし」は、先生のペア作って攻撃にどうやって生き残っていたというの？ 返す返すともない子よね。

「……涼宮は、高校デビューに向けて何か意気込んでたりはしないのか？」

あり得たはずの「あたし」の孤高っぷりに戦慄を覚えていると、何を思ったのか、谷口は改まって私に声を掛けてきたわ。そしてそれは、彼らしい愚問だった。

当然。むしろ、私こそこの世界で一番に高校デビューに意気込みを持っていてと言っても過言ではないかもしれないわ。

……正直なところ、中学の頃はどうにも「涼宮ハルヒ」らしく出来ていたかと言うと、疑問符が付いてしまうレベルだったと思うし。

遅まきながら、今日から私は再スタートするのよ。三年近く温めたプランを遂行することの楽しさ、これには笑みが溢れて仕方ないわね。

「ふふ。後で一発凄いのかましてあげるから、見ていなさい！」

「マジかよ。いや、お前の一発は揃いも揃って大暴投だからなあ……心配だ。主に後片付けに奔走するだろう、俺のことだが」

しかし、お友達の谷口さんは、そんなことを言うわ。この「涼宮ハルヒ」を捕まえてよくも間抜け扱いしてくれたものね。

知らないんだから、と私はあかんべえに舌を出して見せつけてから、駆け出したわ。

「ふん、空気読めないあんたなんて、今日からお払い箱よ！　じゃあね！」

お払い箱、は酷い言い方かもしれないけれど、でもこれから普通じゃない人たちと関わることになるのだから、谷口と一緒に出来ないのは、仕方ないわよね。

それに、あの日、委員の仕事で体育の着替えに遅れた教室で下着姿の私に、わわわ忘れ物とカマしてくれたのは、忘れていないんだからね！　ほんつとうに、恥ずかしかつたんだからっ。

それにただの友達同士だったのに、一緒に遊びに行つてあげたら、勝手にカップル割引を駆使しようとしてくるし……腹たつてきた！
こんな奴、知らないんだから。

……いや、でもちよつとくらいは構つてあげても良いかもしれないわ。【あたし】の未来予想図には居なかつたけれど友情出演、というのも決して悪くはないんじゃないかしら。それを考えると谷口は団の補欠その一、といったところね。

うん、そうしましょう。別に、こいつが居なくなつたら私、またぼつちだという現実を恐れたわけじゃないんだからね！

「おい、俺の他にお前を介護してくれる宛なんてあんのかよ……つて、速え！」

そんな、間抜け声なんて無視無視。私は、ありきたりな、それだけにワクワクする北高校舎に向けて、迷いなく足を走らせたわ。

だって、そこには待ち望んだものが沢山ある筈だからね！ 一向に戻つてこない【あたし】の代わりに私が楽しんだつて、構わないでしよう？

でも、うーん……あいつを置いていくのはちよつと、可哀想だったかな？

隣で思いつきり息を吹いてあげたら飛んでいきそうな、カツラ髪を乗せた校長の長話と、時折それをかき消す勢いで鳴り響く誰かさんのいびきをバックグラウンドミュージックに、私は少し考えてみる。

私は【涼宮ハルヒ】の愉快な人生に、宇宙人に、未来人に、超能力者、そしてキョンくんが必要だということはよく知っているわ。

そして、その存在の内、キョンというあだ名の彼以外は何となくは察知出来ているの。伊達に自分の中に持て余すくらいのもヘンテコパワーがある訳じゃないのよ。私が望んでいるからかしらね。何となく、住む市のそこかしこから変な力を覚えるのよ。

ま、だからといってこれまで私が彼らの動向から離れたところにならずと居られたのは、それもきつと私が望んだからなのかしら。

基本的に、心の新陳代謝のためにイライラした際に決して広がり過

ぎることのないハリボテの閉鎖空間の中で神人を暴れさせるくらいにしか使わない神様ぱわーだけれど、時には便利ね。

でも、今私は強く望んでいるわ。「涼宮ハルヒ」らしく、高校生活を過ごしたいって。なら、あの四人に会えるに違いないわ！

まず、長門さんは確かなんでも出来る大人しい子らしいけれど。でもそういう子を笑わせたときって、きつととっても楽しいでしょうねー。宇宙人的要素も気になるけれど……私的には三才娘の情緒の発達が一番気にかかるところ。

次は朝比奈さん、よね……彼女の場合未来人要素よりも凄い部分があるわよね。一つ先輩の童顔トランジスタグラマーって何？ もう、そんな天然記念物、「あたし」じゃなくても思わず手元に置いておきたくなってしまうわよ。

後、それらしい動きは感じているけど、古泉君が所属しているっていう団体、機関なんて本当にあるのかしら。自業自得だけれど私の動向を見張っている組織とか、よく考えるとちよつと、怖いわねー。

そして……キョンくん。この男の子が、一番重要で、一番に不安な要素でもあるわ。何しろ、本来は「あたし」の初恋相手、みたいだからねえ。彼がキツカケで動く事態の多いこと……でも私、もう好きな人がいるのだけれど。どうしよう？

そう。律儀に思い出すことに高鳴る胸元と同じく、変わらず私はあの日の彼に恋してる。

思い出すのは、あの日の鳶色。陰った中での温かき。そして、紅。

当然、私はあの日から求めて探したわ。勿論、恋に余計なものなんて要らないから、力なんて使わずに独力でね。でも、未だに私は彼を見つけれないのよ。

名前を知っているというだけじゃ、駄目ね。まあ……聞き込みのためにその名前を呼ぶことすら恥ずかしがってしまう私のうぶさにも問題があるのだろうけど。

それに、力はあっても運がないのか、街中を練り歩いたところで、見かけもしなかった。どうしてでしょうね？

まあ、ちよつと不安は残るけど、多分未来はそう変わっていないと

思うの。何時だかにジョン・スミスを自称する明らかに日本人な青年と遭ったことあるし。残念だけど、暗くて顔を見て取れなかったけれどね。

ただ、そこに至るまでが大変だったの。どの異常行動が、未来を引き寄せるのかどうか分からずに、そしてどこまでそれを続けなければいけないか、までも不明だったから。

きつと頭の中でシナプスが特殊に繋がっちゃっていたのだろう【あたし】と違って、私はごく普通の女の子。だから、奇行を思いついても行うというのは、とつても大変だったわ。白い目で見られるのも、辛いしね。

最後らへんは、死んだような目でやっていたみたい。お父さんお母さんにも大分心配されたわ。受験ノイローゼを疑われた時には、流石の私も涼宮ハルヒを続けるか悩んだわね……まあ、それでも今も続けているのだけけど。

「みんなに自己紹介をしてもらおう」

まあ、そんな悩みからも、今日でお別れ。色々と考え込んでいたら、教室に座っていて岡部先生のハンドボールの講釈を聞き逃してしまったみたい。校長先生の長々とした激励よりかはためになるだろうと思っただけけど。

そこで私は、ふと目の前の短髪の青年を見つめるわ。機会を逃して顔を見ても居ないけれど、後ろ姿だけでもそこそこ格好良いのではと窺えるわね。いかにも気怠げだけれど、何ともモテそうな気配がするわ。

でも、そんなキョンくんがしたのは他の人と大差ない、無難な自己紹介。あまりに短すぎて、これじゃあ悠長なスクワットと変わらないわね。これには、私も苦笑いを禁じ得なかった。でもまあいいわ、次は、私だもの！

勢いよく立ち上がって、私は宣誓のように言うわ。

「東中学出身、涼宮ハルヒ……」

ここまでは当たり前。注目も、東中の仲間——向こうはそう思っていないかもしれないけれど——達以外からはされているわ。谷口な

んで、入学式中にいびきを立てていたのに寝足りないのかあくびをしながらそっぽを向いているわね。何だかムカつくわ。

私のそこそこの見目のおかげか、彼らの視線は好意的なものが多いわね。ただこの期待の瞳が直ぐに真っ白なものに変わってしまうのだからいたたまれないわ。

でも、勇気を出して、私は【涼宮ハルヒ】を始めないと！

「ただの人間には興味ありません。この中に、宇宙、じん……」

そして、一歩目で私は躓いたの。変に止まった私をクラス全員が見つめてる。

いやいやいやいや。口に出してみたは良いけれど、この台詞ってやっぱりとっても『イタイ』わ！

何が人間に興味ない、よ。どんな頭をしていたらこんな不思議言葉が出てくるの？ ああ、私が抱えているこれね。

ああ、恥ずかしい。

顔が紅潮することを、私は抑えきれない。でも、今更止められないから、私は続けたわ。

「未来人、異世界人、超能力者がいたら私のところに来なさい、以上！」
私が次第にどんどん早口になって、最後は勢いよく断言したような口調になってしまったことを、誰が咎められるというのかしら。

ええ、知っているわよ【あたし】は文句を言うでしょうね。こんな【あたし】じゃないって。でも、無理なものは無理。文句言うなら代わってよ。むしろ代わって下さいお願いします。

脳内で一人自分という空虚な仮想敵と敗北へ至るそんな喧嘩を繰り広げていたその時。恥に下がった視線の先に呆れ顔が目の前に一つあることに気づいたの。

思わず、私は振り向いてきていた前の席の彼——キョンくん——を、凝視してしまったわ。そして、そのつぶやきを私はトラウマとして記憶に刻んだの。

「照れるくらいなら、やるなよ……」

仰る通り。でも、こちらにもやんごとなき理由というのがあって……って。

「もしかして……君って」

「あー。あんたは……あの時の猫少女」

私の前の席で、成長したあの日の少年が、苦笑いを浮かべる。鳶色が細まって、紅が緩む。おおよそ彼は三年前の私を覚えていてくれたようで、嬉しい。でも、その覚え方はちよつと頂けないかな？

恐らくあの日以降にキヨンというあだ名が付けられたのだろう彼に、私は愛想笑いを浮かべる。果たして上手に、出来たかしら。

そして、そのまま疾く、私は机に突っ伏したわ。

初恋の人が運命の人って素敵ね。でも、その人の前で私は最初からやらかしたというわけ、かあ。

私は泣……いたら完全にキャラ崩壊だからもう、啼いたわ。いや、これも駄目なんだろうけれどさ。

「にやああああ……」

はあ……死にたい。

「やっぱり猫属性なんだな……」

やたらいい感じに私の胸元に響いた彼のそんな間抜けな言葉なんて、聞こえなかったことにしたいわ。

第三話 砂糖と塩は正直に

現況に、眉がひそまるのを感じる。私は、幼子の未来予想図なんかよりよっぽど甘い、シヤケの砂糖焼きを咀嚼しながら思うわ。失敗したなあ、って。

まず、私が鮭の切り身に砂糖を間違えて振りかけてしまっていたことは、確かに不味いというより拙かったかもしれない。けれども、それ以上に私を取り巻く食事環境が頂けないの。

私が不快に目を細めていると、入学式の前に別れを済ました筈なのにひつつきむしみたいに中々離れてくれずに、そしてブラックバスマいに私の平穩無事なお昼休みの環境破壊をしてきている張本人こと谷口が、口を開いたわ。

「どうした、涼宮。そんなすつとんきような顔して。んなに、自分の手作り弁当が不味かったのか？」

「うーん……確かに不味いけど、それだけじゃないわ」

「……マジで不味いのかよ、おい」

「徹底的に、味付けの砂糖と塩を間違えていたみたいなのよ……」

「そりゃ、ぐぐ愁傷さまだな……」

複雑な表情をする谷口の前で、私は自分の味覚と格闘を再開する。実のところ私は塩っ辛いのが好きなのよね。でも、これは甘々が過ぎているわ。

幾ら無料だからといって、足元の土を食べる人は居ないと思うの。それも、不味いというより拙いから。食は生きるためのものなのに、容れると体を壊してしまうだろうものをわざわざ口にに入れるなんて、あまりにナンセンスだもの。

だから、明らかに糖分過多な昼食に、箸を置いてもいいかとも思うのだけれど……いやでも、そんなの勿体無いお化けが出てきちゃうわよね。私は「あたし」と違って、幽霊の類は大嫌いなよ。だから、残すことだけはしないわ。

だから私が渋面のままに食事を再開していると、期せずして最近お

近づきになってしまった少年、国木田くんが真ん前で笑んだわ。そしてそこに席をくつつけた隣で、図らずしも最近距離を詰めつつある気になる彼、キョンくんは呆れ顔を見せてくれたの。

まじまじとキョンくんの顔を見られない私は、国木田くんを注視しながら、笑顔の彼が口を開くのを待ったわ。お上品に、しよっぱいイチゴをはむはむしながらね。

「はは。涼宮さん、って意外とおつちよこちよいなんだね」

「……国木田、お前本当に意外だと思ってるのか？」

「あはは……ごめん。ちよつと嘘っぽ過ぎるオブラートだったね。正直に言うと、涼宮さんなら砂糖とワサビを間違えるくらいはしかねないな、とは思っていたよ」

「だよな」

けれども、可愛らしい顔して国木田くんは存外辛辣だったわ。いや、正確に言うならば、キョンくんが彼の辛辣さを引き出した、という感じ。全く二人して意外といい性格をしているわね。

しっかし、私が砂糖とワサビを間違える訳がないじゃない。チュウブの生姜とワサビを間違えて悶絶したことくらいはあるけれど、それくらいね。

胸を張って、私は言うわ。

「むっ、私はそこまでドジじゃないわよ！」

「高校生活を第一声からやらかした奴が、よく言うぜ……」

「いびきが煩すぎて入学式の途中で外に追い出されたあんたにだけは言われたくないわよ！」

余計なことを言う谷口を私は睨む。きつと誰より早く先生方に目をつけられたのだろう生徒に、ダメ出しされるなんて屈辱よ。

でも幾らわたしがぐぬぬとしていても、谷口が言う通りに、私がやらかしたことは間違いないわ。

私にとっては甚だ不本意なことに、高校デビューして不思議ちゃんキャラになろうとして玉砕した女の子、としてそこそそ有名になってしまったのよね。皆から向けられる、白くない、妙に温かい目が気持ち悪いわ。

変人として有名なのが【涼宮ハルヒ】なのは間違いないけれど、これはちよつとベクトルが違うような……いえ、きつとまだまだ挽回は可能でしょう。

そういえば、学食が口に合わなかったし、一人は寂しかったから流れて毎日この男子三人と食事を一緒にしまっているけれど、まあそれは大しておかしくはないわよね。

私とて【涼宮ハルヒ】の食事風景までは知らないし、それに【あたし】だつてぼつち飯を好みはしないでしようし、きつと誰かと一緒に御飯を食べていた筈よ。

不自然の権化といつても、一人で生きていられないのは自明だし……とか思っていたら、何やら喧嘩する私達を見つめる目が、最近良く覚えある温かさに変わったことに気づいたわ。

そんな保護対象を見つけたような視線をどうして、と考えていたらキョンくんが、とんでもないことを言い出したの。

「それにしても、谷口と涼宮は仲がいいな……」

「二人はカップル、っていう話もあるけれど、どうなんだろうね」「むぐっ！」

根も葉もない噂に思わず、私は甘くもなく塩っぱくもないご飯の塊で喉を詰まらせたわ。

でも、流石は喉に刺さった魚の骨を取るのに呑み込むことを推奨されたりするだけはあるわね。存外お米は通りが悪くなく、おかげで窒息することなく命拾いした私は叫んだの。

「……違うわよ！ こいつとは、ただの腐れ縁の友達同士。それこそ、国木田くんとキョンくんの仲みたいなものよ！」

私は潔白を、実にわかり易い例えを出して、鮮やかに証明したわ。友人関係に余計な詮索を持ち出すことなんて、いやらしいことだと思ふの。異性同士が並んでいたら、そこに恋を考えるなんて、小学生みたいな浅はかさだわ。皆も、私みたいに大人になってくれたら良いのに。

同意を求めようと谷口の方を見つめたら、何やら微妙そうな表情をしている。どうしたのかしら？

「あはは。だつてよ？　谷口」

「はあ。お前ら……お願いだから、これ以上余計なことは言ってくれ
るなよ？」

「やれやれ……」

そして、起こったのは、男同士の謎の結託。彼らは、何か私に分か
らないことを理解しながらツーカーで会話してる。

私はあんまりな仲間はずれっぷりに憤るよりも、むしろ混乱した
わ。

「何、何なの？」

しかし、答えは返ってこない。そして曖昧はそのまま食事終わしま
で続いたの。ひよつとして、私、馬鹿にされていたのかしら。どうに
もモヤモヤするわね。

やがて話に混じらなくなった私を他所に同性同士の気のおけない
会話、という奴が始まったわ。次第に、黙ってキョンくんをこっそり
見つめるのにも、飽きてきちゃったの。

何だか私は疎外感を抱いて、私は彼らに一言告げてから席を立つた
わ。

「それじゃ、私ちよつと行くから」

「ん」

「またな」

さて、休み時間の残り、どうしましょうね。私は教室から出て、そ
して一年五組のプレートを見上げながら、伸びをして一息ついてみた
わ。

最近ちよくちよく声かけられてることだし、朝倉さんとお話でもし
ましようか、とか私はのんびり考えてみたりしてみる。どちらにせ
よ、一人になる選択はないわね。

「涼宮さん」

「わ」

そうしていると、知らずとここと付いてきていたらしい国木田くん
が、私に耳打ちしてきたの。

びつくりした。それにしても、ちよつと近いわね。

しかし敏い私は距離感から内緒話と気づき、大人しく耳を傾けたわ。

「何？」

「昔からキヨンは、変な女の人が好きなんだ」

「どうしたの、急に……」

「でもね、キヨンは鈍感だから、そのことに気づいていないんだ。僕は、それがもどかしくも思うよ。……涼宮さんも、自分の気持ちには正直に、ね」

何やら訳知り顔の少年に、私は先程からざわめいていた胸を更に困惑で歪めたの。国木田くんは何を知っていて、そして私は何を知らないのか。

とりあえず、私は首をひねったわ。そして、彼が居なくなつた後に、オウム返しをしてみる。

「正直、ね……」

私は何となく、彼の言葉を覚えておこうと思った。

そういえば私、「あたし」にならつて、北高の部活動全制覇を目論んで、行動していたりするのよね。

仮入部して回る私に、付いてこようとした変わり者も居たわ。けれど、私みたいにズバツと断ることが出来なかつたのか、その子は直ぐにコーラス部に居着くことになつてしまったみたい。

ちよつと、残念ね。確か、阪中さんつて言つたかしらね。身長高かつたし運動神経も良さそうだったから、バレー部とかの方が似合いそうだったのだけれど。

まあ、良いわ。そもそも才色兼備の私がSOS団に似合うと言うかといえば、そうでもないのだろうし。要は、楽しめるかどうかよね。そして、私がこの仮入部の繰り返しを楽しんでいるかというところ。

「ああ、どこも面白かつたわ……これは本命がなかったら、最初のテニス部で決めちやつたかもしれないわね」

楽しく感じた部は、正直なところ、全部。いや、だって運動はそも

そも好きだったし、手芸もパソコン等の文化系の活動もいざ関わって
みたらどれも奥深くて夢中になっちゃったのよね。

だから、きつと仮入部した子たちの中で一番に楽しんで、そうして
から来てくれるものと確信を持った部員たちの勧誘を渋々断ることを
続けている私は、これまた上級生の間で語り草になっているみたい。
い。

あの新入生は、一体どの部に入るのか、とか予想されているみたい
よ？ ま、私は大穴というか枠外のSOS団を創ることになるんだけ
れどね。

「で、次は文芸部、かあ……休部寸前とのことだけれど……」

眩きながら、私は次の仮入部先である、部室棟へと足を進めていく。
三年が卒業して部員ゼロとなり、このままでは休部する筈だったこと
ろに、滑り込みセーフで入ってきた一年生が一人居る筈の、文芸部室
に私は向かったわ。

休部予定だったから体育館壇上での部の説明もなかったし、虱潰し
に聞き回っただろう【あたし】や事前にその存在を知っていた私でも
ない新一年生達には、文芸部の存在すらあまり知られていないのよ
ね。

それが宇宙人的な正体を隠すための迷彩になると思ったのかしら。
それとも、ただの趣味？

私は、ここを根城にしているだろう長門有希さんのことを思った
わ。バックアップを対象の近くに置いて、自分は思索に耽る、そんな
少女を。

長門さんとは、それなり以上に深度のある付き合いをしなければい
けない。頭に込められた情報ばかりから彼女の人畜無害さばかりは、
私は知っているけれど。でも、やっぱり不安。

「……気が、合えばいいのだけれどね」

だから、そればかりを願い、私は傾げたプレートに文芸部と書かれ
た扉を開けたわ。

「失礼します」

まずは、天井に走るひび割れを発見してから、そしてスチール製本

棚の、その意外な中身の無さを認めて、私は視線を下げる。

折りたたみテーブルに、パイプ椅子。私はその合間に、柔らかな人影を見つけた。

「……」

そして、私は新雪を見た。何者にも汚されていない、役割に尽くした人型。私は長門有希の黒い瞳を眼鏡越しに、覗く。そこには、私以外に何も映ってやしなかった。

白い少女は、美しいばかり。ただただ稀なそれに、私は憐憫を覚える。

止まった私を見て、困惑一つ表すことなく長門さんも、停止する。やがてしばらく経ってから、彼女は一言。

「ようこそ」

「あなた……」

機械でない少女が、機械的に歓迎する。そこに、私は長門有希が抱えた闇を見つけて、絶句する。その暗がりには楽しみがない。世界が、映っていない。

この無垢を、三年も放置しておいた？　なんて冗談なのかしら。私は知らずに噛んでいた奥歯がぎりりと鳴ったことに驚いた。

「ごめんなさい」

反射的に、私は謝ったわ。けれども、何に対してか不確かなそれに長門さんが反応することはなかったの。

彼女がその細い指先で、分厚い文庫本のページを捲る音が続いている。そして、世界に対する無関心も、また続いていくわ。

私は甘かった。もつと、この世を塩辛く思っていれば、きっと長門さんと共感できたはずなのに。私が「あたし」だったら、彼女の慰めになったのかしら。

私の砂糖と塩は入れ違い。知らずに、間違っていた。でも、それでも正すことだって出来るはずなの。それに必要なのは、唯一つ。

「最近、自分の気持には正直に、って言われたのよ」

「そう」

至極どうでも良さそうに、長門さんは答える。そして、本当に、私

の眩きなんてどうでも良いのでしょうか。それこそ自分のことと、同様にして。

でも、そんな彼女は私にとってどうでも良いものではなかったの。

私が「涼宮ハルヒ」であることとか、そんなことは関係なく、私は長門有希を放って置けない。

「ねえ、長門さん。お友達に、なりませう？」

笑顔なんて、作らなくても沸き起こるもの。それを教えたくて万感持って、私は言った。情報の上を滑るばかりだった瞳が焦点をずらして、私を見つける。

「ユニーク」

彼女ははいともいいえとも答えずに。ただ、それだけ言ったわ。

沢山集めた砂糖と塩はまるで、スノーパウダー。それを丸めて固めて……ほら、甘じよっぱい雪だるまが、出来上がった。

第四話 うさぎ≠ウロボロス

「いやあ、書道っていうのも意外と面白いものなのね！ 習字の宿題のつまらない思い出しがなかつたけれど、勝手に書いていいとなると、途端に自由になれるって驚き！」

最初は、正直なところ大して実りを期待しなかった、連続仮入部でも、私、とつてもハマっちゃったわ！

よく考えたらそりゃあ、多くの学生達が青春の大事な一部である、放課後を捧げてもいいと思う程には中毒性のある活動達なんだもの。どれもこれも楽しくって、当然よね。

そして、何だか古式ゆかしさに囚われて身動き取れないくらいに窮屈なんじゃないかな、と思っていた書道部の活動も、中々に私を楽しませてくれたわ。

いや、用紙これ一枚じゃなくてでっかく繋げたら凄いの書けるんじゃないかしら、という私のインスピレーションが書道に収まっていたかは疑問だけれど。

まあ、周囲からは白い目線が多いわね。でも、多くの呆れの視線の中で、私に付いてくれた上級生の女の子——鶴屋さんっていうらしいわ——は、笑顔で私の力作を認めて、こう言ってくれたわ。

「いやあ、それはハルにやんのスーパー発想にも原因があると思うよ？ 好き勝手にいいって言われた途端にわら半紙をくっつけて、筆先の墨汁擦り切れるまで自分の名前を引き伸ばした挙げ句にウロボロスを召喚したのは、あたしも驚きっさー！」

「違うわ、鶴屋さん。この子は、自分の尻尾を掴もうとしている猫さんよ！」

「おお、これが正しくハルにやんって訳だねっ！ めがっさおっもしれー！」

鶴屋さんは、腹を抱えてケラケラ笑ったわ。うーむ。ちよつと猫にしては細すぎたかしら。でも、二度書きはいけないうって聴いたことがあるし。難しいわね！

私は新聞紙の上で一回転繋がったわら半紙——後でこれ涼宮サー

クルって名付けられたみたい——を回収しながら、あれこれ悩んでいたら、再びやたらとテンション高い鶴屋さんが声をかけてきたわ。

いや、どうにも鶴屋さんは好意的ね。彼女も私みたいに何か特別を隠しているとかあったら面白いのだけれど……まあ、流石にそれは望み薄ね。彼女がSOS団のメインメンバーという記録は私の中にはないし。

だからまあ、とにかく明るいこの気が合う先輩とは、普通に関わりますしょう。一緒に楽しく、ね！

「いやあ。こつちもこつちで噂の仮入部してきた子を楽しませてあげようと、書き初めイベント用のでっかい筆を用意してたりしたんだけど、こりや先に一本取られちゃったなー」

「なら、三本勝負にしたらどうかしら？ 景品はそう……そこの、何だかビクビク私から隠れているけれど、色々と隠せていない女の子とかどう？」

そして、私は明らかにお尻とか大ぶりのおっぱいとかを女の子部員達の合間からちらちらさせている朝比奈さんを指差したわ。彼女、こんなところに最初は入部していたのね。驚き。

私が見すと、朝比奈さんはびくつと大きめに震えたわ。ごめんね。でも、私が貴女を欲しているのは本当なの。

私にこりとしたら、朝比奈さんはさらに引つ込んでしまったわ。いや、だからいくら小柄でもそんな隙間に入るの無理だつてのに……あ、やっぱりおっぱいが引つかかった。

ガタガタやってる朝比奈さんを見て、鶴屋さんは大きく目を開いたわ。そして、感嘆に似た声を上げたの。

「んー？ ああ、みくるかあ。ウチ一番の踊り子を見初めるなんて、ハルにゃんはつくづくお目が高いっさー！」

「えっ。やっぱりわたしなんですかー！」

鶴屋さんは、どうしてだか震える少女に向けて、私よりも上手な子守のするような笑顔を見せたわ。そして、彼女は朝比奈さんをかばうように手を広げたの。

むむ、これじゃあ私が悪役みたいね。私、「涼宮ハルヒ」は多分、主

人公か何かだと思ってるのだけれど……違ったらいやだわ。

「みくるは安心するんだねっ。幾らハルにやんと言えども、そうそうこの子を渡してなんか、あげないよ！ 鶴屋流の技の数々、今見せてあげるよろっ」

「ふふ、鶴屋さんのお手前、拝見するわ！」

「わわわ。な、なんだか大変なことになっちゃいましたー！」

驚く朝比奈さんを尻目に、私達は発奮する。

鶴屋流が何か知らないけれど、私にだって涼宮流のやり方というものがああるわ。条件は互角なはず。

おもむろに取り出した大筆を、剣のように鶴屋さんは構えたわ。私はセロテープで繋がった半紙を広げてヌンチャクのように変えてみる。

さあ、先手は譲るわ。かかってらっしゃい。私達の戦いは、これからね！

……………

「続きは」

私が少し前の戦いで起きた情動を思い出して、思わずそれに浸って黙していると、隣を一緒に歩いてくれている有希が、そう言ったわ。

ああ、いけないいけない。何だか普段よりも意思の光を覚える黒い瞳を覗き込んでから、私は続ける。有希が、ちよつとでも話を楽しんでくれていたら嬉しいんだけど。

「後は、そうね。まずは鶴屋さんが部室カンブリア紀染めで私から一本取って。その後鶴屋スプラッシュと、涼宮サイクロンの激突が引き分けたことで、戦いは終わったわ。……二人してびちよびちよの部室を片付ける役目を任されたのを引き換えとしてね」

「ユニーク」

有希の口からユニークが、また出たわ。私の前だとよく言うのよね。口癖なのかしら？

それにしても、鶴屋さんは強敵だったわね。戦慄とともに、数十分前の光景を思い出さざるを得ない。

鶴屋さんが大量の大筆を存分に使って、書道室に太古のウミユリを再現したことには、本当にたまげたわ。そうしてから彼女が真似したハルキゲニアを合わせると、最早部室はカンブリア紀そのものだったわね。

しっかし、ハルキゲニアは鶴屋さんがやったみたいなのにガオーって鳴くのかしら？ 一度直接見てみたいものね。朝比奈さんは知ってるかしら……あれ、そう言えば三年だか前の過去に時間断層があるとかいう情報もあったような……むむ、だったら無理かな。

その後、和紙っていうデリケートなものを扱っている部室で水と新聞紙のぶつかり合いという、やりすぎたおふぎけを演じてしまった私達は、職員会議から帰ってきた顧問の先生に大いに叱られることになったのよね。

なんでか、トロフィー役をしていただけの朝比奈さんまで怒られることになってしまったのは申し訳なかったわ……そりゃ、私も片付けを真摯に行うってものよ。

まあ、スケスケになっちゃった制服を体育着に着替えるのはちよつと手間だったけど。その時に鶴屋さんの中々のグラマーさに益々ライバル心を滾らせたのは、蛇足かしらね。

そんなこんなで待ち合わせに十分ばかり遅れた私を快く許してくれた有希には友情を禁じ得ないわ。揺れる小さなボブカットに抱きつかんとする衝動を抑えるのは大変ね。

いや、私だって彼女が思惑を持って私と付き合ってくれているのだろうというのは分かっているのよ。友達になろう、というのをOKしてくれた理由が興味でしかないのは、しょうがないわ。

でもね、いくら今は形だけだって、友達になったからには楽しさを分けてあげたいと思うのは、自然じゃない。私はこのまだ冷たくカチカチなはじめての女友達に、何気負うことなく笑顔で続けるわ。

「ふふ。今日は引き分けだったけれど、何時かあの子を手にしてみせるわよ！」

「……手段と目的が変わっている」

「なあに、有希だったら目的とか手段とか、そんなちよつちやなことを考え

てるの？ 確かに、より楽しむために持ち出しただけの朝比奈さんだけど、そっちも抱きしめちゃっていいじゃない。私は強欲なの」
「そう」

それにしても有希ったら、饒舌とはいかないけれど、意外と相槌を打ってくれるから助かるわね。自分のことを言うてくることさえないけれど、私の言葉に耳を傾けてくれているのは間違いないのが、嬉しい。

あ、そういえばこの子、宇宙人っぽい何かすごいもののインターフェイスだったわね。今やそんなこと、どうでもいいけど。私は、普通に有希のこと、気に入っちゃったし。

でも強欲な私はもうちよつと、と考えてしまうわね。物理的な距離だけじゃなく、心近くあってみたいもの。何しろ遠慮無しで、付き合って喜ぶのも、友達同士のたしなみじゃない。

私も友達は少ないけれど手本を見せられたらなあ、とか考えていたら、偶々なのかしら……いいや、あいつストーカーの気があるからきつと狙い通りなのかしらね。校門を出たら近くに、谷口が居たの。

私を見た谷口は、門柱に預けていた背中を退かして、へらりと笑って手を振ったわ。相変わらず締まりのない口元ね、と思いつつ、私は手を振り返してあげた。有希も、そんな私達の様子を見ていたわ。

「よう、涼宮」

「あ、谷口。なあに、前にもう大変だから良いって言ったのに待っていてくれたの？」

「ちげえよ。たまたまだ。ん？ その隣に居んのは……」
「……………」

その時、男女のデートの待ち合わせの言い訳みたいに嘘くさいことをほざいた谷口の茶色い瞳が、横にずれた。ずっと私の隣に居たのに遅いわね。やっとこいつは有希を見つけたの。すると、彼の眉が嫌な風に歪んだわ。

あ、そう言えば当たり前に備わっていたから今まで口にするのも気にすることもなかったのだけれど、私って実は読唇術を軽く修めたりするのよ。遠くのは流石に分からないけれど、これくらい近

かったら、間違わないわ。

そう、谷口の口元は私に聞こえるまでの言葉紡がずとも確かに、なんだそっちかよ、と動いたの。

どういうことかしら？

「何？」

「いいや、なんでもねえよ。うさぎの世話、精が出るな」

「何、それって有希のこと？ たとえ下手ねー。有希はとっても可愛いけれど、うさぎさんっぽくはないわよ」

私の質問を素気なく切り捨て、谷口は何かこう、強い感情籠もった瞳で有希を見てる。何よこいつ、と思って私はその視線を体で遮るわ。

それにしても、どこから谷口は有希をうさぎさんと評しているのでしょうかね。

男の可愛いのと違って、皆うさぎさんになっちゃうものなのかしら。それともこいつの趣味？ バニーさんはちよつと……色々足りなくて似合いそうにないし、有希を彷彿とさせないわよね。

訝しがる私に、しかし、谷口はその話題を引つ張るわ。切っ先を有希に向けて。

「似たようなもんだろ？ なあ」

「……貴方の認識には、大いに齟齬がある」

「そうかい」

応じ、私の後ろからずいと出てきて、有希は反論する。それに、軽く矛を収める谷口は、それはそれでらしくないわ。

有希の黒い瞳を受けて、谷口は、ニヒルに笑う。むむ、似合わないわね。もつと、アホらしくしているのが合っているのに。

「お前らの邪魔してもアレだし、俺、帰るわ」

「そう？ じゃあね」

「おう」

やがて、至極あっさり谷口は踵を返して戸惑い立ち尽くす私から離れていくわ。一体全体何か、気にかかるわね。

私とその丸まった背中どんな声をかければ良いのか悩んでいた

ら、代わりに有希が平坦に声をかけたの。

「……気をつけて」

「お前に言われるまでもねーよ」

それは、どこか険のある声色だった。何だか普段のお友達と離れてしまった谷口に、告げる言葉を迷っている間に私は彼を見失う。青年の姿は次第に低く、坂の下に消えていった。

何だか誤ってしまったような気がしながらも、私は何だか訳知り顔……とは見えない感情一つも無さげな何時もの表情ね、でも先の言動は谷口と以前から関わりありそうに見えたわ……の、有希に聴いたわ。

「何、あなた達、知り合いだったの？」

「別に」

しかし、有希はあいつとの関係を否定したの。まあ、あいつと一緒にされるのが業腹なのは、何となく分かるけれど……ま、そんなことじゃないか。

喋りたくないのかしら。それなら、いいでしょう。そういうことにしてあげる。

「うーん……何だか釈然としないけど……有希がそう言うなら、信じらるわ」

「……何故」

そうしたら、意外にも有希に小さな反駁が起きたの。私はその疑問に、幼子の感情のきざしを見つけたいに笑んだ。

「そんなの、決まってるじゃない！」

私の笑みは太陽の満面ではないだろうけれど、月には届いてくれるかしら。そう考えながら、私は肩に両手を置いて、顔をずいと有希へ近寄せてから言い張るわ。

その、真つ黒な無垢に自分を溶かしてあげるように真つ直ぐ、好意を向けて。そうして伝える。

「私が有希を、信じたいから」

そう、結局、私は好きに従いたい。それは【涼宮ハルヒ】らしいとはいえないかしらね？

ウロボロスのように、うさぎは自分を齧れない。故に何の相手もなく、彼女はそこで独り、辛さも知らずに待っていただけ。そんな、無垢を感じ取れるような、有希が私は好きだった。

本当は有希が嘘を吐いていても、黙っていても、そんなの知らない。私は強欲にもありのままの彼女を呑み込むの。私が傷ついたって、ちよこつと辛いだけ。好きなら、そんなの我慢できる程度でしょう？
「ユニーク」

ぽつりと言う有希にはやはり、表情というものはなかったわ。けれども彼女はまた一つ、私を受け容れてくれたようだった。

だって有希は初めて、私を【視て】くれたから。

そこには、自己完結したぐるぐる無限機関じゃなく、月どころではない遠い宇宙(そら)から落ちた一羽のうさぎがぽつんと座っていた。寂しくも、彼女はただ三年もずっと、そうしていたのだ。

第五話 お天気おねーさんの嵐

前の席に座る人のつむじの観察にばかり時間をかける女子高生つて、そうそう居ないと思うのよね。でもまあ、それが好きな人相手であつたら別じゃないかしら。まじまじと観察してみたところ、キヨンのつむじは右巻きだったわ。

そして、キヨンくんが結構授業中に視線を彷徨わせていることも、存外気遣いを見せることが多いっていうのも背後に陣取った観察によつて理解した事実ね。

「はあ……」

でも、知れば知るだけ、ため息が出てしまうもの。想う相手のパーソナルな特徴を会話以外の手段で回収している私は、どうにもシャイなのよね。

それこそ「あたし」みたいにキヨンくんというあからさまな優良物件に突撃訪問なんて出来ずに、一々谷口の仲介を望んでしまう私はきつと「涼宮ハルヒ」に向いてない。

そうだとしても、いい加減、勇気を出さなくちゃ。毎日毎日天気の話題ばかりを持ち出して、そうして尻すぼみに会話を終えてしまう私を彼は青春のページに、後ろの席の奇妙なお天気おねーさん、と記憶して終わり、っていうことになりかねないし。

あ、心を決めたちょうどいいタイミングで、キンコンカンコンとチャイムが鳴ったわ。

声を掛けそびれた前の休み時間の終わりから、授業の最後までずっと悩んでいたせいで、授業の大体を聞きそびれてしまったけれど、そんなのどうでもいいことよね。忙しくなりそうだったから、高校一年の勉強くらいは大体受験期間に予習済みだし。

私は腕組みの姿勢をといてから、立ち上がる。そして、格好良く成長しちやったあの日の彼に、声を掛けたわ。

「キヨンくん！」

「ん？ なんだ涼宮。今日は降水確率ゼロパーセントだぞ」

「そうなんだー、雲が多いお天気だけどやっぱり雨は降らないほうが……って、今日の私は別に天気予報をして欲しい訳じゃないのよ!」
「違うのか。なら、谷口か。あいつなら柳本と話しだしたみたいだぞ。最近あいつら妙に仲いいよな」

「ホント! なになに……今日の涼宮黒歴史シリーズは……って、谷口、なに人の話で盛り上がってくれちゃってるのよ!」

でも、中々本題に入ることは出来なかった。気を利かしてくれたつもりなのだろうけれど、キョンくんが持ち出してくれた話題の全体的外れで。

まあ、お天気の話が出てきちゃったのは自業自得だけれど、谷口が出てきたのはどうしてかしら。それにしても、アイツはまた人の話を吹聴して回っているのね。いや、私が中学生生活中に相当やらかしたのは確かだけれど、誇張するのはよくないでしょうに。

私の大声に尻尾を巻いて教室から逃げ出した谷口の姿を鋭い目で追っていると、酷く呆れた声で、キョンくんは呟いたわ。……この気怠げな声、私、好きかもしれない。

「やれやれ。読唇まで出来るのか……涼宮はやたらと多芸だよな」

「そうかしら? 私ジャグリングとか結構下手よ?」

「別に、遊芸のことを言ってる訳じゃないんだが……ああそういえば、涼宮が全部のクラブに仮入部しようとしている、っていう噂は本当なのか?」

「ええ。いい情報筋から聞いたのね、それは本当のことよ」

「国木田はいい情報屋だったのかよ……ちなみに悪い情報筋つてのは、谷口のことか?」

「そうよ! アイツは面白おかしく話を盛りたがるんだから!」

「やれやれ。谷口も不憫だな……」

私は何とかキョンくんと目を合わせながらも照れることなく、会話を続けられたわ。でも、話が逸れちゃったわね。

これも全て谷口のせい……といたいけれど、本当は私のせいじゃないかしら。

友達少ない人は、人間関係が希薄だからどうしても、話題に出てく

る人が少なくなっちゃうのよね。それは仕方がないことかもしれないけれど、相手を飽きさせてしまつては、いけないわ。

これからは、谷口NGの会話を心がけないとね。……それも何だか可哀想だけれど、まあ練習にはなるでしょう。

何やらあいつに同情しているキョンくんを無視して、私は強引に話を戻したわ。

「それで、私が仮入部を繰り返してるんですが、どうして気になったの？」

「あ、そうだ。参考にしたくてさ。どこか面白い部があったら教えてくれよ」

「面白い部ねえ……テニス部も野球部も、映像研究部もコンピューター研究部もなんだかんだ全部、面白かったけど？」

「てつきり面白い部が見当たらないから巡り回ってるのかと思つたが……全部面白いつて感想もそれはそれで、フラットすぎて参考にならんな……」

何だかカレー粉を舐めたら漢方だったかのような、そんな苦み走つた表情をしてからキョンくんは立つ私を見上げたの。

そして半端に上げていた腰を下ろしてから、私も自席に座るように促したわ。何か違うなと感じながらも話、もつと聞きたいのかしらね。

それにしてもひよつとしてこれは私がキョンくと会話した最長記録じゃないかしら。よし。このままゴーゴー、ね。

「なんだ。でも、涼宮はこの部に行つても活躍を見せるつて聞いているぞ？ ……まあ、書道部ではやらかしたとも聞いたが」

「その節は、反省してます……」

「それは置いておくとしても、どれにも適性があつて面白かつたつてんなら、よりどりみどりつて感じだよな。中でも今涼宮が高校生活中に打ち込みたい部活動つて、なんだ？」

反省の項垂れを無視してキョンくんは続け、私が入りたい部活を聞いてきた。それには、こう答える他にはなかつたわ。

「ない、のよね……」

「ない？」

そう、ないの。正確には、今はまだ存在しない、ということなのだけれど。ああ、SOS団って、何時創るのが正解なのかしら。

流石に、今直ぐ創りたいって言ってもキヨンくんは手伝ってくれないでしょうね。未だ友達友達、って感じだし。

まあ取りあえず、種だけでも撒いておきましょうか。伏線でも良いかな。ふふ。私は策士なのよ！

しかし、恐る恐るを装おうとして、実際演技することに気が引けたせいか抑え気味に私は始めたわ。

「あのね、私……自己紹介で言ったこと、あったでしょ？」

「ああ、途中から早口過ぎて聞き取れなかったが、確かあの宇宙人やらなんやらがどうのつて奴か。……いや、あれって冗談だったんだよね？」

「冗談じゃなくて、本気よ！ 本気で、宇宙人や未来人とかと遊んでみたいのよ！」

これは、掛け音ない私の本音。思わず、地団駄までしてしまったわ。あ、ついちっちゃな閉鎖空間を創っちゃった……ごめんなさいね。謝罪代わりにとつてもよわよわな神人を出しておくわ。

でも、目の前に宇宙人やら未来人が居るというのに、超能力者だつて来ることだつて知っているのに、【涼宮ハルヒ】らしくするには彼らに気づかないようにするのが必要というのは悔しくつて仕方がないの。

ああ、早く皆と遊びたいな。有希と一緒に楽しいけれど、やっぱり欲張りな私はそれだけで一杯になれない。テキスト的だったとはいえ、あの眩い未来の記録を目にしてしまったからには、ね。

異なる、が仲良く一室にて遊ぶ。そんな素晴らしき世界。ああ、それこそ私の理想なのよね。

私の本気を見て、そつと宙を見て何やら考えたかと思うと、ふと苦笑いを零してからキヨンくんは言ったわ。

「いや、まあ気持ちは分からないでもないが……だが、そんなもん、そうそう見つかるものじゃないだろ？」

「そうなのよね……でも、遊びたいのよ……そういう関係の活動がしたいの」

「やれやれ……涼宮はミステリや超常現象研究部、みたいなのは行っただのか?」

「それはもう、真つ先に。でも、ちよつとインドア系なのよね。資料で満足しちゃってるというか……いや、確かに面白いし興味深い内容だったけど、それは私の求めるものとは違うのよ」

奇つ怪な記号の海を泳ぐのも別に良いのだけれど、ちよつと一緒するには了見が狭すぎたのが難なのよね。いや、ツチノコを草の根分けて足元を探すこともしないで、居ないからロマンがあるとか語る彼らには、ちよつと私もついて行けなかったのよ。

それに何しろ、私自身がミステリーな超常現象そのものだったりするし、捕まっつて解剖でもされたら、堪ったものじゃないわ。

「なら、それはもう……」

「あら。二人とも、随分と仲が良さそうね。何の話をしていたの?」

私に向けてキョンくんが何か口にしようとした時。丁度そのタイミングで長髪美人のお出ましがあつたわ。クラスメートの中でも一番親しくしてもらっている、フレンドリーが形になったようなこの女の子は、朝倉さんね。

可愛い女の子の前でおかしな話をしたくないのか口を鎖したキョンくんを見て、最長レコードが途切れたことを知った私はちよつとがっかりとしてから、気持ちを切り替えたわ。

彼が止めちやつたなら話の続きとして、ダメ元で聞いてみましょうか、とか思っただのよね。友達同士とする、格好良い男の子紹介してよ、みたいなノリで私は朝倉さんに尋ねたわ。

「ねえ、朝倉さんつて宇宙人の友達は居ない?」

「……急にどうしたの?」

そうしたら、何か朝倉さんは酷く微妙な顔をしたの。まあ、それはそうよね。誰だつてあんたの知り合いにUFO乗りが居るかどうか聞かれたら、返事に窮するのは当たり前。

朝倉さんが私の正気を疑わなかったのが、有り難いくらいね。私は

言い訳するかのよう続けるわ。

「あのね。ちよつと私達、不思議系の話をしたのよ。前言ったみたいに宇宙人みたいな人と遊びたいから、なんかそんな知り合いに心当たりはないかなー、って」

「うーんと……知り合い？　宇宙人云々は兎も角、私、涼宮さんと同じく長門さんとは親しくさせて貰っているわね」

「それ、ホント？　私、有希から聞いていないわ」

「ふふ。私は長門さんに、涼宮さんのこと、よく聞いているわよ」

本当かしら。あの有希が私に語るほど興味を持っているっていうのは眉唾ね。というか、あの子、未だに私相手にワンブレスで吐き出せる以上の言葉を駆使してくれたこと、ないのだけれど。

うう、もしかしたら私、有希に嫌われていたりしていないかしら。いいや、つい先日信じてるって言うておいて友達を疑うなんていけないわよね。

頭を振って余計な考えを振りはらってから、気を取り直して私は朝倉さんに聴いたわ。

「それにしても有希と朝倉さんって、どうにも不思議な組み合わせね。どういう縁で知り合ったの？」

「マンションが一緒なの。時々顔を合わせていて、それで仲良くなったのよ。長門さんって意外と無精でご飯をないがしろにすることもあるから、時々作りに行つてあげることもあるのよ？」

へえ。私のクラスの委員長が私のコスモチックフレンドと知り合いないって、そんなこともあるのね。

私、自分のやるべきことは兎も角として、有希については宇宙的な子だつていうことくらいしか頭に情報がなかったから、その周りの人間関係って意外と未知だったのよ。

それに、これから色々楽しんで生活が待ってるみたいだけれど……：：：：そういえば、どんなことがあるかどうかってのは今ひとつ不明なのよね。判るのも私の味方ばかりで敵が不明というか……ひよつとしたらこの世界にそういうものはないのかな？

或いはネタバレ防止でもされているのかしら。だったら、面白いわ

ねー。ちよつとこれからが楽しみになってきたわ。

……そう。この時私はそんなに呑気なことを考える余裕があつたのよね。

「……すまん。お前らの話題に出ている長門って何者だ？」

そして、私はすっかり蚊帳の外でふてくされていている様子のキョンくんにようやく気づいたわ。あ、ごめんね。でも、キョンくんに対する好きと同じくらいに、有希に対する好きも大事だから。

そんな私の壊れた秤を知ってか知らでか、笑顔を作って朝倉さんは訝しげなままのキョンくんに説明したわ。それに、私は追従して補足する。

「ちよつと物静かだけれど、面白い女の子よ」

「そして、私達の友達！ もう、メガネが似合うとつても可愛い子なんだから！」

「……それってまさか、あいつのことか？」

「え？」

すると、キョンくんは私達の後ろ、死角になっている入り口の方を視線で示したの。そうしたら、開いたドアの一步手前で所在なさそうにしている有希の姿が見て取れたわ。

驚いて、私は有希に駆け寄つたの。私でも、表情を変えた朝倉さんを見る限り彼女が呼んだわけでもないのに、あの家への行き帰り以外には物静かな置物のようだった彼女が、自らの意思でこの教室に来た。

そこに、意味深さを感じないのは、あり得ないでしょう？ 自然、声が大きくなるのを感じながらも私は彼女に問うわ。

「有希！ どうかしたの？」

「………信じて欲しい」

「………長門さん？」

それは、雪中を割いて出た芽吹き。自我を圧する三点リーダーの群れを押しのける、意思。そして、少女の冒険だった。

今日は晴れ。そんなの嘘。大きな嵐が待っていた。

「わたしは、宇宙人」

私達の前で、彼女はそんな、爆弾発言をしたわ。

第六話 フラクタルに謎

私の心ひとつで世界は変わる。それこそ、文字通りに、ね。

願いが叶う。それはとっても嬉しいこと。でも、当たり前にも何もかもが成就しすぎると、つまらないと思うの。影響力が強いつていうのも良し悪しね。私の中での暫定だけど、主人公つてのも大変だわ。

そう、よく分からない内に「あたし」から神様にすら似た力を持つ【涼宮ハルヒ】のバトンパスを受けてしまった私は、右往左往中。未来記憶の中の【涼宮ハルヒ】にならつて不思議に対して知らんぷりを決め込もうかと思っただけど、そうもいかないみたい。

「信じて欲しい、かあ……そんなの、信じるに、決まってるじゃない」
向こうからドアをノックしてくれたのなら、応答するのが正しい態度。最低でも、私はそうするわ。だから、私は有希に対して、真摯に応えようと思うの。それに何しろ、友達相手なんだから、本気で当たって当たり前よね。

私は思いの丈を、素直に有希へと真っ直ぐにぶつけたかった。「なるべく早くに伝えたかったけれど……先に帰っちゃったのは、残念ね」

けれどもその意気は、空振ったわ。あの後直ぐに鳴ったチャイムの音で返事を受け取りもせずに五組に戻った有希は以降現れずに、朝倉さんに家の用事があると付けを付けて、先に帰っちゃったの。……きつと、それって嘘よね。

どうしてバラしたんだって、宇宙人の親玉みたいなものから叱られたりしていないか、ちよつと心配。

私は、今日仮入部してみたハンドボール部にて、何でお土産として頂いてしまった小ぶりのカラフルだったろうボールを手の上で遊ばせながら、漫ろに帰り道を行くわ。

練習で掴まれ投げられ過ぎたのか、擦り切れて汚れきったボール。岡部教諭に、初心者には傷があるくらいの方がひよつとしたら掴みやすいかもしれない、と言われて渡された後、一度でゴールに突き刺さることに成功したこの球に、私は愛着を持っているわ。

記念球、つていうのかしらね。ひと度素敵な経験を共にしたら、それはもうぼろぼろの球だって、捨てがたいものになるのよ。私はそれを、鞆の隙間に大事に押し込んだ。

似たように、友達つていうのも共に経験を重ねることで、大切さを増していくものだと思うのよね。だから、こんな程度では足りない。少し前まで独りでも平気だった帰路が、今やあまりに無味乾燥に感じられてならないわ。

「……寂しいな」

眩きは、勝手に漏れた。それに対する返答は、もちろんなかったわ。「宇宙人、かあ」

今は空の青に溶けてしまい、向こうに広がる浪漫を伺うことも出来ない空を見上げる。暗黒に負けない星々の輝きの美しさを、昼間はこれっぽっちも見取れないというのは残念よね。

もももやっとしていいる雲を見つめるのも面白くはあるのだけれど。でもやっぱり宇宙つていうのは素敵。

思えば最近の私は、有希のことをただの女友達と捉えていたのかもしれない。しかし彼女はそうでもあるけれどそれだけじゃない、もつと唯一性の高い神秘でもあったのよね。

だから、恐らくその前に私達がしていた話を聞いていただろう有希があえてそのことを私に告げたということは。

「やっぱり、朝倉さんが言ってたように、もつと私に構って欲しかったのか……」

有希の宇宙人発言に、あの時その場に居た面々は、度肝を抜かれたわ。それこそ、始業チャイムが鳴ることさえなければ、ずっと静止していたのではないかと思えるくらいに、沈黙が降りてた。

ただ、私というやらかしの前例があったから、次の休み時間にはもう殆どが有希のことを忘れてくれていたようだったのは、不幸中の幸いかしら。

でも、後でキョンくんは有希のことを確かに面白い女の子だったな、と言っていたわね。そして、朝倉さんは、長門さんつたらよっぽど涼宮さんに懐いたのね、あんな冗談を言うなんて、と話したわ。

まあ、確かに内情を何も知らない人にはそう思えるわよね。まさかあれが、宇宙人が監視対象に自分の正体を告白している場面だなんて、考えないわよ。

でも、あえて有希はそれを言った。その意味を、私は寂しさのせいと取ったけれど、当たっているかしら。不安ね。

「……明日また、会えると良いけれど」

それは、切なる望み。

けれど、私は自分の中の怪力乱神な力なんて無粋なものには願わない。ただ、私は彼女の無事を、思う。

私が坂の上から見下ろすのは、人の営みのフラクタル。全ての大事小事は当たり前前に似通っていて、それでいいの。それらは「あたし」が抱いていた感想のように、つまらないものでは決してない。

総じて美しい、世界の全て。そこに、余計な力みはいらないのよ。無理に作った笑顔より、自然に浮かんだものの方が、良いに決まっているでしょう？

私の好きなものの中に、デウスエクスマキナは要らないの。まあ、私も人間だから、いざとなったら「涼宮ハルヒ」の力を頼りにしてしまうのだけど、でもそれは今じゃないわね。

「別に力が私、という訳じゃないんだから」

そう独り言ちてから、私はしばらく黙って帰り道を行ったわ。黄昏時まで、後少しくらいかしら。まだそこそこ明るい時間帯。他人とのすれ違いに、不安はないわね。

けれども、沢山の中での挙動不審は流石に気になってしまうもの。道路のそこかしこを覗いている、同じ年くらいの男の子を見つけた私は、思わず彼を見つめてしまったわ。

そうしていたら、目が合ったのよね。中々に整った顔、下手をすれば女性的とすら取れる程に、すらりとした体躯の明らかに格好良い男の子に見つめられ、私はどきつとしたわ。……勿論、驚きからよ。谷口みたいに私、浮ついてはいないんだから。

私がそうして心の声に蓋をしていると、その見目は明らかに群を抜いている男の子はおもむろに近寄ってきて、声を掛けてきたの。特に

構えずに、私は対峙したわ。

「あの……すみません。少しばかりよろしいでしょうか？」

「ん、何かしら？」

でも私はその整いに焦りを見ちゃった。だから、心配を覚えたの。何か、彼に悪いことでもあったのか、別の意味でどきどきし始めたわ。

そして、残念なことにそれはどうやら当たっていたみたい。眉を悲しそうに下げて、彼は言ったの。

「唐突に、申し訳ありません。ですが、こちらも切羽詰まっています。単刀直入に言いますと、財布を失くしてしまったのです。貴女は道々そのようなものを、見かけませんでしたか？」

「それは大変ねっ！ うーん……でも、残念だけど、記憶にないわ」「そう、ですか……」

ちよつとぼやつとしていたけれど、でも間違いなく覚えはないわ。しかし縫ってみた私の中身のない返事に、がっかりしちゃったのね。残念、というのを男の子は体中で表したわ。その声があまりに悲しげで、私は同情せずにはいられなかった。

だからとつきに、私は踵を返さんとした彼に言葉をかけたの。

「……ねえ、あなたの財布はどんな色形だった？」

「茶色の長財布ですね。一般的なものを想像して頂けると、おおよそそれに似通っているかと」

「なるほどね……うん、いいわ。私も一緒に探してあげる！ 日暮れまでそんなに時間がないでしょうし、急がなきゃー！」

そう。既に太陽は大分落ち込んで、地平の端にはオレンジ色が見え始めてる。このままでは、捜し物をするに相応しくない、暗い夜がやってきちゃうわ。

慌てるのは良くないけど、でも困っている人のためになりたくて、気が急くのは仕方ないことよね。でも、そんな私をどうにも彼は珍しいものを見つけたかのようにまじまじと視線をぶつけてきたわ。どうしたのかしら？

「……本当ですか？」

「もちろん！ 世の不思議も気になるところだけれど、先ずは自分の

足元を確かめるのだって悪くはないわよね。それが人のためになるっていうなら尚更！」

何故か彼は言葉にまでして尋ねてきたので、私は素直に本音を晒したわ。そう、これは彼だけのためではないの。探してみたら、意外と足元にはダンゴムシさんとかが隠れていたりして、楽しいかもしれないじゃない。

私がそこまで説明すると彼は一定の理解を示し、そうして軽くお辞儀をしてくれたの。でも、何故か柳眉を更に困らせて、青年は更に言い募るわ。

「助かります……しかし、僕が言うのはおかしいことなのかもしれないが、見ず知らずの人間の言うことを鵜呑みにするのは、いかがなことかと」

「何。あなた、私に嘘吐いてるの？」

それは、ちよつと嫌ね。私がまんまと騙されたところで、悔しいだけだけれど、なんせ、嘘つきは、閻魔様に舌を抜かれちゃうって言うじゃない。

昔から思ってるんだけど、それって痛そうで……だから、あんまり他の人に嘘なんて吐いて欲しくはないのよね。

彼は、私のストレートな質問に、少し困ったような表情をしたわ。「……いいえ、そんなことは……いやしかし、後悔先に立たず、と言いますし」

「なら、何の問題もないじゃない。それに、騙されたら、それって私がバカなだけだわ。後悔なんて、するわけないわよ」

そう、私が後悔なんてするわけないの。どんな『イタイ』ことも、辛いことも、全部私の経験。「あたし」の代わりに始めたまだ三年ばかりの全てを、私は精一杯に愛したいから。

何時、終わっても良いように。

私のそんな内心まで、彼は察さなかった。でも私の言の葉の表だけをなぞってから、その男の子はとても嬉しそうになったわ。

「はは。なるほど。……貴女は、賢い。とても、騙せない」

そうして、彼はそう言ったの。何かを吹っ切ったかのような澄んだ

笑顔を見せる青年は、ポケットに手を入れてから携帯電話——最新機種だったわ、ちよつと欲しいわね——を取り出して、操作し始めたわ。どうやら電話を掛けるみたい。空気を読んで、私は口を噤んだわ。「もしもし。はい、森さん。作戦は中止、ということをお願いします。……ええ、それは勿論」

だんまりの私に届いたのは端的な会話。聞いていて良いのかな、と思っただけ、彼にはもうずっと何ら包み隠すものなど無いといった風に、私を優しい目で見つめていたわ。

だからつい、通話の終わった直ぐ後に、その内容について聞いてしまったの。

「何？　どうかしたの？」

「いえ。実は、僕の仲間が演技のためにスタンバイしていましたね。それを止めるようにと伝えておいたのです」

「……どうということかしら」

「実は、貴女と接点を持ったために、我々は貴女の善意を利用しようとしていたのです。まず僕が財布を失くしたフリをして会話をする。そうしてある程度の相互理解を図った後に、我々の一員が今見つけたという体で財布を僕に届け、貴女に偽りの喜びの共有を味わわせる。そうすることで僕、延いては我々に親近感を持たせる、その予定でした」

「……予定、どうして止めちゃったの？」

「まあ……要は三文芝居なんてつまらないものは止めた、ということですね」

なるほど。大体、分かったわ。どうやら、この男の子と彼が所属する団体は私の力を察していて、近づくために暗躍していたみたい。

面白いことをするものね。改めてよくよく彼に意識を向ければ、何となく力を感じたわ。更に広げていくと何となく、八方からも似たものを覚えたの。うーん、彼らは超能力者関連かしらね。あんまり、細かな違いまでは分からないのよ。

まあ良いでしょう。どんな相手だろうと【涼宮ハルヒ】をやるだけ。私は、しらばっくれたわ。

「どつきりか何かだったの？」

「はい。そのようなものと理解して頂いて構いません。……危うく、僕は貴女程の人に、無駄な時間を過ごさせてしまうところでした。申し訳ありません」

「別に構わないわよ。何だか、珍しいことに関われたみたいだし」

「ありがとうございます。お礼、といつてはなんですが、後でもっと珍しいもので、貴女を楽しませてみせましょう」

そう言つてにこり、と柔らかな微笑みを彼は私に見せてくれたの。なんだか満面よりもちよつと綺麗過ぎる笑顔な気がするけれど、それでも喜色は確かに感じられるわね。

楽しげな彼の次の言葉を、私はわくわくと待ったわ。

「そのためにもまず、後で謎の転校生として、貴女の元に参上しますから」

謎の転校生、それを私の頭が咀嚼する。そうしたら、何だか既視感が襲つてきたの。

超能力者、機関、SOS団最後の団員。駆け巡る、これからの記録。やがて、いやに整つたその顔に、私は一気に親近感を覚えたわ。

「あれ。もしかしてあなた、古泉くん？」

だから、つい、私は零してしまったの。目の前の彼の正体を、そのまま口にしてしまったのよね。

あ、やつちやった。

「……………涼宮さんは、僕なんかよりもよっぽど謎な方ですね」

ああ、もうそれどころではないのでしょうか、笑顔の仮面は途端に壊れて思索に惑う表情になつたわ。

そして一瞬別人のように楽しそうに顔を歪ませてから、古泉くんは真剣に私に向き直り、宣言するかのように言ったの。

「貴女の謎、僕が何時か解いて差し上げます」

対面に立つ古泉くんの背にあるのは闇と光の合間。黄昏の風景。美しきそれらから目を背けて、あえて不明な私に彼は向く。謎ばかりが、敏い少年の心を奪う。

もし人の心までもがフラクタルなら、私の心は誰と似ているのかしら。もしかしたら古泉くんならば、それを解して答えをくれるのかも

しれない。

「そう……」

でも、どうしてだかその通りになっただけならいいな、と私は言えなかった。

フラクタル。人と、神。彼女と何？

第七話 牛さんと無表情レイヤー

「未来人」

「え？ えっ？ 長門さん？」

「捕まえておいた」

色々と衝撃を受けた、その翌日。今日はいいい日になるだろうな、と何となく思っていたわ。だって、曇りがちだった昨日とは違って見上げた空は抜けるような晴天だった。

この時期は特にぽかぽかして、晴れ晴れな天気ってどこか愉快になっていわよねー。まさか、その愉快が上限突破することになるとは考えもしなかったけれど。

挨拶もそこそこに、先日まで確乎不動がトレードマークのようだった有希が、朝比奈さんを引き連れてこんな驚天動地な発言をするなんて、私は思わなかった。

私には朝比奈さんが顔をさーっと青くさせていく様子がまざまざと分かったわ。ちよつと可哀想ね。どうしましょう？

「えっと。有希、急にどうしたの？ 朝比奈さんを連れて、宇宙人っぽくアブダクションごっこ？ でも朝比奈さんは牛さんじゃあ……うん、多分ないわよ？」

「あのう……ひよつとして涼宮さん、あたしの胸を見て、言い淀みました？ もう、私、牛さんじゃないですよ」

「そう。確かに一部が肥大化しているけれども、彼女は牛ではなく未来人」

「いや、朝比奈さんって、未来的な感じにはどうにも見えないけれど……もつと牧歌的な生き物に思えてならないわ」

「だから牛さんから離れて下さい。……いえ、未来人でもありませんけど！」

でも、涙目な朝比奈さんの前で、私は少しふざけてしまったわ。

でもね。袖を宇宙人パワーで引つ張られて逃げ出せなくなった朝比奈さんの足掻きが、バスケットボールみたいな胸元を大いに弾ませ

ているのを間近で見ってしまったのは、それはもう彼女が同じ人間だとすら思えなくなるでしょう？

いったい何を食べたらこんなにおつきくなるのかしらね。秘訣は牧草や藁、かしら。でもそれはちよつとなあ。私、肉食などころもあるし。

と、そんな風にして、現実逃避に頭の中でまで朝比奈さんを弄つていると、有希は朝比奈さんを離さないまま、私にずいと近づいてきたわ。急な動きに朝比奈さん、ちよつとよろけたわね。危ない危ない。

何かしらと身構える私に、真つ直ぐ私を視ながら、有希は言ったわ。「信じて」

「ゆ、有希？」

「……わたしは、貴女を信じている」

驚く私に、そうして彼女の口から殺し文句が紡ぎ出されたの。これでは、私に用意できる返事は一つしかなくなっちゃったわ。

信じて、と乞うのなら私は貴女を信じましょう。私が貴女を認めることを信じてくれているのなら、尚更ね。

友達の真剣は、なるべく受け止めたい。そんな考えを、嘘だったら怖いとか「涼宮ハルヒ」っぽくないとか何とかで、一々、翻してらないわ。私の友情は、そんなみみちいものじゃないの。

私を見つめる有希の視線は揺るがない。しかしそこに確かな意思が窺えたわ。全く、どうしてこんなに早めに情緒が身に付いてしまったのかしらね。嬉しいけれど、複雑な気分だわ。

「はあ。そう言われちゃったら、仕方ないかー。もう……皆纏めて信じちゃおうじゃないの！ 有希は宇宙人で、朝比奈さんは、未来人！ 決定ね！」

「わわ……決定しちゃいました……」

そう。実際有希が宇宙人なことも、朝比奈さんが未来人なことも正しいのだし、これで良いわ。どうして今それを告白したかは分からないけれど。

けれども、内情を知らずにそう考えない人の方がきつと多いのは仕方がないでしょうね。朝に起きた珍事の私の強引な纏めを受けて、周

困にざわめきが走ったわ。

上級生まで引き連れた冗談みたいな寸劇を見せられたクラスメイトは、遠慮なしに感想を語り合うわ。変なのが増えた、とかいうのも聞こえたわね。……覚えておきなさいよ、花瀬。

いや、でも私がここで口を出したら収まりが更につかなくなりそうね。ちよつと、面倒だわ。

そう思い、取り敢えず平然としている有希とおどおどしている朝比奈さんを教室から連れ出そうとしたその時。ケラケラという笑い声が響いたの。

教室の反対の入り口を見たら、そこに彼女が居たわ。恐らくタイミングを凶つてのことだったのでしよう、登場した鶴屋さんは笑顔で喋りだしたわ。

「いやー。朝イチに現れた長門ちゃんがみくるの袖を引っ張ってさ。どこに連れて行くのか分かんなかったけど、こんな面白事態に引き込まれためだったとは思わなかったな。ハルにゃんのお友達は、刺激的な子が多いっさ！」

そうして再びケラケラ。不思議会話を面白事態に、変を刺激的にと優しく言い換えてくれた鶴屋さんの言葉に、周囲から理解の色が生まれていくのが分かるわ。

どうすればいいか分からないのは、いつそ楽しめばいいのだと見本を示してくれた上級生に、私は深く感謝した。……うーん、私じゃあ、この人には敵わないかもね。

そして、そんな潮目の変わりを理解してくれたのでしよう。近くで様子をみていたばかりのキョンくんが、ここで更に声をあげるように話しかけてくれたわ。

「涼宮。俺は、普通の人間だからな？」

「……それは、何となく分かるわ！」

「なんだ。分かってくれてるんなら、俺はいい」

私にはキョンくんの、お前らもそうだろう、という周囲に向けた言葉の言葉が聞こえるようだった。

この【涼宮ハルヒ】はおかしいばかりではなく、会話も通じる。そ

れを、己を手本として挺してくれたキョンくんの素晴らしさと云った
ら、ないわね。

やり方が渋くて格好良いわ。惚れそう。いや、とつくに惚れていた
わね。ちよつと、顔が赤くなるのが分かるわ。

「だな。俺も、キョンの言う通りに、涼宮がとち狂って私達は宇宙船地
球号の船員なんだから皆宇宙人みたいなものね、とか言いだすことさ
えなけりやそれでいい。そういうのが好きな奴同士、勝手にやってく
れ」

「まあ僕もそうは思いうけれど……しかし谷口、の涼宮さんのものまね、
気色悪いくらいに似ていないね」

「お前、そこは、放つて置いてくれよー！」

そうしたら、今度は遅れて谷口が乗ってくれた。それを茶化す国木
田くんもどこか優しげに私を見ていたわ。

ああ、私って恵まれてる。【涼宮ハルヒ】をやらなくちゃと変に焦つ
ていた以前の私、そして【あたし】に胸を張って言いたいわね。もつ
と、冷静になつて周りを見てみなさいよ、いい人ばかりだからって。
あ、何だかちよつと泣きそう。それを隠すためにも、私は有希の手
を取ったわ。

「じゃ、ちよつと出てくるわね！ 谷口は、私が帰ってくるまでしつか
り場を温めておきなさい！」

「はあ？ ちよつと待て。このとつ散らかった場所で俺に何をしろつ
てんだー！」

「いやー。涼宮さんの前座をやるなんて、大変だね、谷口」

「おお、聞いているよつ。君もハルにゃんのお友達なんだってね。どん
な面白を披露してくれるか楽しみだなっ！」

「やれやれ……」

私は、そんな会話を聞きながら、有希と朝比奈さんを連れて、廊下
へと出ていったの。

ちなみに、後で知っただけけれど、追い詰められた谷口は、わわわ
忘れ物の歌のフルを披露したらしいわ。ダダ滑りだったみたいだけ
れど……うーん、ちよつと聞きたかったわね！

落ち着くためにも人気がない方へ。そればかりを基準にして選んだのは、屋上前の踊り場。私、前に仮入部した時に美術部の人たちが、そこを物置にしているって言ってたのを覚えていたのよね。

色々と置いても咎められないくらいなのだから、そう人は居ないでしょうと思っていたら、ビンゴ。人影の代わりにうっすらと埃に塗れた空間がそこにあったの。

私はそこにこの二人を連れるのはどうかな、と思いながらも一段飛ばしで階段を駆け上がったわ。あ、ちよつと速かったかしらね。有希はケロツとしてるけど、朝比奈さんは肩で息をしてるわ。

「あー……ごめんね、朝比奈さん。ちよつと急いでたからって気にせず駆け足で上がっちゃった」

「だ、大丈夫ですー……そ、それからあたしのことは、どうぞ、みくるちゃんと呼び下さい」

「分かったわ。お言葉に甘えて、そうしようかしら……み、みくるちゃん？」

「はい」

「わ、何だか恥ずかしい……先輩を名前呼びなんて初めてだから、かしら？ うわー」

朝比奈さ……いや彼女の望むように言うならみくるちゃん、かあ。ま、まあ彼女の体調を気にしていたら、どうにも意外な攻撃が来てしまったわね。

よく考えたら、先輩どころか、友達が少ないせいで、そもそもファーストネームで人を呼ぶことなんて中々ないっていうのもあるわ。何だか、親しみを感じすぎてこっ恥ずかしいわね！

照れる私を見て、み……みくるちゃんは、うっとりしたわ。

「ふふ、涼宮さん、可愛い」

「にやあああー！」

「ユニーク」

可愛い、なんて親にしか言われていなくて慣れていないのに、こうも直球で……顔、ひよつとして真っ赤どころか発光すらしていないか

しら？ もう、熱がすごいの。

いや、中学生時代に告白された際に言われた美辞麗句には、用法の間違いを注意する余裕すらあったくらいだったけれど、これは駄目。元々柔らかな瞳が細まって、受ける優しさが堪らない。

まさか、私なんか可愛がられるなんて、思いもしなかったわ。あ、撫でて来たわ。気持ちいい……みくるちゃん、恐ろしい子ね！

「いい子いい子……あ」

「ん？ 有希？」

そうして、危うくみくるちゃんの思うがままにされるところだったのだけれど、私は袖から受けた感触にて自失から逃れることが出来たわ。

私もみくるちゃんも、そつちを向く。案の定、袖元を握っていたのは、有希だったわ。彼女は言ったの。

「……寂しい」

有希はひたすらに、私をじっと、見つめていた。

「有希っ！」

私は、それを聞いて、自然と体を動かしてしまったわ。無遠慮にも、勝手にも、私は私で彼女を包み込む。でも、きつとこれでいい。そう、信じるわ。

だって、三才の子供がつまらなそうに手を引いて、それを抱かない親なんて、居るもんかっての！ 私はこの子のためにお腹を痛めたこととは無いけれど、きつと負けないくらいに愛していると思うわ。だから、こんなの当然。

「……………」

やっぱり、温かい。生きている。有希は宇宙人であっても、それでも私の友達なの。その両方を確りと認めなければ、ね。

抱擁をゆつくり解いて、私は有希の前に改めて立つ。

「どうして宇宙人とか言い出したのか、気になっていたけれど、そういうことだったのね……私の気を、引きたかつたんでしょ？」

「……そう」

「長門さん……」

有希の微かな頷きに、やっぱり、と私は思う。きつとベタベタ触れだした私を切っ掛けに起きた小さな情緒の芽生え。心の産声は、きつと温もり求めるものなのよ。

存在を知って三年も放置しておいて今更触れるというのはやっぱり残酷ですらあったのかもしれない。けれど、せつかく有希だって人間のようにして生きているのだから、伸び伸びと生きて欲しい。

私は精一杯の笑顔で、彼女の成長を望むわ。有希はそんな私を視て、黒曜石のような瞳に存分に容れてくれた。

「貴女が何だろうと、私は貴女の友達だからね。……そうそう離れてあげないわよ？」

「……分かった」

有希が首を縦に振る動作は、見逃してしまいそうになるくらいに小さい。けれども、それは確に行われたことなの。夢幻ではなく、彼女は確かにそこに居る。

なら、手をつないでみるのも悪くはないでしょう？

再びそつと繋がれた私達の手のひらを、みくるちゃんは、笑顔で認めてた。その柔らかさを眼鏡越しにそつと見つめて、有希は謝ったわ。

「貴女を巻き込んでしまって、申し訳ないと思っている」

「いえ、全然気にしないでください！ これくらい、へっちゃらです」

「ありがとう、み、みくるちゃん」

「はいー」

正体を勝手にバラした有希も、名前を言い損なった失礼な私も、纏めて許してくれるみくるちゃん。

ああ、未来はこんな子ばかりなのかしら。だとしたら、きつと人類の将来は明るいわね。私が内心、老後に安心感を覚えていると、直ぐ先の始業を知らせる音が鳴って、思わず呟いたわ。

「あら、チャイムね」

「わわ、急がないといけませんー」

慌てて先立つみくるちゃん。まあ、きつと入学したての私達より無遅刻記録は長いだろうから、それに必死になるのは当然よね。

私は有希の手を引いて、みくるちゃんに続こうとしたわ。そうしたら、彼女の薄い唇が僅かに動いて、言ったの。

「……後で超能力者も見つけてくる」

なるほど、まだ有希だったら仲介を諦めていないのね。そんなに私の役に立ちたいのかしら。まるで、褒めて欲しいと親の後を付ける子供みたい。

……そう考えると、ちよつと可愛いかもしれないわね。

そして、ふと思ったことを私は聞いてみたわ。

「……異世界人は？」

「そちらも心当たりが、ないわけでもない」

「……そっちは別に、急がなくてもいいわ」

ああ、やつぱりどこかに居たのね異世界人。けれど、その彼（彼女？）までも容れるキャパは私にはないわ。だから、ちよつと後回し。一年くらいは、遅れてくれないかな、と願わなくもないわ。

私は呆れ顔を禁じてから再び、有希と共に階段を行こうとしたの。

「そう」

そうして、三度の頷きはとても深かった。当たり前のように、彼女は人のように動いた。そのことに、私ははつとする。

私には、有希の無表情レイヤーの後ろに、確かな微笑みが見えたよ
うな気がした。

重ねて重ねて不確かに。果たして、彼女のレイヤーは幾つ？

第八話 不味いコーヒ―はチキータ

「うーん……放課後が暇になっちゃったわねえ」

記念すべき最後の部活こと運動系で一番好きなので取っておいた卓球部で部長さんとの熱戦を披露してから翌日、私は燃え尽きていたわ。

昨日は勝負の潮目にここぞという時のために取っておいたチキータを失敗しての残念敗北で最終仮入部を終えたの。けれど、もう一度というリベンジへの意欲も私には湧かなかった。

私にとって勝負って勝ち負け、じゃないのよね。どれだけ楽しんできたかが大事。

その点で言えば、何だか興味があつたらしくて付いてきたキョンくん国木田くん山谷の、卓球部員すら唸らせた程の名解説をバツクグラウンドミュージックにプラスチックポールと存分に親しめたあの一戦はとても楽しめて、それでも私のお腹は一杯。

しかし、どうもそんな面白かった時間の消化に疲れてしまったのかしらね。私はすっかり机に突っ伏す楽を覚えて、茶色く分厚い天板に親しみを覚えるようになってしまったわ。

流石に授業中は大体顔を上げていたけれど、休み時間くらいはこうして楽にしているも良いでしょう。私はそのまま、前の席から発せられたキョンくんの言葉を聴いたわ。

「涼宮の部活巡りもお終いか。にしても、昨日は凄かったな。涼宮は、卓球はどれだけやってたんだ？ 女子であんなえげつないドライブをかけられるなんて、とんでもないことだぞ」

「えつと……そうね。体育の時間に二人組作れなくて、先生と組まされてた時に、やたら強かったあの先生に勝つために特訓した時間を数えると……丸三日くらい？」

「はあ……ツッコミどころばかりな話だが、どこ突いても藪蛇になりそうだな……やれやれ」

応じるために顔を上げた私の話を聞いて、どこまでも気怠そうに肩

をすくめるキョンくん。いかにも四方八方に呆れ尽くしているようなポーズを取っている彼だけれど、しかしその実その瞳は優しいげなよね。

先日のもでちよつと私がクラス全体に引かれるようになったからつて、キョンくんはずつと私を気にして一言二言私の眩きに返事をしてくれる。

何かしら。ホント、皆のお兄ちゃん、つて感じよね。同級生のはずなのに、どこか達観しているところがあつて、そこも格好良いわ。

まあこれから、そんな酷く現実に諦め馴染んでしまつていくキョンくんを不思議の海に連れて行かんとしている私は、実に罪深いのでしようね。私は「あたし」のためにも彼の平穏を奪わなければいけないというのに、中々気が進まない。

「あーあ、次、何しようかしら？」

私は、考えざるを得なかった。「涼宮ハルヒ」を続けるのならはその答えは一つだけなのに、私はすっかり好きになつてしまったキョンくんを本当に SOS 団なんて名前のけつたいな同好会に容れてしまつていいか、悩んでしかたがないわ。

好きなだけにキョンくんは私の手で幸せにしてあげたいところだけれど、でも普通の幸せだつて選択肢にあつて然るべきものよね。

私は、平和を楽しむのも学生としてアリだろうし、そもそもキョンくんはずつと私と一緒に嫌なんじゃないかな、とかぐだぐだと考えちやつたの。要は私、好きな人にアタックすることに怖じ気付いていたのよね。

でも、そんなヘタレな私を見下ろしながら、キョンくんは口にするの。ふと、彼の瞳に、私はあの日の鳶色を思い出したわ。

「そーいや、前に提案しそびれてたんだが……こんだけ全部律儀に探して入りたい部が見つからなかったんだろ？ なら、作つちまつたらどうだ？」

「え？ それつて……私が新クラブを創るつてこと？ でも、そんなに簡単に許可つて貰えるのかしら」

「活動が宇宙人とかと遊びたいつていうのだと教員連中にとつては頂

けないだろうが……まあ、適当に活動目的をでっち上げたら、部室一つくらい貸して貰えるんじゃないか？」

すると意外にも、キョンくんの方からSOS団創設を提案してきたの。いや、勿論彼はもうちよつと常識的な名称が付くと思っているのだろうけれど、取り敢えず私に創部を勧めているのは間違いないわ。ひよつとしたら、手伝ってくれるのかしら、それともただ口にしただけ？ 気になって、私は独り言のように呟くわ。

「でも、今から部員が見つかるかは、微妙なところね」

「……数合わせくらいなら、俺が入ってやってもいいぞ」

「え、ホント？」

「まあ、な……」

何か含んだような表情をしながらも、確かにキョンくんはそう言ってくれた。わあ、イタい子扱いされている私とあえて同じグループに入ってくれるなんて、嬉しいわ！ 団員一・二は私とキョンくん決定ね。

でも、これはキョンくんがただ優しいから、なのでしよう。私だって流石にこの程度で、自分に気があるのでは、っていう勘違いはしないわよ。でも、ついつい笑顔になってしまうのはどうしようもないことよね。

「キョンくんが入ってくれるなら百人力ね！ うーん、やる気が出てきたわ！ 出来れば、有希やみくるちゃん達にはメンバーになって欲しいけど……兼部って可能なのかしらね。そもそも、どうやったら創部を認められるのかしら？」

「……今、生徒手帳持つてるか？」

「えっと、うん。うーんと、ここだったかしら……あつたわよ。ほら」
「その後ろの方に、書いてあるぞ」

私はここにこと、鞆をがさごそ。程なくして見つけた生徒手帳を、私はキョンくんに見せつける。そうして彼の指示通りにしてぺらぺらとその薄い紙束を捲ると、後半部に目当ての項目を発見したわ。

同好会の新設に伴う規定、かあ。あ、同好会のままだと予算は配分されない、との部分を真っ先に目に留めてしまった私だけれど、別に

悪くはないわよね。お金は大事よ、本当に。

「あ、確かに書いてあるわ……なにに。え、最低五人で顧問の先生まで必要なんだ……責任者は私でも大丈夫かしら。研究会昇格、までのことは当分考えなくてもいいかも……」

読み込みながら、私は内容をぶつぶつと続けたわ。だって、この一枚のページはそれこそ一番桁の大きなお金よりも私にとって大事なものかもしれないから。

不備があつて、SOS団結成できませんでした、では流石に「あたし」に悪いわ。うん、よく調べたけれどこれには透かし等で隠された文面とかもなさそうね。

やがて、嫌に熱心になっている私を苦笑いで認めながら、ふと、キョんくんは言ったの。

「ああ、そういえばだな。少し前にこの話をしたら、谷口も新クラブ作りに乗り気だったぞ」

「えー……いい加減アイツにも私離れして欲しいのに」
聞き、そして私が理解したのは谷口が、団員その三になるという可能性。いやいやあのアホの男子はSOS団に似合わないわ。

……まさか、谷口が異世界人っていうオチはないでしょうね。前に、アイツが昔織田信長のことをイエス・キリストと異世界的な誤答を披露したことはあったけど。何か、テスト前日に貰った聖書を読んだから間違えたとか言ってたけど、意味不明よね。

まあ、実際はあいつが不思議存在だってことはなくて、ストーリーカー氣質極まっているだけなのでしょう。そんなに、私と馬鹿をし続けたのかしら。

そう、この時の私の谷口に対する感想は、まだ私についてくるの粘着質ねえ、という程度のものであったの。

だから、谷口がどこまでも私に対して本気だった、っていうことは知らなかった。

「……それで、新クラブ結成の進捗は今、どうなってるの？」

はしたないっていうのは知っているけれど何かどうしてもやつ

ちやうのよね、私がストローを噛み噛みしていると、対面の席にて朝倉さんは私に問いかけたわ。

変形しきったプラスチックから口を離して、私それに返答しようとして、思わず身震いする。それにしてもこの喫茶店冷房効きすぎじゃないかしら、コーヒーはお手頃価格で美味しかったのだけれど。彼女みたいに頼むのをホットにしておけば良かったかも。

そんな風に考えていたら、私はタイミングを逃してしまったわ。それをリーダー基質な朝倉さんは敏に察して、会話のバトンを切り替えて再び送ってくれたの。

「冷えるの？ 今お客さん私達だけみたいだから、店主さんに冷房を控えて貰うように言って来ましようか？」

「ありがとう。でも、大丈夫よ。これくらい、中学時代着の身着のまま真冬に近くの山の頂上の連続攻略に挑んだ時と比べたら、平気」

「ふふ。涼宮さんだったら、とんでもないことをやってたのね……ちなみに、どうしてそんなことを？」

「えーと……確か、真冬の空気は澄んでいて、星がよく見えるから、宇宙からもきつと見易いと思つて、宇宙人に見つけてもらうために山登りをした……らしいわ？」

「自分のことなのにどうして伝聞調で最後に疑問符がつくの？ ふふ、面白いわね」

途中からにこりとして、朝倉さんは何時もの笑顔になったわ。とっても綺麗で、いい子。皆が彼女を頼るのがよく分かるわ。有希も、仲良くしているみたいだし、信頼できるわね。

うん。突然、帰り道に遭ったらお話ししたいことがあるのよ、と手近の喫茶店に連れて行かれたのだけれど、この様子なら本当にそれだけみたいね。

いや、中学時代に似たような感じでクラスメートに謎の宗教の勧誘をされたことがあったのよ。不思議好きといっても、お金で買う奇跡は私の興味の範囲外なのよね。丁重にお断りするのが大変だったわ。

ああ、また、思考がずれたわね。それで空いた隙間に、朝倉さんはマドラーを指のお腹で一回転させてから、私に続けたわ。

「……東中の子達から聞いてた涼宮さんの噂って、あまり良いものではなくって、同じクラスになった時はどうなることか、正直なところ心配だったの」

「でしようね……うん。中学時代は沢山やらかしていたからねえ……」

うう、何が未来に繋がるか分からなかったから、色んなことをやって時に人に迷惑をかけたことすらあったし、悲しいけれど悪口の一つや二つ、仕方ないわよね。

それに、他にも嫌われる原因に心当たりがあつたりするの。中一の時にキョンくんや古泉くん程じゃないけれど格好良かった男の子の告白を断った時からかしら、同学年の女子から敬遠されるようになったのよね。

何だか彼を振るなんてあり得ないらしいけど……好きな人が居るのに、他の男の子と付き合うなんて、それこそありえないじゃない。でも、それからずっと、女友達とはご無沙汰になっていたの。

だから、有希との友情もそうだし、普通にクラスメートと話せている今の状況だって、嬉しいのよね。これから更に表情が崩れることも知らず、私も破顔したわ。

「でも、安心したわ。やることは結構突飛なことが多いけれど、話してみると存外普通で。……それで、改めて訊くけれど、クラブはどんな感じになっているの？ クラブ名はもう決まった？」

「むぐ……名前、は………え、SOS団、よ」

「SOS？ 遭難信号……意外にも何か、助けに関係した一団になるのかしら」

「違うのよ。SOS団は、略称。正式名称は世界を大いに盛り上げるための涼宮ハルヒの団、なの……」

「そ、そう……前言は撤回しないけれど、涼宮さんの言語センスは、変わってるわね」

「にやあああ……」

朝倉さんの苦笑の前で、再び、私は啼いたわ。ホント、【あたし】って理解し難いイタイ感性をしてるわよね。でも、彼女のためにもそれ

を大切にしなければいけない事実が、私を追い詰める。

谷口にはアホか、で一蹴されかけたけど、流星にここばかりは拘ったわ。というか、今までがおかしかった気もするし、団名まで変わったら取り返しがつかないような気がするのよね。

でも、シラフで自分の名前を付けたこんな組織名の提案なんて、とつても難しかったんだからね！あの時は、顔から火が出て大火事になると思ったわ。

キョンくんには、だから照れるくらいならやるなよ、と言われたわね。また、残念な歴史が増えたわ。

「まあ、名前はひとまずそれで良いとして。活動目的は？」

「……宇宙人や未来人や超能力者を探し出して一緒に遊ぶこと、じゃないかしら？」

「また伝聞調で疑問符……それにしても真っ赤。涼宮さんも無理して言うことはないからね。お水、貰ってきましようか？」

「気にしないで。全部自業自得、なのよ。そう、「涼宮ハルヒ」の自業自得。もう、こうなったら朝倉さんの疑問に全部答えちゃうわ！他に質問はある？」

開き直って、私はそう言ったわ。きつと、聞きたいこと、突っ込みたいところって沢山あるんじゃないかしら。口にして、ちよつと後悔。

でも、そういうえば、晴れてSOS団四番目の団員となった有希のこともあるし、むしろ本来ならば私の方から色々朝倉さんに伝えておかなかちやならないかもしれないのよね。

そこら辺の説明をしようとしたら、先に笑顔を貼り付けた、朝倉さんが質問したの。意外にも、それは愚問だったわ。

「私も宇宙人、と言ったら貴女はどうする？」

「決まってるじゃない」

そう、それは決まってる。ようこそ私の元へ、宇宙人。こんなだけれど、私だって曲りなりとて「涼宮ハルヒ」なんだから。

「歓迎するわ」

私は受け止めるために、手を、広げた。

先に頂いた知り合いオススメのコーヒーのように、私は黒い不明をいたずらに飲み込む。それはきつと、いや間違はなく、美味しいだろうから。

うん。たとえ勘違いでも、そんな考えはいいと私は思うのよね。

「そう……でも残念。私はただの女の子よ」

けれども、当然ながら、朝倉さんは普通の女子だった。だから、私はきつと彼女と一緒になれない。

朝倉さんのこと、とつても気に入っているのだけれど、残念ね。そんなこんなな私の思いを知らず、しかし小さく彼女は言うの。

「実はね、このコーヒ―は不味いつて評判だったの。通好み、過ぎる仕様なのかしらね。実際に、私もさつき我慢して飲んだわ」

「え？ そうなの？」

「そう。でも、涼宮さんはそれだって美味しく頂けた。……つまり、そういうことだと思うの」

変わらぬ、表情。でも一瞬、朝倉さんの表情が酷く悲しそうになったように見えたのは、気のせいかしら。

それにしても、不味いコーヒ―？ そんなことはなかったと思うけれど。ひよつとして、私って味音痴なのかしら。

私が自分を不安に思っていると、今度は身を乗り出して朝倉さんは、笑みを深めたの。まるで、何も知らない子供にするみたいに視線を合わせて。

「長門さんがお世話になってる恩もあることだし、何時か涼宮さんがパンクしそうになったら遠慮なく、私に相談してね」

目の前に呈されたのは、今までより明らかに柔和な笑顔。そこには、どうにも今までのような誰かのためというような感はなかった。なら、それは朝倉さん自身のためだったのかしら。

そして、これでも私こそこそ頼れるのよ、と我がクラスの委員長さんは、続けて言ったわ。

第九話 百万馬力へホラーハウス

まあ実は他に優れたものが隠れているのかもしれないけれど、たとえば、今人間が一番ホットな地球産の端末だとするわ。地球の表面の殆どを踏破して、これから宇宙に接続せんとする集まり。うん、人つて中々凄い性能だと私も思うわ。

けれども、その未だ届かない宇宙に広がる情報の集まりから出来た人型の端末は、きつともっと高度な性能を備えていると考えて然るべきとも私は考えてしまうのよ。

だって、物理に囚われることのない巨大で複雑な存在が、代表としているものじゃない。私くらいの妄想家だと、過度の自身への情報流入を防ぐための逆止弁的な力くらいは備えているものと、想像しちゃうのよね。

まあつまるところ、有希は相当な力持ちだと私は睨んでいるのよ。多分、百万馬力はあるんじゃないかしら。実際、未だに彼女の袖引き攻撃から、誰も逃れた試しがないし。

そんな、原子の粒よりなお不可視な存在の子供な有希に引き連れられて、現在SOS団が間借り中の旧館文芸部室に男の子がやってきたの。

イケメンが美少女のなすがままになっているのを、目を丸くして見る私に有希は一言口にしたわ。

「超能力者を連れてきた」

「あ……古泉くん！」

「あはは……なんだか締まらない再会ですね。どうも、先日はご迷惑をおかけしました、涼宮さん」

そうして、その格好良い彼は、古泉くんだった。北高のブレザー姿に髪型がちよっと変わっているから、一瞬気づかなかったのよね。

ああ、古泉くんだったら、何時かの約束を果たして来てくれたんだ。謎の転校生、とのことだったけれど、正直なところSOS団結成に忙しすぎて、他クラスの転校生にまではノーチェックだったのよね。

たしかにこれは、ちよつと驚きが足りなくて締まらない再会になつちやつたかもしれない。でも、やつぱり嬉しいわ。何しろSOS団には、彼の存在が必要なものね。

「古泉くんだったら、ちよつと振りねー。何、有希。彼って超能力者、なの？」

「そう」

「はは……長門さんは、変わっていらつしやいますね。では自己紹介しましょうか。僕は古泉一樹。ただの謎の転校生です」

「謎の転校生は、ただ者ではないと思えますう……」

うん。恐る恐る口にしたようだった、みくるちゃん言葉も、間違いないわね。実際のところ古泉くんったら閉鎖空間の中でびゅんびゅん活躍してくれちやつてる超能力者で間違いなかつたりするし。

あ、一度だけちよつと意味深な視線を私に向けてきたわ。古泉くんが別れ際に言っていたあの言葉、忘れてくれていなかったみたいね。そんな私に謎なんて、ないと思うのだけれど。

そう考えていると、優しいキョンくんが少し所在なさそうになった古泉くんに近寄り声を掛けたわ。そうしたらSOS団暫定団員三号さんこと谷口も付いてったの。何か、難しそうな顔してね。

もしかして……お腹痛いのかしら？　ちよつと、心配ね。

「すまん。長門には悪気がないようだが……どうにも、今そういうのにハマっているみたいでな」

「はあ……あなたは」

「こいつは、キョン、だ。そして俺は……まあ、名字でも下の名前でも良いぞ。どうせ、知ってんだろ？」

「はは。流石に、初対面の方のお名前までは分かりませんよ」

「そうかい」

と、私が気にする中で、彼らの会話は滞りなく、むしろ笑顔を潤滑油に次第に盛り上がっていくようだったわ。

あ、谷口が古泉くんの肩を叩いた。いや、このままだと国木田くん、彼にポジション奪われちゃうんじゃないかしら。まあ、男同士で嫉妬し合うというのも中々考えにくいけど。

そういえば、国木田くんに、君も入りたかったりするの、とか聞いたら、君たちになら名義くらい幾らでも貸してあげるけれど、ちよつと野暮なことは止めておくよ、とか言ってたわね。

何か、遠慮するようなこと、あったのかしら。男の子の友情って奇々怪々ね。

と考えながらも私が円満な目の前の光景に満足していると、同じように思ったのだろうみくるちゃんが手を口に当て、感嘆の声を上げたわ。

「わあ。古泉くん、凄いですね……あつという間に、皆の中心になっちゃいました」

「男の子同士、波長が合ったのかしらね、いい傾向だわ」

「ひよつとして……彼も?」

「そうね」

私はみくるちゃんに頷き、一歩ずいと前に出る。その際に、キョんくん谷口がさつと譲ってくれたのはとても有難かったわ。何か特別扱いされてる感が表れて威厳が出たように思えるし。

団長としての格好をつけるためにと考えていた腕章も、これなら必要ないかしらね。私は偉そうにして、古泉くんに言ったわ。

「ねえ、古泉くん、我がSOS団に入らない?」

誠意を示すためにも、なるだけ率直に。しかし、端的なその言葉を古泉くんは咀嚼しかねたみたい。意外と私みたいに噛まない肉食系なのかもしれない彼の言葉を、私はちよつとだけ待ったわ。

「ええと、即答は……しかねますね。一体SOS団というのは、どういう目的を持って活動している組織なのでしょう?」

「SOS団の活動内容は、宇宙人や未来人や超能力者を探し出して、一緒に遊ぶこと……なんだけど有希曰く、その三種の不思議人間は古泉くんで揃ったのよね」

「そう」

私は、有希の方を見て、その頷きを確かに捉えた。そして、それを本気にするわ。実際そうなのだろうけれど、私は彼女をこの上なく、信じる。

何より、それは都合のいいことだったから。【あたし】だけではなく、私も望んでいたことは、ただ特別の中で楽しみたいというそれだけなの。

だから、私は手を広げて、これからの方針を出来るだけ大きく口にしたわ。

「なら、後は単純に、皆でわいわい遊べれば、それでいいわ！」
「なるほど。それは楽しそうですね」

それに、古泉くんは笑顔で言ったの。うん、本当になんとか先程までよりずっと、嬉しく感じているような気がする。まあ、よく分からない面子の中で緊張していただろうし、理解が出来てほっとしたというのもあるのかしら。

ただ、今の本気の実顔の彼を私は可愛らしいな、と感じたの。ま、まあキョンくんの魅力には及ばないけれど、やっぱり格好良い子よね、古泉くんって。

普通な谷口がちよつと肩身狭くなってしまうかもしれないかな、と思いつつ私は更に勧誘を続けたわ。

「現在超能力者は、先着一名様大歓迎中！ 古泉くんが良かったら、入らない？」

「俺としては、厄介そうな奴をこれ以上歓迎したくないんだが……」

「谷口は、黙ってなさい」
「やれやれ」

そうしたら、危惧通りに谷口が愚図ったの。まあ、口ほどに文句はないみたいけれど……こら目つきが悪いわよ。

全く、谷口のイケメン嫌いは筋金入りね。最後のやれやれ、ついでうのはキョンくんの真似かしら。似てないわー。

侮蔑の視線を向ける私を見て、どうしてかくすと笑って、そうして古泉くんは宣言したの。

「それでは、不肖、古泉一樹。SOS団に入団させて頂きます」

スマイルは、どこまでも素敵に。青年は謎の渦に自ら飛び込んだわ。

そうして、これよりSOS団総員六名——まあ一人余計だけれど、

これくらいなら誤差よね——での船旅が始まったの。

これからどうなるかは、私には少し分かるけれど、それでも確かじゃない。だから楽しみで仕方がないわ！

そう。私は次に来る未知の大波を知らずに、この時ただ、にこやかだった。

「うーん。同好会認定も難しいかあ……」

大分遅くなったせいで、部活帰りの生徒すら見当たらない、そんな時間。私は坂をとぼとぼ気落ちしながら下ったわ。通りの車にちらほら点き始めた、ライトがちよつと眩しい。

団活動の後つい先程まで私、学校で岡部先生とSOS団のことで話をしてきたのよね。それが、残念な結論で終わってしまい、悔しいのよ。涼宮には味方も多いことだし俺に任せろ、とまで言ってくれた岡部先生もどこか悲しそうだったわ。

そう、やらかしたせいで唯一書道部の先生には目の敵にされているみたいだけれど、仮入部の手続きとかでほとんど全ての先生と知り合ったおかげで、担任の岡部教諭を筆頭に、兼任顧問すらしてくれそうな人にもそこそこアテがあったのよ。

ただ、誰もがSOS団という名称を口にしたら、眉をひそめていたらしいけどね……いや、私も分かるわ、その気持ち。若さゆえの無軌道さが生んだにしては頭悪すぎる名前だしね。

そのせいか、今日進捗を聞きに行ったら、先日職員会議で話題にしてきたみたいだけれど、おふざけでやっているのか真面目に行っているのか判断し難いということで公認は難しいかもしれない、と岡部先生には言われたわ。

部活名に個人名が載っているのもアレだし、更には活動内容に嘘をつかないで提出したことも悪印象よね。それでは、活動実績を重ねていつて認めてもらう他にないかな、という結論に達してしまうのも仕方ないわ。

「とはいえ、スーパーナチュラルさん達とこれこう遊んだ、っていう記録ばかりじゃあ、認めて貰えないだろうし……」

むむ。これは難題ね。遊びにちよつと知的なものを混ぜれば、或いは。でも仲間で実験するというのも何か嫌ね。いやそもそも、皆に認めてもらおうとしている辺り「涼宮ハルヒ」として間違っているのかしら。

でも、何時か去るのだからそれまでに「あたし」に残す居場所は沢山あった方がいいと思うのよ。

そして出来ることなら。面と向かって世界の広さに怯える少女に、貴女だって大事な一つで誰かの特別なのよ、って伝えたい。私が「涼宮ハルヒ」である以上、それは叶わない夢だけれど。

降りて街に紛れたら、もう暗くなつてきちやつたし早く家族に会うため家に帰りたいのでしょうね、早々に流れていく人々に私は呑み込まれたわ。

彼らの帰巢は、擦れ合わない川の流れ。波風立たないルートの譲り合い。私にとっては、規則的で美しいとしか思えない、そんな風景ね。私も真似して歩んで、進んで。そうして止まったの。

目の前に、黒い人型が立ちふさがるように存在していることに、唐突に気づいたことによつて。

それは、黙っている。しかし、確かに私を認めていた。夜闇の中で、光を飲み込む溢れんばかりの長髪から覗くこれまた黒いファインダーから、とてつもないものが、見つめている。

それが、私には分かった。だから、怖じ気付いて、止まった。そして、その明らかな異常は私以外に気取られることすらなく、ただ人の流れに自然退かれながら、無を顔に貼り付けて、言ったわ。

「私が繋がるはずだった古型——今の——彼女では、とても耐えられない——」

彼女が吐き出したのは理解不明の音色。ただ、恐ろしいくらいに聞き取りやすいのが、不思議でならない。

言い、そうして、房を重ねて最早暗黒となった髪を引いて、ただ一歩だけ彼女は私に近寄った。当たり前のように、全ては彼女を無視する。止まった私にすら、気を留めず。

そこで私は気づいたの。ああ、今私は生まれて初めてこの世の誰からも注目されていないのだから。

「——だから、貴女に興味を持った」

そして、私はこの世のものではない眼前の何かにばかり、見初められる。その事実の恐ろしさに感じ入り、私はぶるりと震えたの。今更に、自分がお化け嫌いだったって思い出したわ。

ただ泡が弾けたとでも言うように、彼女はぶつんと口を開く。そして、黒の中に紛れた透明を吐き出した。まるでそれは、子供の疑問。

「——貴女は、神？」

「違う、わ……」

反射的に、私は応えていたの。自分がそんなものではないことは、私はよく知っているわ。全部を好きになりたくてもなりきれなくて、そしてドジにも大いに間違えてしまう。そんな神なんてあつてはならない。

それに何しろ私は「涼宮ハルヒ」のまがい物。本当ならばここに居る資格すら、ないじゃない。

だから、私は天上の影に向かって、曖昧に微笑んだの。私の諦めに、貴女も諦めて、とね。

「——なら——どうして——」

「周防」

そして、真っ黒い少女の疑問は続けられなかった。少年の声は、どこまでも冷徹で、私はそれを発したのが彼であることに気づかなかつた。

誰も見てくれなかった中で、私達に気づいた唯一人に、私は首を向けたの。そこで見たのが慣れた彼だったことに、とても安心できたことは、隠しておきたい事実ね。まさか私が、あのオールバックにこれだけ愛着を持っていたとは思わなかった。

「谷口？」

「ああ、すまん。こいつ、これでも俺のダチでさ。変わってんだろ？」
「変わってる、というか……」

私は谷口に返そうとした言葉を途中で止めて、口をつぐむ。周防さん、かしら。彼女は異質。その一言に尽きた。

今も闇の中で、彼女は薄く浮いている。きつと、周防さんはこの場に存在意義を置いていないのね。私には、それがなんとなく理解できたの。

そしてレイヤー一枚の正直な少女は、薄闇を纏いながら、私に告げたわ。

「——貴女の瞳は、とても歪んでいるのね」

そして、すうと周防さんは、嗤った。そして明らかな嘲笑のままにそっぽを向いて、私に背………というか数多の髪束を向けて去っていく。

ぱくぱくと、掛ける言葉に迷う私を他所に、谷口は遠慮なく言葉を投じたわ。

「ったく。すまん。後で説明するわ。……おい、周防！ どこに行く気だ？」

「——確認」

「ちっ」

舌打ちを一つ。どうしてそんな歩幅で速度を出せるのかと、驚くばかりの周防さんに追いつくために、明らかに苛立った表情で谷口は駆けていったの。

そして、私は一人残された。意味不明を数多残して、周防さんは人の間に消えていく。私は彼らを見送って、今更遅まきながら、勝手に震える膝小僧に気づいたばかり。

こんなの【涼宮ハルヒ】どころか、私らしくもない。だから、緊張を解くためにも一人、深呼吸をしたわ。

「はぁ」

あの子もきつと、不思議ななにか。だから、私は相互理解のために、何時か周防さんと遊ばんとする必要があるのかもしれない。

それこそ【涼宮ハルヒ】というより私らしく、あるために。

まあ、彼女を相手するのもジェットコースター、いや、ホラーハウスみたいな楽しみはあるかもしれない。そう思ったわ。びっくり箱

も、慣れれば面白いばかりでしょう。そう呑気にも考えなくもないかな。

そう、私は彼女が危ないものだとは、つゆとも思わないの。だって、友達の友達は、信じたいでしょう？

「まあ、この世界に【あたし】ですら知らない未知があるっていうのはプラス要素ね」

私は取り敢えず、今日のことをそう思うことにしたの。

幾ら怖くてあり得なくっても、それでも彼女をマイナスにはしたくない。

だって、私なんかだって、あり得てしまったのだから。

第十話 アプリコットティーにヨーグルト

「ふわあ……うーん。ちよつと、ちっちゃなことでも悩みすぎたかしらね」

大つきく口を開けながらあくびを一つ。そうして、私は人気と眠気の中で独りごちたわ。こんなの駄目ね。でも、だらしなさを禁じるには、ちよつと意識が薄いのだ。

私も谷口のこと笑えないわね。私は集合した後に向かう予定の喫茶店での支払いをどうしようか夜中考え出してから、そのまま眠れなかったのよ。

本当ならば、団長自ら皆に奢ってあげると格好が付くのでしょうかけれど、やつぱりお金は大事よね。額としてちよつと大きくなりすぎそうだし。どうにも踏ん切りつかずにずるずると。まさか、夜が明けるまでにそれが続くとは思わなかったわ。

なんだかんだ私も、初めてのSOS団勢揃いでのお出かけに、緊張していたのかもしれないわ。

慌てて少しは寝たけれど、きつと二時間も眠れなかったわね。ちよつと遅れたから朝食を作れなくて、お母さんのご飯久しぶりに食べさせて貰うことになっちゃったわ。

お母さんの作る料理はお父さん辺りが苦手としている、中々個性的な味なのよね。私は、何にでもヨーグルトを混ぜようとするその開拓精神は嫌いではないのだけれど。

「うーん。なんだかんだ、歩いていたら目が覚めてきたかも。駅ももう直ぐだし、しゃっきりしないとね」

そう。そろそろ待ち合わせ場所の駅前まで、僅かになってきていたのよね。眠気でふやけた顔に、意識を通すわ。

私は携帯電話をちらりと見て、時刻を確認。あ、まだ九時までには大分余裕があるわね。このままなら大体、四十分前には着くかしら。

流石に早すぎるかな、と思いつつも足を止めずに進んで、やがて休日の活気の主役である溢れんばかりの若者達に紛れながら、私は駅前

できよろきよろ。

そうすると、なんと見知った影が何時もの姿で本を読みながら駅前中央に立っているのを見かけたの。確かに駅前集合、とは言っただけれど真ん前に陣取って人の流れなんて気にも留めないでいるとは思わなかったわね。

私は、そんなどうにもマイペースな少女にあいさつをするわ。

「有希、おはよう！」

返ってきたごく小さな頷きに、私は笑みを零したの。そうしてから、急いで人通りの邪魔をしている有希の手を掴んで、近くの壁際へ連れて行ったわ。首を傾げた有希に、私は感嘆と共に続ける。

「はあ。それにしても有希はお利口さん過ぎるわね。凄いのだけれど、別に何時でも大正解である必要なんてないのよ？ 私達はそれで楽になるかもしれないけど、有希が疲れちゃうでしょ？」

「……大丈夫」

「でも、もし辛いことがあったら言っただけ？」

私は、返ってきた微かな肯首に、満足を覚えたわ。これならきつと、本当に大変なことがあったら確かに頼ってくれよう。

ああ、有希はいい子ね。どうにも、実年齢を知っているからか、子供に対して接しているみたいになってしまっただけれど、そもそもこの子は庇護欲を誘うのよ。

笑顔のまま沈黙した私の視線に、有希は首を傾げたわ。幼い宇宙人な彼女には、地球人の内でも奇矯な方の私の親心なんて分からないでしょうね。別段二人の間を磁気圏が遮っていたりする訳でもないのに。

「有希、手を繋ぐ？」

「……………」

でも、隣り合っている証拠に温度くらいは伝えてあげたくて、私は無言の了承を得てから有希の手を取ったの。

うーん、ちよつと冷たいわ。冷え性なのかしらね。ただ、ずっとそうしていると温かくなつたわ。本を手に持ちながら、有希は私のことを眼鏡の奥から感情薄い瞳でじっと見つめている。

ふと、私は周防さん——谷口が後で教えてくれたところによるとフルネームは周防九曜と言って光陽園学院の女子生徒らしいわね——のことを思い出したの。

比べるのは失礼なのかも知れないけれど、欠けている二人はちよつと似ているから。でも、有希は確かに人間味が足りていないけれど後で幾らでも補填できる感じはするの。

反してこちら側に生の殆どを置いてくれないだろう周防さんにフレンドシップを求めるのは、ちよつと難しそうね。

そこまで考えてから、私は有希に周防さんのことを訊いてみようと思いついたわ。なんとなく、通じるころがありそうだし、もし二人がお友達だったりしたら面白いからね。

「ねえ、有希？　貴女は周防九曜さん、って知ってる？」

「……先日、面識を持った」

「へえ……面識っていうことは特別仲が良いわけではないのかしら。それに、知り合ったのは最近なのね」

そうしたら、意外にも有希と周防さんに繋がりには薄弱だったの。

まあ、世界は広いし、ただ尖っている同士というだけじゃ中々くつつくこともないのかしら、と私は有希の誕生してからの経年数のあまりの少なさを忘れて思ったわ。

そうしてから、もし宇宙ならば尚更ね、と思つてからようやく私は有希に周防さんの立ち位置を尋ねる気になったの。谷口ったら、しらばっくれたからね。何が、疲れてるんだな一体全体お前の気にしすぎだろ、よ。

私は、セーラ服姿の宇宙人と繋がりながら、面と向かって訊いたわ。「ねえ、有希。あの子もひよつとしたら地球外から来たとかそういうのだったりする？」

「そう」

「えつと、それって有希と同じ宇宙的な何かということなのかしら？」

「分からない」

「そう、なの……」

私はちよつとびっくり。情報の蠢きから生まれた生き物のひとし

ずくたる有希ですら分からないことがあるって、そんなこと想像もできなかつたことだったから。

当然、私の心とか、人のあり方とか、有希が未だ学習不十分なところは沢山あるっていうのは知ってるわよ。でも、すごい達とクラウドソーシングしていて博識だろう彼女が見当も付かない相手が居るなんて。

もしかして、と私は思ったの。

「……周防さんって、ひよつとして、お空の上から来ていたりする？」

「彼女は我々から見て天頂方向より、来た」

「やっぱり……」

なるほど。きつと、彼女は属性が違うのね。私があの日宇宙人、未来人、異世界人、超能力者、等呼んだ際に漏れた、スピリチュアル系。

——あの言動、からしても神を探しているような様子とも取れたし、ひよつとしたら周防さんって、迷子の天使だったりしたのかしら？

下手をしたら、「あたし」こと【涼宮ハルヒ】関連ではなく私こと憑依転生者関連の存在だったりして。

と、私は三着目の古泉くん……さらつとピンクを着こなせているのは流石ね……を迎えるために有希と離れている方の手をふりふりしながら考えたりしたわ。

「涼宮も、よくあんな路地裏に隠れた喫茶店を知ってたな」

「そうね……私も先日試しにはじめて行った時はちよつと迷ったわ。でも、雰囲気もあって、良いところだったでしょう？」

「客は爺さん婆さんばかりだったが、随分と美味しいコーヒーを出すところだったし、何より安くて、たしかに良かったな」

「これは、本当に美味しいところを教えてあげる、って地図まで書いてくれた朝倉さんに感謝ね」

「なるほど、情報源は朝倉か。あいつ、交友関係広いから、穴場にも詳しいんだな」

私はキョンくんとお喋りしながらも、辺りをキョロキョロ。どうにも、中々彼と目を合わせることは恥ずかしくって難しいのよね。

とはいえ、周囲を見ていて何の収穫もない、なんていうことはないわ。青々とした緑の強さには目を引かれるし、ワンちゃんの尻尾を見送るのも、楽しいわよね。

それが、好きな人と一緒なら、尚更。……あれ、今気付いたんだけど、ひよつとしてこれ、デートみたいになっていないかしら？

ああ、くじ引きの結果を見たみくるちゃんが私を見つめながらやけにニコニコしてたのって、そういうことだったのね。うわ、一気に顔が熱を持ってきたわー。

「どうした、涼宮？ 顔赤いぞ？」

「な、なんでもないわ！ これはそう……ちよつと空の青さに対抗してみただけよ！」

「確かに今日はどこかでカミナリ様の通夜でも開かれてるのかわつてくらしいのともない晴れっぷりだが……普通、それに顔色で挑むもんか？」

「あんまり全てが青かったら、歩行者が止まるに止まれなくなっちゃうかもしれないじゃない……」

「……やれやれ。人にはC I Eが規定した二色しか見えてないって思ってるのか？ やっぱり、涼宮は変わってるな」

そうして照れ照れしていたら、キョンくんは表現力過多な長い感じで適当なことを言ってた私にツツコミをくれたの。横から見上げる呆れ顔にも、見惚れてしまうわ。

よく考えたら、こんなは無遠慮に近寄れているのって初めてかも。うう、胸が痛い。好きのドキドキって、意外と辛いよね。これに毎日親しんでいる人って大変。

でも、これって私が一番に望んでいたことで……ええとひよつとしたら私、無意識的に能力使っちゃったのかしら？

流星にS O S 団の団員プラスワンといったところね。誰一人遅れることなく九時きっかりに全員集合。私オススメの喫茶店に足を向けて、そうして今日の作戦会議を始めたの。ブラックコーヒー、美味

しかったわ。

因みにおごり云々のお話は、朝飯逃しちまったから腹減って仕方ねー、とおもむろにカレーを頼み始めた空気読めない谷口のせいでもなかったことになったわ。流石に、一人一番でっかいワンコイン以上というのは設定予算を上回っていたのよね。

美味しい美味いと絶賛する谷口を聞き流して、アプリコットティーをちびちび美味しそうに飲む有希を眺めながら、私はまず三組に別れて遊び歩くことを提案したの。

SOS団は、未だ結成してからそう経っていない時期。私は互いに慣れることから始めるべきだと思ったのよね。

未来予想図的に、どうせ皆相性が良いっていうのは分かっているし、谷口はどうでもいいし、二人組作ってーってやってても平気だと思っただのよ。……うっ、あの日のトラウマが少しだけ蘇ったわ。

まあ、そんなこんなで公平を期して、くじ引きで私とキョンくんペア、有希とみくるちゃんペア、古泉くんと谷口ペアになって、三々五々私達は別れたの。谷口のどうしてこの率で野郎と一緒になんだー、っていう嘆きの大ききなんてどうでも良い情報よね。

それにしても、その際に私は確かに能力をオフにしたつもりだったのだけれど……むむ、もしかしたら、やらかしているのかもしれないわね。自分を制御できずにお漏らしなんて、赤ちゃんでもあるまいし、恥ずかしいわ。

そんなこんなで、しばらく強がる茹でダコ状態の私を生温かくキョンくんが見守るといふ構図がずっと続いたのだけれど、それも、彼の一言で終わりを告げたわ。

「お……この公園って、確か俺達が初めて会ったところだよな」
「にや？ ……あ、ホント」

そう、私達の散策がたどり着いたのは、私が決めたその日に恋したあの公園だった。ブランコに、鉄棒……そして砂場。ああ、懐かしいわね。キョンくんの妹ちゃん、元気かしら？

それにしても何だか全体的に小さくなった気が……いや、私が大きくなっただけかしら。通っていた中学前半から背丈はあんまり変

化していないのよね。面白いものだわ。

感慨に浸って、ぼうっと、私が運命の場所を眺めていると、キョнкunは言ったの。

「それにしても、まさかあの日の猫少女が、こうも面白く成長するのは、流石に思ってたな……」

「うう、そんな子供を見るお父さんを通り越して孫を見つめるお爺ちゃんの目で私を見ないで……でも、そういえばキョнкun、どうしてこつちまで来て居たの？ お家からは遠いわよね」

「あの日は、こつちの方に住んでる叔母の家に遊びに連れられていたんだが……妹が長話に飽きちまってな。それで近場の遊び場を探したって訳だ」

「へえ。偶然ねえ……」

いや、運命的なのかしら。それだったら嬉しいけれど、私、実のところあんまり信じていないのよね。

実際に運命が働いていたのだったら、私はこの世に存在していないはず。でも、運命的じゃなくつても生じたからには生きなければならぬわよね。だから私は「あたし」のためだけじゃなく、生きてるの。

まあ、そんな自分の頑張りよりも、好きな人のこれまでのの方が気になるのが人情よね。……ちよつと、訊いてみようかしら？

「でも、私達の出会いなんて、それこそ青春の一ページばかりよね。キョнкunが胸に秘めてる他の大部分の項も、私は気になるわ！」

「いや、そんな俺のことなんて、どうでも良いだろ？ ……というか、今更気づいたんだが俺達の組み合わせって自称宇宙人達と遊ぶっていうSOS団の趣旨から相当に外れているんじゃないか？」

「くじ引きだからこういうのも想定範囲内よ。その場合は……つて、キョнкunくんなら、はぐらかすつもりね！ さあ、私に中学生生活をじっくり赤裸々に教えなさい！」

「いや、俺の話なんて……」

どうにも愚図りだすキョнкunに、私は喜んで攻勢を強めるわ。好きを沢山知って深く好きになりたいと思うのは、当然の欲求よね。こぞぞという感じで、囃し立てるわ。

でも、近寄りすぎるとまた顔に火が点いちやう私だから、触れないほどには離れてね。付かず離れず、まるで私達月と地球みたいね、とか私がロマンチックに思っているよ。

くつくつ、という独特の笑い声が聞こえたの。

私は、そつちを向いたわ。そうしたら、日を背にした少女が一人。あら、彼女も桃色カーディガンがよく似合う美人さんね。

しかし、どうして彼女は私達……というかキョンくん……を見て笑んでいるのかしらと不思議に思っていると、何とキョンくんに声をかけ始めたの。

服より淡い桃の色をした柔らかな唇が滑らかに動いて、そうして難解な文句が当たり前のように紡がれていったわ。

「いいじゃないか、キョン。君の皇妃オクタウエアに準ずる程波乱万丈な三年間を教えてあげてはどうかい？」

「俺の中学生生活は悲劇かよ……って、お前、佐々木か」

「ああ、その通り。君の海馬歯状回が弥生時代に思いを馳せることさえなかったとしたら、僕の名前を呼んでくれると思っていたよ」

「そりゃあ、二月程度前までつるんでいた友達を忘れるほどの記憶力じゃあないからな。しかし、やけに同じネタを続けるな……お前の中で俺は、二千年近く遅れてるってことか？」

「いいや、それは世界が進んでいると言うだけさ。過ぎゆく時の刻みを数え続けられる人間なんていない。日進月歩に置いていかれるのは、キョンに限らず誰だって当たり前のことなんだ。去る者は日々に疎しとも言いが、しかし僕の持論からすると旧態依然こそ安心の源泉とすらいえるものではないかな？ 何しろ星の輝きですら、過去の威光に他ならないものだからね」

「……何だ、佐々木。つまり、お前は今までどおりの俺と会えて安心した、つてののか？」

「くつくつ、些か趣のない言葉になってしまったが、そういうことだね」

「いやいやいや。ええ、キョンくん今の全部理解出来たの、成績悪いって嘘でしょ、というか、この以心伝心のやりとりって何よ。」

唐突に現れた、この女の子は、誰？　こんなにかわいい子、キョンくんにお似合いだろう子。ひよつとして。私は思わず、そのまま口にしたわ。

「貴女は？」

そうしたら、どうしようもなく彼女——佐々木さんと呼べばいいかしら——は形式張った笑みを私に見せながら、どこまでも自然に嘘っぽく、私に返したの。

何だか、ちよつと読めない子だわ。

「キョンの、親友です。はじめまして。貴女は……」

「涼宮ハルヒよ」

しかし、私が自分の名前を口にしたその時、虚飾の仮面はあつという間に剥がれて、驚きばかりがその表に現れたの。

まるで、空に浮かぶ太陽が、大つきなホタルのお尻だった、みたいな風に驚愕を持って、眩くように佐々木さんは言ったわ。

「貴女が？　本当に涼宮さん、なの？」

ああ、これはひよつとして。佐々木さんは私が「涼宮ハルヒ」になる前の知り合いだったのかもしれないわね。

容貌は違っていないなくても、中身が違う。だから、昔からの知己だったはずの人たちには変わった、二重人格じゃないか、とか言われたことすらあつたっけ。

私は「涼宮ハルヒ」を必死に真似していたのだけれど、それですら、何時だって彼彼女らには否定的に見て取られたのよね。

こういう時、私は誰にも認められていないんだって、すつごく寂しい気持ちになるの。そうして、私は「あたし」の限りある青春を浪費している寄生虫だと再認識してしまうのよね。

でも、そんな時は今まで、何時だってアイツが……と、私が頭を降ろしたその時。唐突にも誰かの静止の声と、それより何より強い視線を私は覚えたの。

その熱を見返し、ただ一人私を認める彼を私は見つけた。ぽかんとする私の代わりに、そいつが佐々木さんへと言葉を返してくれた。

「そんなの、決まってるんだろ。こいつだけが、涼宮ハルヒなんだよ」

そう、どんな疑問をも断じる勢いで、谷口は、そう言ってくれたの。

……ありがとう。

第十一話 エアバッグとゲリラ豪雨

「ふふ、オムライス美味しかったですねえ」

「ええ。チエーン店のものと思つて甘く見ていたわ。やつぱり、とろとろの卵は、酸味の利いたチキンライスとよく合うものね」

「本当に、皆と同じにしてよかったあ。長門さんと男の子たちは、ハンバーグ付きを頼んでいましたけれど、肉汁がすぐくって食べごたえありそうでしたね」

「確かに、美味しそうだったわ。そうね……次来た時には、私達もハンバーグを食べてみましょうか。ふふ。私お肉つてとても好きなのよね」

私とみくるちゃんは柔らかな日差しの中を、おしゃべりしながらのんびり進むわ。街路樹の緑が、空の青に映えて、とっても綺麗。

ちよこつと郊外の方とはいえ、やつぱり外に出れば楽しみは尽きないものね。あ、お爺さんとお婆さんが連れ合つてゆつくり歩んでいるわ。あれはただ歩調を合わせただけじゃなくて、互いの気持ちを添わせた結果の一緒なのでしょうね。

好きにした結果、ずっと一緒というのは憧れるわ。SOS団も、そんなに末永いものになったら嬉しいわね。

そう、今は初のSOS団の活動の午後の部の最中。再びのくじ引きで一緒になったみくるちゃんが、お散歩したいですと主張したのに合わせた結果が、今ののんびりっぷりね。

先にはちよつと心乱れちゃったこともあつたけれど、団活は滞りなく継続中。

そもそも、あれは私がトラウマ刺激されて、とちよつと涙目になっただけ。それくらいで、皆の楽しい一日を台無しにしては駄目だものね。

佐々木さんの登場に谷口乱入でしつちやかめつちやかになつた後。気を取り直した私達は改めて、現況確認のためにおしゃべりをはじめたわ。

いや、博覧強記とは、正しく佐々木さんのことね。どうして彼女の話だと哲学の瓶から自然と妖怪が湧いて来たりするのかしら。

それだけでなく、話してみてもキョンくんが佐々木さんを気に入っている理由がよく分かったわ。あの子、全体を認めているから興味を伸ばせるのね。生きるのを楽しんでいる感じがして、素敵だわ。

ちよつと、捻くれた感じがするけれど、またそんなところも彼と似ていて良いのよね。

そして、私は古泉くんの言い訳的なあの場に出くわした理由語りの合間に、こつそりと谷口に礼を言っておいたわ。ちよつと気恥ずかしかつたけれど、あの言葉は本当に、嬉しかったから。

谷口ったら、何だかんだで気がつく良い奴なのよね。出来れば、い子とくつついて幸せになつて欲しいところ。それを抜きにしてももつと団の有希とかみくるちゃん等と仲良くなつてくれないかな、と思わなくもないわ。

そういえばSOS団つて見渡す限り可愛どころばかりよね、と思いつつお隣の小さくておつきなみくるちゃんをすこし見下ろし、私は思索に途切れた会話を再び繋げたの。

「……それにしても、みくるちゃんったら、デミグラスソースを取りやめて、そこにケチャップで可愛いハートを描いてしまうなんて、なんて女子力高いのかしら。隣でほうじ茶しみじみ飲んでた私なんて比べたらおじさんよねー」

「そんなことないです。涼宮さんは、とつても可愛いんですから！ ソースで口元を汚した様子とか、茶柱に無邪気に喜ぶ姿とか、その後全部に照れて鳴き声をあげるところとか、もう、すごいです！」

「み、みくるちゃん？」

そうしたら、今度は愛らしい先輩さんが私のことをしきりに褒めだすという珍事が起きたわ。とんでもなく可愛いアイドルはだしの女の子に、可愛いって言って貰っているのは最早違和感しかないわね。

いや、私なんてそんなに興奮して語られるようなものではないと思うのだけれど……あ、でもみくるちゃん何だか嬉しそう。ならそう勘違いして貰っていてもいいかしら。

でも、天狗——同じく何でもお前のせいとされるあたり私的に親近感がないわけでもないけれど——にはなりたくないところ。話半分に聞いて、私は話を変えるわ。

「ま、まあ可愛いといえは有希も相当よねー。間違えない子なんだけど、ちよつとやり過ぎたりする時とかに、私はぐつと来ちゃうの」

「ああ、そうですよねえ。あと長門さんは熱心で、だからこそ時々身だしなみを忘れてたりして隙を見せてくれるところとかも、良いです。今日も風で髪が乱れたことをしばらく気にしていなかったみたいなので、わたしが整えてあげちゃいました！」

「あー、想像できるわ。有希ったら、鈍感さんだからねえ」

目を瞑って、私は想像するの。乱れ髪のために頭を撫でてあげる、小さな上級生のなすがままにされている有希。彼女のためにちよつと背を伸ばして笑みを見せてあげたろうみくるちゃんと合わせて、それはとつても素敵な光景。

彼女らと一緒にできたなら楽しかっただろうな、と思いながら、私は何だかんだ楽しめた午前中のことを思い出して、こんな時に自分の体が二つあれば良いのにな、と思ったの。

あ、勿論力に願えば可能だろうから、思うだけね。実際プラナリアさんみたいにして涼宮ハルヒの分裂、とか怖すぎるわ。

そうやって私が入分の中に潜む可能性に身震いしていると、みくるちゃんは、可愛らしく頬を緩めて言ったの。ああ、本当にこの一つ上の人は笑顔が似合う子。ずっとそうあって欲しいな、って私は思うわ。

「そういえば、涼宮さんこそ、キョンくんとのデートはどうでした？」
「闖入者が多くって、素直には楽しめな……って、みくるちゃん？ あれはデートじゃないのよ？」 団活、団活動よ！」

「ふふ……そういうことしておきますね。そつかあ……でも、邪魔が入っちゃったんですね。うーん、ちよつと残念です」

まあ、そう言いながらもみくるちゃんは、微笑んだままだった。私とキョンくんの仲の進展なんて、ワンちゃんのお見合い経過観察に挑む程度の期待感、だったのかしらね。

私じゃあキョンくんに釣り合わないし、みくるちゃんに恋の成就を望んで貰っているだけ、マシ、なのかな。私の思いが知らずに彼女に知られていたことは、恥ずかしいけどね！

でも、恥で引くほど私の思いは安くはないのよ。うん。もつともつと、頑張らないと。何時か全てを【あたし】に返さなくっちゃいけないって知っていても、全力でね。

決意と共に見上げれば、春風に乗って、とんびさんがふわり。地を見下ろせば、アスファルトとコンクリートの隙間に揺れるタンポポが、同じ風に綿毛と未来を乗せていったのにも気付いたわ。

そして、私の視線を辿って、みくるちゃんは全ての光景に親しみ、喜んでいた。絹の髪を遊ばせて、少女の笑みは深まるばかり。

それもそうよね。柔らかな日差しの中で、見渡す限りの全てが全て、輝くように生きているのだから。区切るようにある固体も人の生の動きの痕と思えば、趣深くもあるわ。

そう、限りある生に彩られた世界はこんなにも素晴らしくって、愛おしい。だからちよつと悔しいの。それを私が【あたし】に面と向かって教えてあげられないだろうということが。

ただ、私は決めているわ。それでも、精一杯に彼女のために何かを遺そうと。それが、皆みたいに美しい命の形になれたら、嬉しいな。

はにかみに終始していた私をどう見たのか、みくるちゃんは急に表情を変えたわ。それを残念に思う私を他所に、彼女はぼつりと零したの。

「……………どうして涼宮さんは、わたしに何時の未来から来たの、とか目的は、とか聞かないんですか？」

スカートを握り込みながら呟いた、その言葉はきつとみくるちゃんなりの精一杯。緊張しているのでしょうね。先の笑顔はどこへやら。似合わない険が眉の間に出来ちゃっているわ。

私はそれを和らげてあげたくって、なるだけ表情を柔らかくしてから、返したの。

「裏付けなんて、私にはいらない。私はただ、信じているから、それで十分なの」

手を、胸元に当てて、私は言う。詮索なんて要らないの。だって、その未知は怖くなく、むしろ柔らかかなものだとは私は知っているから。

それは、未来知識なんていう最早指針にしかなくてくれないものに依っているという訳でもなく、ただみくるちゃんという人の一部をそれだけ解せているという訳だった。

一点不思議そうな表情になった彼女に安心してもらうために、私は本音を続けたの。

「私は、おかしな要素で楽しませてくれるようなピエロが欲しいわけじゃないわ。ただお友達が、欲しかっただけ」

まあ、お友達が似た者同士だと特に嬉しかったりもするけれどね、という文句ばかりは口に出さなかった。でも、私の中で間違いないことばかりは言えたわ。

寂しかった。だから、こうして隣り合ってくれたことばかりで嬉しいの。その上でこんな大切な人に、奇矯に踊ってもらうことまで、私は期待しないかな。

「私にとってみくるちゃんは、笑顔が素敵で優しい女の子。そんな子が、未来から私の隣にわざわざやってきてくれたなんて、本当に、嬉しいことだわ」

私は【あたし】と違って、空から知らない子が降ってくるより、知ってる子が隣で笑ってくれる方が有り難いの。

当たり前なんて、この世にはなくて、全てが全て大切で。だから、失われると悲しくて、すれ違うと苦しいのだけれど、それでも皆には笑っていて欲しいと願うのは強欲かしら？ まあ、神でもない身で全てを抱きたいなんて、駄目よね。

そんなこんなを考えていたら、何かが私の顔にぶつかって来たわ。この柔らかさ……エアバッグ？ いや、違うわね、これはもしかして。

「うう……ごめんなさい、ごめんなさい……」
「わぶ……にや、みくるちゃん？」

それは、飛びついてきたみくるちゃんの豊満な身体だったわ。私の顔にダイレクトに大つきな胸が。危うく女体に溺れそうになったところで、彼女はその身を離れたわ。

向かい、とても苦しそうにして、私より先のところに自分の本来があるみくるちゃんは、言ったの。私はふと、そういえばみくるちゃんって漢字だと未来ちゃんってなるのかしらね、とか思ったわ。

「本当は、色々とあるんです。何も言われていないんですけど、きつと、やらなければいけないと、言わなければ駄目なこと、出来ることって、わたしならあるはずなんですよ……」

みくるちゃんは、未来人。そのことを、今更ながら私は彼女の涙に痛感したわ。やはり彼女は多少なりとも、私の向かう先を知っていた。

私の行っているやり方はきつと拙いのでしょね。だから、優しいみくるちゃんは声を上げたくもなるはず。そっちじゃないですよこっちですって、出来るはずなのよね。

でも、みくるちゃんは改めて、決めたのでしょ。涙に慌てる私を見て、彼女はそれを無理に拭ってから言ったの。

「でも、わたしは涼宮さんを……【貴女】を信じます。貴女なら、間違わないと思うから」

そうして、みくるちゃんは、見守ることを選んでくれたわ。

未来人が、現代人の愚かを、認める。それがどんなに大変なことか、私は知らない。けれども、彼女が作った笑顔がどれだけ大切なものであるかだけは、判った。

「みくるー、ハルにやん！ 今日二人して、お出かけかい？ いけずだねー、二人共、どうして私を仲間に入れてくれなかったのかなっ」

「あ、鶴屋さん……あの、これはSOS団の活動の一環で……」

「皆で遊ぼうっていう活動をしているのよ。他の団員もそれぞれ、友好を深めているところだと思うわ」

「あー、なるほど……団員たちは皆お友達なのかな？ みんな仲良く円満が一番ってことだねっ」

みくるちゃんから決意を聞いてからしばらく。その後も仲良くしていたら、微かに残る湿っぽさを吹き飛ばすかのように走り寄ってくる影があったの。その人は、勢い余って私達の周りを三周してから喋

り出したわ。

その意気揚々が形になったような彼女は、私のライバルこと、鶴屋さんだったの。私は、一緒できなかったことを残念がっている彼女に今は団活動で来ているのと説明したら、にんまり笑ってくれたわ。

日向に、綺麗なひまわりが咲いたわ。この人も愛らしい先輩よね、と思っただら鶴屋さんは言ったの。

「でも、ちよつとスパイシーさが足りないっさ。甘いばかりだと胃が持たれるによろよ?」

山あり谷あり、そして突然の大海原が大自然つてもものじゃないかな、と続ける鶴屋さんに、私達は黙ってしまうわ。

遠慮がちでは何も変われない。そんな自明を先輩が語っていることくらい、私にも分かったわ。そしてそこに、笑顔のまま鶴屋さんは繋げていくの。

「天気続きだとお天道様も飽きちゃうっさ。そんなことばかりしてつと、ゲリラ豪雨が降っちゃうかもよ?」

鶴屋さんは、そんなになつたら、せつかく乾かしていたチーズも台無しだねー、とかけられらと笑うのよね。

まるで彼女はふざけているみたい。けれども、それは違うのでしょね。みくるちゃんも、私の隣で表情を引き締めているわ。

それは、上から下にほとんど全てを知って話しているということ悟らせない助言。いやホント、私こんな人に勝てるのかしらと思いがらも、真っ直ぐに返すわ。

「大丈夫よ」

「ほほーっ?」

「雨降って地固まる、っていうでしょ?」

「なるほど! ハルにゃん達の関係はコンクリ製みたいに見ただけカチカチな訳じゃないってことだねっ。熱々っさ!」

鰻屋さんの甘い香りに長髪をくるん。あまりにも躍動的な鶴屋さんは。この時だけは少し静まり返ってから、言ったの。

「うんうん。そうやって、君たちは団結していくんだらうね」

チエシヤ猫を貼り付けていた鶴屋さんは一転、在りし日を望むかの

ように面を変えたの。

私を見る彼女は、まるきり先達の顔だったわ。……本当に、鶴屋さんって何者なのかしら

事故は起きずに雨は降らず。けれども、本当に、何も起きていなかった？

第十二話 百億点对イルカ派

毎日が誕生日ではなくても、それなりに日々は楽しいものね。まあ、「あたし」なら、つまらなくても無理矢理面白くしてしまうだろうけれど、私だって同じ。

勉強だって、分かるようにすれば眠気もたらず呪文ではなく先生方の色つきクイズになるし、体育だって、楽しもうとすれば肉痛めるばかりの運動が皆で行う遊技にだってなるもの。

そのようにして、一人きりだと退屈な放課後を、私は団の皆でわいわいするのにあてることで、毎日の楽しみにしているわ。

まあ、それにしても皆一つの部屋で好きにしている時間が多いのだけれど。それも、当座の目標すら不在で兎に角遊べればいい、という緩い団の中のことだものね。それも仕方がないかな。

「うーん。にしても、デザインって存外難しいものねえ」

そんな中私は、共有させて貰っている文芸部室で家から持ち込んだお古のノートパソコンにてホームページのロゴ製作一つに悪戦苦闘中。

なるべく目立って、それでいて先生方にも認められそうな色といえど……やっぱり赤か青、かしら。しかしビビッドカラーを駆使するのは流石に問題かもね。

頭の中には、何だかびびっとくるようなデザインもあったのだけれど、思い直すとそれはちよつと、という感じだったの。あんまり自分の団の名前をくねくねさせてしまってもねえ。常識からはみ出ちゃいそうで嫌だわ。

仮入部員だった私を覚えていてくれたコンピューター研究会の人たちに相談したところ、快く手伝ってくれて可能になったネット環境。しかし、広大過ぎるその海の手前で溺れそうな私はちよつと馬鹿みたいね。

とはいえ、想像力の足りない私では、コンピ研の部長さんに借りたペンタブレットを、思ったように動かせないのよ。それでも、美術の

成績は中々なのだけれど、自由に創造するというのはどうすれば正しいか分からなくて困るわ。

まあブログにしておいた方が、更新しやすいのかもしれないけれど、何となく古式ゆかしいホームページ作りというのもやってみたかったのよね。まず、テンプレートがないと、色々できそうじゃない？ 私には、むしろ難しかったみたいだけれど。

そんな、悩める私に、いかにも軽薄な声がかかったわ。

「ふあ……どうだ、涼宮。中々進んでないみたいだが」

「谷口。あんたが眠そうな顔して読んでた文庫本のページよりは進んでるわよ……って言いたいけれど、実際全然ね。うーん。初心者が全部一から手作りっていうのは無理があったのかしら？」

「どれどれ……って殆ど真っ白じゃねーかよ」

「あ、そうだ今拡大させてるんだった。ちっちゃくすると、こうなるわ」

机に可愛い女の子が表紙の薄い本を置いて、無遠慮にも覗いてきた谷口の前で、私はパソコンを操作するわ。そう、私は試作品の粗を消している途中だったのよね。

行っていたのは、ドット単位での修正。ふふ、私はこれでも凝り性なのよ。まあホントは……主線を重ね描きしたせいでぐちゃぐちゃになってしまったのを根気よく整えていただけ、だったのだけれど。きつと分からないでしょう。

綺麗な丸に囲まれた、六色で出来たSOS団の文字。それを見て、谷口は微妙な表情をしたわ。筆が遅いって私をからかおうとでもしていたのかしら？ でも、そこそこ出来上がっていたのを見て、彼は苦し紛れのように言ったわ。

「なんだ……マトモなの、出来てんじゃないか」

「そう、マトモなのよね……やっぱりそっか」

「問題あんのか？ ……あ」

「デリート、っと」

私は谷口の言葉を信じて、そのマトモとされたロゴを、一思いに消し去ったの。そして、そのまま私は保存もせずに描画ソフトを閉じた

わ。

自然とタスクは切り替わって、現れたホームページ制作ソフト、入り口しか出来ていない作成途中のSOS団ホームページが再び出てくるわよね。そのあまりの真っ白さに、私がつめ息を吐いてしまったのは、仕方ないでしょう。

「はあ」

「うわ、もったいねえな。よく出来てたじゃねえか」

「そうよ。自己採点でも、百点満点中、九十点つてところね。でも……本当は私、最低でも百億点は欲しかったのよ」

「はあ?」

今度は、谷口がはあ、ね。こっちは嘆息と違って疑問によるものけれど。まあ、私も自分の発言が中々におかしいものだとは思っているのよ。でも、それでもここは、引けないのよね。

「ゼロを重ねて、せめて宇宙まで届くくらいのは創りたかったのだけれどねえ。そうしたら、私達の日常って一変してくれると思わない?」

「いや、意味不明なんだが……」

「なるほど。先程から涼宮さんが試みていたのは、芸術性による地球のホメオスタシスの突破ですか。実に、興味深いですね」

「流石ね、古泉くん! そうよ、どうせなら私は【あたし】らしく、独力で日常を変化させてみようと思ってるよ!」

「はあ。古泉お前って、こんなにオセロが弱いつてのに、涼宮の目を白黒させるのは得意なんだな……本当に、集中してたのか?」

「いやはや、流石にここまで黒で染まってしまった盤面を見続けるのは苦でして、つい、耳をそばだててしまいました」

「やれやれ」

言葉足らずで谷口を困惑させていると古泉くんが、私の言葉を知的に変換してくれたわ。その上手さに私は、はなまるをあげたくなっちゃった。何故か家にあったダイヤモンドゲームでもここに持ち込んで来たら、喜ぶかしらね?

そう、古泉くんだったらボードゲームあまり得意ではないのに、好き

みたいなのよね。何時も、キョンくんや谷口と一緒に将棋や囲碁等を楽しんでるわ。

中座してしまった古泉くん、キョンくんが苦言を呈したことに、軽く苦笑いで返している辺り、彼らって本当に仲良くなったわよね。何か恨みがましそうな目をしている、ちよつと捻った話になるとついて行けない谷口は少し可哀想だけれど。

「しかし、それが駄目なら次善の策を披露するしかないよね。……みくるちゃん、出来た？」

「はい。完成しました！ お裁縫なんて久しぶりでしたけれど、とっても可愛く出来たと思いますー」

「ありがとう。ふふふ。やってみたって手に取ったみくるちゃんが、おもむろに頭頂部を首元に縫い付けはじめた時はどうなることかと思っただけど、これで準備は万端ね！」

私は、みくるちゃんから手渡された胸元で潰れていたその布地を、大切に抱くわ。果たしてこの赤青二色一対は、皆に認められるものかしら。根回しは済んでいるのだけれど、ちよつと不安ね。

でも、私渾身のデザインにみくるちゃんがフードをくっ付けてくれたこれは、うん、明らかに可愛らしいもの。これならきつと、大丈夫。それらしく、SOS団を認知させられるわね。

「……涼宮。昨日あたりから朝比奈さんと隅の方でちくちくやっていたと思ったら、今度は何を始める気なんだ？」

「ふふ。キョンくんそれは、これを見れば一目瞭然よ！」

「それは……ピンクと青の……パジャマのように薄手のキグルミか？ その耳の長さ、まさか捻ってツチブタという訳でもないだろうか……」

「そう、ここはストレートにうさぎさんよ！ それに手製のチラシ。これで、私達は日常を打破するのよ！ ね、有希！」

私はふわふわうさぎさんのキグルミに、鞆の中にしまっていた大量の不思議募集中のピラを見せつけてそう言ったわ。

今は部活の勧誘期間外だけれど、機会をねだったり交渉したりして、明日の放課後にチラシ配布することを了承して貰ったのよね。

最初は無理そうだと岡部先生も言っていたのだけれど、新設同好会とはいえ機会は平等にしてもいいでしょうという、校長先生の鶴の一声で決まったの。いや、カツラは少しごわごわだったけれど、頭が柔らかい人で助かったわ。後で改めてお礼しないとね。

ああ、明日が楽しみね。うさぎといえは有希。そんな彼女と一緒にビラ配りなんて、可愛さの隣で私はどうなっちゃうのかしら。まあ実際はにこにこ笑顔でチラシをばら撒くことになるだけなのだろうけど。

私が微笑みを向けていると、相変わらず、分厚いちよつと著者名にカチカチなふりがなが使われてばっかりの本を手にしたまま、顔を僅かに上げて、有希は言ったの。

「私は聞いてない」

あれ、言っていないなかったかしら？

「うう、こっ恥ずかしかったー……」

「彼らなら照れるくらいなら、とでも仰るのでしょうか……いやしかし、お疲れ様です、涼宮さん。お茶をどうぞ」

「ありがと、古泉くん……あー、あんまりチラシ、捌けなかったわ」

独断専行してしまった後に、了承を得てはじめたビラ配り。それが終わって、私はくたくたになってしまったのよね。

ああ、緊張した。昨日は高く持ち上がったテンションで忘れていたわ。そう、私はちよつとしたあがり症だったのよね。いざという時にうさぎさんを萎れさせてしまったのは、本当に残念至極。

縮こまる私に比べて、有希うさぎさんのしゃんとした姿は、目を見張るものだったわ。青色うさぎさんは自分の持ち分をさっさと片付けた後、私を置いて帰っていったの。

……あれは、やらされて怒っていたというわけじゃないわよね。事前に話していた自由解散という文句を守っていただけ、だったら良いのだけれど。無理、させちゃったかなあ。

「初めての配布作業です。予定の半分は消化できたというだけで、胸を張っても良いものではないでしょうか？　そもそも、私見ですが準

備していた量が北高の生徒数と比べて多かつたようなきらいが見受けられます。うさぎの格好の卓抜性といい、これでもう充分、S O S 団は認知されたものではないかと」

「ありがとう。そう言ってくれて、助かったわ。気持ちが悪くなったかも」

「それは、良かったです」

旧館文芸部室にて茶を片手に項垂れるそんな私を、古泉くんは何時も通りに笑顔で認めてくれてるのよね。

一人お湯を沸かしながら団長を待っていているなんて、古泉くんたら非常にありがたい人だわ。確か、今日は私と有希だけで団活動するの、ということと皆に集まりはないと事前説明したものだっと思っただけだ。

まさか……有希にやっちゃったみたいにも、古泉くんには伝達不足だった、ということはないでしょうね。もしかして私、ボケちゃった？

つい気になって、私は古泉くんに口を開こうとしたの。すると、先手とって、彼は言ったわ。

「ああ、ここに僕が居るのは、一つ、告白したいことがあってのことでして……涼宮さんが言葉足らずだった訳ではありませんよ？」

「ああ、なら良かったわ。それで、告白って、何かしら？ 実は、古泉くんはライオンさん派だった、とか？」

有希を一人にさせないためにも、友達とペアルックっていうのも素敵と思つてのうさぎさんだったのだけれど、私的には、ライオンの格好良きの方も身にまといたかつたってこともあったのよね。

やっぱり、谷口みたいに男の子でうさぎ派は少数派なのかしら。そんな風に、私は古泉くんが先の配布に関係したことを言うてるのかと思つたのよね。

どうやらそれは勘違いだったみたいだけれど。ちよつと顔を真剣にして、彼は言ったわ。

「いえ、僕はどちらかというとイルカ派でして、そもそも選択範囲外なのですよ。……しかし、涼宮さんはちらとも恋愛的な告白とは考えな

いのですね。少々、男としての自信を失ってしまいました」

「え？ でも、違うのでしょ？ そもそも古泉くんが私なんかのことを好きになるなんて、ありえないでしょうし」

「なるほど。仮称、天蓋領域の言葉もまんざら誤っているものではないようです。涼宮さんは受け入れてしまったら距離を失くしてしまう……邪気がない、むしろ無さすぎるといってもいいでしょう」

「古泉くん？」

優しく、しかしどうしようもなく遠いものを見つめるようにして、古泉くんは一人語るの。その細まった瞳は、明らかに見定めようとしている。燃えるような熱意が、私にも分かったわ。

思わず竦む私。そんな小物な私に向けて微笑んで、古泉くんの告白は唐突に始まったわ。

「実は、僕が超能力者の団体……機関を創って運営している、リーダーだと言ったら、貴女はどうします？」

「え？ ホント？」

前の【あたし】が作り上げてしまった超能力者達の纏まりで、今私に溢れさせてしまった感情の処理を任せてしまっている、機関。

何でか未来予想図には情報が足りなかったから、誰か大人がその操縦をしているものと思っていたのだけれど、違ったの？ そうしたら、学業と組織運営に挟まれた古泉くんって大変じゃない？

と、ここで私もようやく気付いたの。ああ、私はやらかしたんだって。どうして、私は未知で分からないはずの情報をそのまま知っていることであるかのようにして、聞き返しているのよ。ああ、どうにも私は下手なアクトレスね。

「知らない筈の言葉をそのまま受け容れ、しかしその真偽を見抜くこともない……こうして間近で見て、それが演技ではないと確信できました。まさかとは思っていたのですが、涼宮さんは全てを知っている訳ではなさそうですね。それなら安心です」

そして、私のでっかい傷に付け入って、ようやく古泉くんは安堵したようだった。少年の笑顔で、彼は続けるの。

「全知全能でもなければ、人の手に負えるはずですから」

きつと抱きしめることすらも可能なのでしょうかね、とまでその男の子は言ったわ。決して、その手は伸びてこなかったけれど。

第十三話 隠し味はナルキツソス

「……朝からどうしたんだ、涼宮？ 何やら、麦茶と麵つゆを間違えたようなたいそう微妙な表情をしているが」

「うーん……うさぎさんになってから意外に、声を掛けられる数が増えたのに驚いちゃって。麵つゆの間違いは谷口から体験を聞いたことがあるけれど……そういえば家の麵つゆには何時も何か隠し味がぷかぷか浮かんでいるから間違えたためしはないわね」

「まあ、悪い意味じゃなく目立ったのなら、大勢に親しみを持たれても当然といえはそうだろうな……涼宮の家の残念そうな出汗事情に關してはノーコメントだ」

格好良いって、色々とあるわよね。その中でも決まっていると私が感じているキョンくんの気怠げなポーズに、呆れが混じってしまったのが残念だわ。そんなに私、おかしなことを口走ってしまったのね。

冷蔵庫のドアに置かれたつゆの界面にたっぷり七味にいりこが泳いでいる、そんな刺激的な事件はそうそうないということを、今更ながら私は知ったの。そして、私のやり方だと【涼宮ハルヒ】はあまり奇妙に思われないということも、分かったわ。

うさぎさんのきぐるみ作戦から、休日を挟んだ翌日。私は、朝から沢山の人にあいさつをされることになって、驚いちゃったのよね。

いや、私の顔なんかよりもビラの内容を覚えて貰いたかったのだけれど、しかしやっぱり【涼宮ハルヒ】は目立ってしまうものなのね。嬉しくも、ちよつと気恥ずかしくてならないわ。

「うう、先輩にきぐるみ脱いだらもつと可愛い、とか言われたのはショックだったわー……あのうさぎさん、三日も制作に掛けた力作だったのに」

「……よくわからんが、普通、容姿を褒められたら喜ぶべきじゃないのか？」

「人間、見た目よりも中身よ！ ……というより、花より団子？ 何の

時間もかけていない顔の造形よりも、頑張った衣装のことを褒めて欲しかったわー」

「やれやれ。谷口辺りが聞いたら、憤死しそうなことを涼宮は平気で口にするもんだな」

「そうかしら？」

キョンくんの言葉に私はクエッションマークを浮かべるけれど、はたと納得を覚えたわ。そういや、谷口って、中学時代に女子を容姿でランク付けしていたことがあったのよね。

あいつの家で私がメモした紙を見つけた時には、随分と慌てていたけれど、そういえば私のことは書いてなかったような気も。客観的に見たら、私ってどのくらいなのかしら。

いや、【涼宮ハルヒ】は綺麗な子だとは知っているのだけれど、中身が私だと思うと、どうにも鏡の中女の子の不細工に思えてしまうのよね。これも引け目、ってやつなのかしらね。

ついぼうつとしてしまったところに、目の前でキョンくんは溢すように言ったの。彼の吐息が触れて、思わずぞくぞくしてしまったわ。

「涼宮……にしても、今日は随分と近くないか？」

「それは、そうね……いや、これはプライベートスペースの改変中というか何というか……うう、恥ずかしくなってきたわ！」

「照れるくらいなら止めるよ……別に、嫌なわけじゃないが」

頬をぽりぽり掻きながら、りんご状態の私を見下ろすキョンくん。流石に、隣り合うように椅子を彼の席へ持つていつてから会話をはじめたのには、違和感を持たれてしまったようね。いや、今更指摘するあたり、ちよつと鈍感なのかもしれないけれど。

でも、それが嫌じゃない、という言葉質は取ったわ。なら、好奇の視線が飛び交う始業前の教室内でも、もうちよつと頑張れるに違いないのよ。

そう。もう顔から火が出て心臓が爆発しそうでも、それでも、もうちよつと、頑張れる、かな？

「にやあ……」

「うお。大丈夫か、涼宮！」

「もうダメ……」

キョンくんの顔がくらり。下からの構図でもイケメンは格好良いものね、とか思っている、心配そうな彼の声が私の耳に届いてきたわ。

あら、これはひよつとして。私ったら照れすぎてオーバーフローを起こしてしまった、とか？

焦って寄ってくる朝倉さんを筆頭に、クラスメートの数々を視線に入れながら、私は目を瞬かせるの。

「大丈夫、涼宮さん！……って、これは熱っぽいだけ？」

「うわ、涼宮さんったらキョンにしなだれ掛かってるよ……」

「びっくりしたけれど、何だか幸せそうね」

「拳一つ分近めにアプローチしただけでこれって、初心すぎる……」

暖かな何かに捕まり、何が何やら色んな言葉の渦に私は放り込まれて、そうしてぐるぐるした視界の中で、最後にたった一つの言葉を拾ったわ。

「ったく。何、柄にもなく焦ってんだよ……」

そう、その通り。私は確かに焦っていたわ。頑張らなくっちゃという気持ちが少し、私の動機を強めさせ過ぎていたかもしれない。

でも、仕方ないわよね。私は、彼女に託された。なら、誰より彼に近づかないと。

だって、私の中のこの好きは恋なのだから。あの子と違って、私はそう決めたの。

頑張らなくっちゃ。

私、カレーは甘口が好きなのよね。まあ、それはお母さんのカレーが薄白くなるくらいに混ぜられたヨーグルトの甘味に慣れさせられたせいでもあるかもしれないわ。けれど、それを抜きにしても私は辛口を苦手してしまうのよ。

クミンにコリアンダーに、ターメリックにカルダモン。後はチリペッパーとかオールスパイスとか、その他色々。カレーのあの茶色は数多の香辛料を容れてるわ。けれど、私は唐辛子にペッパーの台頭を

決して許してあげないの。

何せ、舌がピリピリ痛いのは嫌だわ。目に痛いくらいに汗をかくのも辛いじゃない。どうせなら、もっと優しくして欲しいわ。角のないまろやかこそ、至高のものじゃないかしら。

いや、勿論刺激を好む人達が言う、辛いのが好きという意見も分かりますのだけれど。でも、私の中ではカレーは子供達とニコニコ食べるものなのよね。

そう、私は目の前で実に美味しそうに、辛口カレーをスプーンで掬って食んでいた彼女に言ったの。返答は、曖昧な笑顔と一緒だったわ。

「くっく。分からないなあ。かもしたら私（こ）は、涼宮さんみたいにかレーに舌を這い回せるように旅次行軍させていないのかもね。私にとつて、美味しさは喜ぶべきものであっても、そこまで親しむものではなかったから、味蕾にも刺激受容体について一家言はないのよ。……うん。だから私はどっちも好きだと思うとしか言いようがないかな？　ごちそうさま」

そうして、有希より少し長めのふわりとしたボブカットが、私の前で揺れる。キョんくんの隣でしていた男の子とも取れる口調を捨て去りながら、佐々木さんはぺろりと、最後の一匙を頂いたわ。

言葉終わりに静かに手を合わせて、一呼吸。ラッシーを飲んで喉を潤してから、辛味も甘味も問題なしな、大人っぽい佐々木さんは言ったの。

「さて。先に、涼宮さんの中学時代の情報は頂いてしまったことだし、私も中学時代の愛すべき親友と袂を分かつまでの経緯を語らなければいけないでしょうね。……涼宮さんに、安心してもらうためにも」

片目を閉じて、わざとアルカイツクスマイルに茶目つ気を出す佐々木さん。うう、やっぱりこの人は頭が良すぎるわね。

彼女なら私がキョんくんに気があるっていうことは、初対面の頃から分かっていただろうし、更に私が恣意的に情報を絞ったというのに、どうにも話を聞いた佐々木さんの表情には理解の色が浮かんでしまっているのよね。

それは、今日落ち合ってからこのカレー店で落ち着いて会話をするまでなかったもの。つまり、佐々木さんは私の平凡な中学生活から、【あたし】とのどうしようもないくらいの違いを導き出してしまったのでしょね。

正直なところ、その事實は、ちよつと怖い。それでも、私をただ【涼宮ハルヒ】と認めてくれる彼女に私は頷いて、続きを促すの。

「お願い、佐々木さん」

私は、はじめての異性としてインプリンティングしてしまったキョんくんを、ずつと追いかけてた。そして、あり得ないはずの知識から当たり前が私と共にあることを望んでいたの。

下手をしたら、無意識的に力すら使っていたかもしれないわね。それほどまでに、好きにかまけていたのよ。でも、それって傲慢なことだったんじゃないかと、今更だけど思ったわ。

きっかけは、初めての団活動で佐々木さんと合った時から。あの日知らずに小さく出来た胸の傷は、知らずにぐんぐんと大きくなっていったわ。

そして、私は多分違うのだろうけれど古泉くんの恋慕のポーズにも取れたあの日の告白を見た時、一瞬考えてしまったの。ああ、私なんかは誰にも釣り合わないのに、って。

恋愛は気の迷い、精神病とすら【あたし】は口にしていたけれど、言い得て妙。だって、時に恋すると自分のことすら見えなくなってしまふものだから。

愛しても、別にいいでしょう。でも、愛されるべきは、【涼宮ハルヒ】。その代わりでしかない私に、何者でもない私が、恋を望んで果たして良いの？

思い出したのは、知恵の味の味を存分に知っているだろう佐々木さん。私はついつい、自分を曝け出してでも彼女に縋ってしまったの。私は、私が本当にキョんくんの隣に居るべきだったか、知りたかった。

正直なところ、私は佐々木さんのことをちよつと苦手に思っていたわ。何やら初対面の時からキョんくんと二人の時間を作っていたこともあったし、ちよつとトラウマを刺激させられたこともあったか

ら。

でも、私と彼女は太陽と月の食い合わせ程ではないとは感じていたの。だから、敬遠することもなければ、向こうから連絡先を交換することを求められたら、それに応じましたわ。

そして、それは功を奏して、この日の会合に結びついてくれたのよね。今も、佐々木さんの口は滑らかに動き続けている。

私は、カランと鳴った氷が溶け落ちる音にはっとしながら、長々と佐々木さんの口からちよつと難し目に語られた男女のイチヤイチャ話を咀嚼したわ。

「……はあ。キヨンさんと佐々木さんってとっても仲が良かったのねえ」

そして、それを呑み込んでから、ちよつとお腹いっぱいになってしまったの。

いや、ねえ。私がおしその時二人の隣に居たとしたら、嫉妬どころかきやーきやー照れてしまうような話の連続。これで二人が付き合っていないかったというのは、嘘みたいな奇跡ね。

上手な調子から絵画のように伝わってきた国木田くん含めて三人での卒業式でのシーンの会話なんて、最早劇的だったわ。途中で関係性に階段法やら閾値の話を混ぜこぜにしたところで、私は騙されないわよ！

それにしても、佐々木さんは二人の関係を、探り合いの中見つけた最適解の親友って言ってたけれど、結局の所それって、進んでいないだけの恋人同士とも言えないかしら。私は思わずそのまま口にしたわ。

「ううん。でも聞くからには明らかに好き、同士よね……」

「好きといえば、とても好きだったわ。彼の代替なんてこれからずっと見つからないくらいには、親友だったかもしれない。でも、それが恋愛というものかどうか、というのであれば、私は、はつきりと親友まででしかなかったと、言わざるを得ないわ。実際私には彼の引いた線を踏み越えて近寄る気なんて、起きなかった。……それをデッドラインと空目して尻込みしてしまっていた私はさぞ、滑稽だったでしょ

うね」

私の目の前で、佐々木さんは溶け落ちそうな氷だらけのラッシーを揺らしたの。すると、クリーミーが冷水の中に紛れたわ。やがて、白は何処までも薄くなってしまった。

何となく、偏らなくなつて味が失せてしまったそれに、悲しみを覚えてしまうのは、おかしいことなのかしらね。そして、色を付けなかった彼女の心を思ってしまうのも。

佐々木さんは、きつと正直。けれども、どうしてだって、彼女は親友という言葉に拘つてしまつているようね。いや、それほどまでに彼女にとってキヨンくんは唯一無二ということなのだろうけれど……自分のものによつては思えないのかしら？

疑問を持つ私に、彼女は更に続けたわ。

「けれども、それって当たり前かもしれないわ。キヨンは、私に友人を求めた。あるがままの、私をただ受け容れてくれた。そんな、彼の寛容に居心地の良さを覚えてしまつてからは、もうそこから抜け出せなくなつてしまつたのよ」

「だから、その先を考えられなかった？」

「……男女間の何事も恋愛に逢着すると決めつけるのは、少し乱暴と思わなくもないけれど、種の目的が自己保存であるからにはそれにならうのが自然ではあるかもしれないわね。でも、私にとって彼と私の関係は、親友が最高の関係性の先、終着点だったの。植物の自家不稔性に倣うまでもなく、私と彼は、近すぎて、ね」

思うところがあつたのか空を見、そして佐々木さんはくつくと笑わなかつた。声にもならない自嘲を一つ。そうして再び前を向いた彼女は以前と変わらず透明だった。

自家不稔性、ただひとつの花は、結びつかない。二人で一人のナルキツソス。アリスはいくら手を伸ばしても、鏡写しのジョンと結ばれない。

キヨンさんと佐々木さんは、似通いすぎて、それ以上近づくことが出来なかつた。そして、彼女は親友を良しとした。最高だと考えたのね。私にはそれが残念で、思わず口は動いていたの。

「佐々木さんとキョンくんは、お似合いすぎたのね」

「くつく。そう取って貰えると嬉しいな。……ああ、涼宮さんには笑われてしまうかもしれないけれどそういえば、もっと単純な理由も一つ、あったわ」

「それは、どういうもの？」

佐々木さんはくつくと続けてから、ずくずく痛む胸ばかり覚えていく私に、子供のようにならんだ。それは、ひどく優しげな稚気だった。「私は、ヒロインのライバル、みたいな単純な存在になりたくなかった。そもそも私は彼を巡って人と争う気持ちにならなかったのかもしれないわね。それくらいには、私はキョンが好きだった」

私が知らずに座っていた場所。彼の隣は彼女の聖域だった。争うことすら許せない、そんな安堵の居場所。恋より硬い、親友という結びつきを、佐々木さんはその胸に抱いてた。

思わず、私はそれを踏みしめて、踏みにじっていたのではないかと疑ったわ。けれども、佐々木さんは、直ぐ様言ってくれたの。

まるで、カミサマのような慈愛に満ちた笑顔を持ってして。

「私は、涼宮さん……【貴女】に期待しているのよ。どうか、キョンを存分に振り回してあげて」

それは私に出来なかつたことだから、と佐々木さんは言ってくれたわ。

「ううん……」

私は、ぱちりと、昨日にあったそんなこんなを思い出しながら、目を覚ました。

起き上がり、伸びをして、左手にベッドの柔らかみを覚えたの。こは、ひよつとしたら、保健室ではないかしら。そしてカーテンレールの手前の椅子に座す、朝倉さんを見つけたわ。

「おはよう」

そう。持ち運びに難儀しそうな大振りな裸のナイフをその手に遊ばせる、朝倉涼子を私は目にした。だから、私はぼやつとしたまま彼女に言ったの。

「りんごでも、剥いてくれるの?」

先まで私がりんごごと変わらなかつたというのに。そもそも、学校の保健室に、果物の持ち込みなんて、あり得るはずなのにね。でも、私は彼女が刃物を手にしていることに、危なさなんて、微塵も覚えなかつたの。

返答は、くすりと笑い声だけだつた。

第十四話 ナイフ÷友達

緑のカーテンがひらひらと。淡い光で包まれる、保健室。ヤスリで削った陽光を宙にばらまいたかのような柔らかさの中で、朝倉さんは大きく素直な形のナイフをひゅんと軽く投げ上げたわ。

危ない、と私が口にする前に、三回転くらいしてから戻ってきたその柄を掴んで、彼女は微笑んだの。驚いた私の顔が、刃に映り込んだわ。ほっとする私を、朝倉さんの瞳が更に写し込んでいく。

そういえば、随分寝ていたのでしょうけれど、今は何時かしら。時計が見当たらないの。いいえ、見て取れているはずの壁に掛かった時計がぐにやりと歪んでる。ちくたくは聞こえず、ただ風の動きばかりを感じるというのは実におかしいわね。

けれど、それを当たり前に行っているのでしょうか、とつとつと、朝倉さんは語りはじめたわ。

「……とある、女の子がいたの。その子は大きな者と繋がることで安堵していた。そして、同種と居を近くすることで確かに互いに信を感じてもらったわ」

朝倉さんの陶磁の紅を貼り付けたような口元が動いて語られるは、女の子の話。大きな者は大人、同種はお友達と取ってもいいのかしらね。なら短いその中で分かるのは、彼女が一人ぼっちではない、そこらに居るような境遇の子というだけ。

当たり前前に幸せで、それでも物足りない。そんな普通。そこにあるのは、見逃されてしまうような不満くらいだと思っわ。

けれども、私は気になった人くらいはなるだけ、幸せになって欲しかった。

「彼女は決して孤独ではなかった。それでもあの子……長門さんは、涼宮さんと出会って変わった」

目を瞑りながら、朝倉さんは言ったわ。私も、不可思議な空間にて無防備にも目を閉じ、彼女に倣って有希のことを思ったの。

有希は無垢だった。刺激を受けずにありすぎたの。だから、私は彼

女が変わってしまったっても仕方ないというくらいに無遠慮に触れたわ。

だって、彼女はきつと、熱に触れた覚えが殆どなかっただろうから。それを愛として、私は触れ合いの温もりを伝えようとしていたの。

「他にも理由はあるけれど、一番は——きつと、ずっと寂しかったのね」

大きく息を吐き捨てながら、朝倉さんは零した。力なく降りた彼女の手に未だある金属が、光を受けて瞬いたわ。私は、その決して向けられることのないだろう尖りを見て、美しさを感じるだけ。

そして、保健室の私が乗ったベッドと朝倉さんが座る丸椅子以外の全てが粒子と散って瓦礫に変じて、私の心はさざなみ立たなかった。だって、ここの変化はきつと彼女が望んだもの。そこに、危険はないでしょう。

でも、そんな決めつけてしまっている私の内心を知らない朝倉さんは、怪訝そうな表情をして、言ったわ。

「それにしても、分からないなあ。どうして、涼宮さんは、私が凶器を持っていて、さらには貴女には不明であるだろう周囲の変貌を受けて、それでも何の逃避行動を行わないの？」

「決まっているじゃない」

「何？ 涼宮さんが全てに立ち向かえる自力を確信しているから、というのが答えだったら私には嬉しいのだけれど」

少し身乗り出して、朝倉さんはにこりと笑う。近寄り、そのナイフの刃が克明に映って、けれども、身震い一つしない私は彼女の期待に応えられない。ただ、簡単な事実ばかりを答えるわ。

「そんなのじゃないわ。答えは単純。……だって、朝倉さん、笑ってるじゃないの。なら、こんなの大したことないんだわ」

「そう……なるほどね。呑み込んじゃってるのかな？」

「ええ。だって私は、友達を信じているもの」

そう、私は言い切る。私は、愛すべきものを、決して悪意に染まった何かとは見ないわ。

もし、それで抱きしめてみて、痛みが突き抜けて私の命に通してしまったところで、それは私が間違っていただけ。誰も、間違っていない

いの中から、それでいい。そんな風にすら思ってしまうわ。

強がり。でも、そんなこんなは、狂気じゃないのと思うの。ただ、普通にあるべきものを大事にしてみただけのこと。ちょっと、他の人より強めかもしれないけれど。でもそれだけでこんなにも安心出来るのだから、皆に推奨したいと思ってしまうくらい。

平然と私は、大つきなよく磨かれた金属つて、てかてかして綺麗ね、と言ったら、朝倉さんはそれこそ破顔したわ。

「ふふ。そう——だったら、私も貴女を信じて、こんな強がり止めてしましましょうか」

言い、穏やかに、少女は何時もの彼女に戻った。目を瞑って開けて、そうしたらもう、そこにナイフの姿はなかったわ。朝倉さんの手のひらにあるのは、一株の花ばかり。

そう、凶器は紫色のパンジー——いえ、花の多さを見るとビオラかしら——に変わったの。そして、それを再び彼女は風に吹かせて粒子と化さして散らばらせた。

私は、そんな有為転変の凄まじさに舌を卷いたわ。でも、こんなのが朝倉さんにとって当たり前の力の行使なのね。息一つきらせることなく、彼女は私と目を合わせて言うの。

「涼宮さん。貴女は思わずほっとするほどの暖かさを持っているわ。複雑さを、その熱で溶かしてしまうことだって、出来るでしょう。それを受けるのは嬉しい——でも、ちよつと困りもするのよね。私達は、仲良しこよしのお遊戯会が見たいわけじゃなくって」

私達、のところのことさら力を籠めて、朝倉さんは言ったわ。近く私の私を遠く見て、彼女はそして目を瞑り、どこか澁々と続きを口にす

る。

「世の中は、綺麗事ばかりで出来ている訳じゃないの。むしろ、大体は押し曲がった何か。私みたいに、上から押しつぶされて、やりたくないことをやることになるのだって往々にしてあるものよ」

「朝倉、さん？」

「私は別に、この世界を自由にしたいとか、全てを大いに変革したいとか、そんな大それた野望を持っていないの。でも、じれったいのは嫌

い」

急発進、そしてドカンとぶつかってしまったのは冗談じゃないけれど、それでも私は急進派に属しているものだから、その性質が出てしまうのかしらね。と朝倉さんは臍を下げた。

何となく、その笑みに寂しさを覚えた私は、彼女に向かって手を伸ばしたわ。けれども、それは途中で止まった。今再びの、問のために。

「結論が欲しいから、単刀直入に、訊くわ。ねえ——【貴女】は、神？」

青い、碧すぎる視線が私を捉えて離さない。真を見逃すものかと、この子は私を見定めようとしている。

そんな視線に数多の情報と三年の歳月で汚れてしまったばかりの無垢を覗いて、私は苦笑ったわ。そして、答える。

「違うわ」

そうだったら、とどんなに思うけれど。でも私はカミサマではないの。力を蔵しているばかりの、世界を愛したい、何者でもなし。

【涼宮ハルヒ】の犠牲の上に立つ、模造品。偽物が間違っているとは言わないけれど、けれども私は違うの。だから、間違いない皆は、幸せになって欲しいと思っちゃう。そんな、私は、神に似ても似つかない、代物なのよ。

むしろ、歪んだ悪魔と取られるのが普通じゃないかしら、と思いつながら、私は諦めの笑みを漏らすわ。でも、超常現象そのものな、彼女はそれを認めなかった。

「それはおかしいのよね。私の考えだと………あら、早いよね」

そして、せつかくの可愛い面を崩すように眉を寄せて、朝倉さんは、空を見たわ。すると、本来天井に塞がれて窺えないはずの蒼穹に罅が入っていく。

それは、まるで角にぶつかった卵の殻。情報によって改竄された空間は、どんどんと崩れていく。そして、崩落が起きたわ。

「……」

「どわっ」

天から降ってきたのは大小二つの人の形。小柄な片方はすとんと

つま先から降りて、大柄の方はどすんとお尻から私の隣に落ちてきたわ。

その二つが、見知った顔をしていたことに、私はびっくり。そう、彼らは有希とキョンくんだったのだから。

目を白黒させる私に、ずいと朝倉さんとの間に割って入った有希は言ったわ。

「――朝倉涼子。私は、涼宮ハルヒに敵意が向けられることを許容しない」

それ以上余計は述べずに、押し黙る。ただその沈黙は雄弁。有希からは、普段からは信じられないくらいに憤りを感じるわ。みしみしと、空間がひしゃげるような怒気を感じる。

いけないわね。私は何もされていらないのにこれでは下手をしたら、何だか宇宙人っぽかった朝倉さんと仲間割れが始まってしまえそう。

何らかの声をかけなければいけないのに、私の口から出たのは間抜けな疑問だった。

「どうして、キョンくんが？」

そう、この場には相応しくないだろう普通人代表がしれっと隣に紛れ込んでいる、という不思議。でも、それほど慌てふためいていないということは、何らかの確信を持って来てくれたということなのかしらね。

そうして、キョンくんはちよつと、有希と距離を取っているような節があつたのに、どうして一緒に？ その答えは、さらさらした地面を踏んで確かめながら零された彼の言葉でよく分かったわ。

「涼宮。お前が長門のことをあれだけ信じているのを直に見ていたんだ。なら、俺も少しはハルヒが危ないから一緒に来て、つていったあいつの真剣さを信じてみたいと気の迷いを覚えたりもするだろう。まあ……この状況は、理解不能の予想外だったわ」

痛めたのだろうお尻を抑えながら、キョンくんは言ったわ。ちよつと、三メートル近いダイブは痛かったのでしょうか。

でも続けて、それにしてもどうして気付いたら学校がこうも前衛的

に駆逐されていたのかはよく分からん、かもしたら不真面目な学生たちの願いが叶っちゃまったのか、とか溢す余裕はあるみたい。

しかし、心配ありがたいわ。何だか、皆の優しさに、私泣いてしまいうそう。そうして感慨に朝倉さんを庇うための言葉を遅らせていると、朝倉さんはおもむろに両手を上げたわ。

「降参するわ」

そうして彼女は何することなく白旗を揚げた。やがて、世界は美しく逆回転していく。先の普通へ。当たり前前の平和に事態は治まっていく。

さらさらと保健室に変貌していく空間に、ぽかんと口を開けながら嘆息するキョンくん。素直な疑問が開いた彼の口から流れ出ていったわ。

「はあ。とんでもない光景だな……もしかしたらこれ朝倉がやってるのかよ。にしても、朝倉。お前この奇々怪々な力で涼宮に手を出そうとしてたんじやないのか？俺らは慌てて止めに来たんだが……」

「私は長門さんと鏡合わせ。それでも繋がりがあるのは確か。だからね、私も涼宮さんを大切に思うのは当たり前なのよ。私はね、友達に向けてもう刃を向けられないわ」

「そう」

「くたびれもうけ、つてところか。やれやれ」

ちよつと恥ずかしい言葉を紡ぎながら、素直に微笑む朝倉さん。それを見て、有希とキョンくんはようやく事態を呑み込んでくれたみたい。

有希も何やら向けていたその手を降ろし、そうして鳥の鳴き声と学生轟き聞こえる保健室に安堵が出来るようになったわ。私はほつと一息。

「一件落着ね……おつと」

「涼宮、大丈夫か？」

「わわっ！ち、近い。近いわキョンくん！」

「お、おいまた倒れるなよっ」

そして、ふらつとしてしまった私を支えるその手に、胸元は大暴れ。

うう、恋する女の子は、気になる男の子を側に置いたらときめかずにはいられないものなのよ。思わず、てれてれしてしまうわ。

でも慌てて離れるキョンくんについつい、あつ、と零してしたら、どうしてだか今度はキョンくんが片手で顔を押しさえて拳動不審にどうしたのかしら？　そして、相変わらず片手はお尻を抑えているのね。よつぽどの痛みだったに違いなわ。

痛い痛い飛んでけー、って後でしてあげようかしら。

そんなこんなで私が彼のお尻ばかりを注視していた残念なその時、宇宙的な二人にこんな会話があつたみたい。

「それにしても、長門さんったら、スペアキーの方にはかり肩入れするのね。本来の彼は、どうしたの？」

「彼は、こんなガキが強く引つ搔いてみただけのこと、俺らの出る幕ではない、と言った」

「……ちよつとじれつたくない？」

「……【まだ】、私には分からない」

「そう……」

それを知らずに、私はのほほんと距離狭まった二人の方に向かい、そして、私はもがもがする羽目になったわ。あれ。ふかふかした柔らかさの中に埋もれる、これって前にもあつたわよね？

大いに朝倉さんの胸元に抱かれながら、私はちよつともがいたわ。

「むぐつ！　く、苦しいわ……」

「ならいいわ、私は私で、私の神様を守るように動くから！」

「……………そう」

う、何だか無表情している有希から不満が覗けるのは何故かしら。というか、抱擁きついわ。朝倉さんに神様って何よ、って言う余裕もないわね。

何だか目眩が……これは、酸欠？

「おい、朝倉。神様だか何だか知らんが、お前が守るべき涼宮、今度は青くなってるぞ？」

「あ、ごめんなさい、涼宮さん！」

そして、しめつけるを止めてくれた朝倉さんをぼうつと私は見る

わ。

おかしいわね。シリアスではなくコメディに殺されかけるなんて。困ったものね。しかし、それもこれも私らしいのかもしれなくって。「ふふ。別に良いのよ」

私は、笑って済ましたわ。

第十五話 願いはアンビバレンツ

私の中にある力って、きつとスパゲッティコードのように複雑に入り固まったものだと思うの。

きつかけがなかったので今までまるっと引き上げることがなかったのだけれど、さあやろうとしたら、世界が変わるくらいのレベルの力って中々引き出せない感じがするのよね。

大部分が未知、というより神経が通りきっていないような。何かしらね。規制でも入っているのかしら。それとも、私が「あたし」じゃないから全力は出せないってこと？

だとしたら、困ったわね。きつかけは不明だけれどそれが起こる時期。これから、私にとってきつとスペクタクルな大イベントが待っているというのに、主催できなくなっちゃうじゃない。思わず、私は唸ったわ。

「うーん、うーん」

「涼宮さん、どうかされました？」

「頭痛だったら、常備薬を持ってるぞ」

「キョン、お前も学校にまで持って来てるのか。……着々と涼宮のお守りらしくなって来たな」

「うーん、何よ私は頭の病原菌か何かなのー？」

谷口ったら何だか失礼なことを言ってるけれど、まあそれも仕方ないことかもね。両のこめかみを押さえつけながら、騒いでいるのって、どうにも頭痛じゃなければ子供か電波さんチックなもの。

それでも、私は頭の中で力の尻尾を追っかけるのを続けることで思わず力んで、言葉を漏らしてしまうのよ。右へ左へ暴れる力を御しきれず、掴まえきれずに。

「うむむ……」

「……悩みごとであるとするのなら、是非とも涼宮さんの助けになりたいところですが……いえ、これは僕だけではなく団員の総意ではないでしょうか。実際に皆さん、活動どころではなさそうで」

「それはもう、涼宮が悩んでる、っていうのは格別に気になるものだからな。……まあ次にどんな突飛が始まるのか不安っていう意味だが」「同感だ。……にしても、こんなに分かり易く困っている涼宮は長い付き合いになるが初めて見たな。なんだ、黙ってイベント企画でもしてるのか？ つれねえヤツだな」

「企画というか、創設というか何というか、って感じねー。まあイベントごとで悩んでいるのは間違いないかな。でも、今回ばかりは皆の手を借りるっていう訳にもいかないのよね」

皆が各々の楽しみを止めて私に注視してくれるのはありがたいわ。有希もちらりと私を見つめてる。だけれど、こればかりは他の人の手を借りるわけにもいかないし、そもそも邪な思いから出た身勝手に世界を振り回そうとしているばかりだし。

こんなのもし叶わなくなっただって仕方ないとも思うのよね。だからちよつと自罰的にも私はただうむむと繰り返し続けるの。

「えつと。それってどういうことですか？ ひよつとしたら、サブライズ企画だったりします？」

「そうね。私としては皆をうんとびっくりさせてあげたいところだけれど、中々難しそうかも。そもそも、私に出来るのかしらねー」

「涼宮さんに出来ないことならば、それは人の手に余るということでしょう。さしつかえなければ、挑まんとしている大業についての詳細を教えて頂けませんか？」

小さな手を可愛い顔に持って行って疑問に首捻るみくるちゃんに私が照れる間合いの外から赤面ものの笑顔で気遣ってくれる古泉くん。

大業、とまで言われちゃって、何だかどんどんと本当のことを言い難くなってきたわ。私としては、小さな憧れを形にしたいって言うそれだけなのにね。

答えを出来るだけ曖昧にしたいくて、私は偶々目に入った黒白にたとえを持って行ったわ。

「そうね……たとえるなら、キョンくんとか古泉くんがやっている、それね」

「オセロのことか？」

「うん。そうそう、今古泉くんの白が殆どひっくり返って行ったけれど、そんな感じのことをしたいのよね」

「どういうことだ？ つうかキョン、お前盤上遊戯異常に上手いよな。最初は全然だった古泉も段々上達してきてるってのによ」

「そうか？ 俺は別に定石すらうろ覚えでやってるんだが。……話が逸れたな。なんだ、涼宮。つまるところお前、現状をひっくり返すようなイベントでもしたいのか？」

「そんな感じー、うむむ……」

そう、私的には大イベント。予定されているのは、キョンくと二人きりでの閉鎖空間でのランデブー。それを、私は望んでいるの。

全てをひっくり返してでも、好意を持つ人と二人つきりになりたい。一瞬だけでも、とそれを望んでしまうのは恋する女の子のありきたりだと思うの。

目の中に耳の中にキョンくんの面影が入ってくる度、どうしてもどきどきしてしまうのよ。けれど、それにしてもは舞台のために新世界の種を用意してしまおうとするのは流石に大げさではあるのよね。

でもそれはこれからの「涼宮ハルヒ」の規定事項でもあるから……と巡らせてからふと考えついたので。

そういえば、皆は私みたいな力を持っていたら、どうするのかなって。力の果てに、どんな世界を求めるとかしら。

世界平和に、酒池肉林、整理整頓ですらありがちかもしれないわ。このちよつと変わったSOS団員達の願わくばの行き着く先って、果たしてどこなのでしょうね。

気になったので私は端的に、聞いてみたわ。

「ねえ、皆は新しい世界ってどんなのがいいと思う？」

「はっ」

そしたら、キョンくんを筆頭に、皆がびくり。一気に周囲に緊張が走ったような。あれ、私ったらそんなに変なこと言ったかしら？

首を傾げる私を驚かせるように、扉がぱたり。ぎよつと向いたその先から出てきたのは、最近殊更仲良くなった私の新たな女友達。彼

女、涼子は笑顔で言ったわ。

「私は、今と全く違う世界がいいかな。刺激的な方がきつと、楽しいわ」

「あら、涼子。聞いてたの？」

「扉が薄いというのもあるけれど、相変わらずの良く通る大きな声だったから。……ふふ。ハルヒが気になって見に来たら、正解ね。面白そうなこと、話しているじゃない」

笑顔を向け合う私と涼子。私の前で揺れる長髪が柔らかで綺麗。面倒だからと私は長かった髪は早々にばっさり切っちゃったけれど、人のおしゃれってやっぱり素敵ね。

ご覧の通りに私達たちの間でさん付けはもう卒業してるの。神様は嫌だからいつそ下の名前で呼んで貰って、それで正解だったわね。呼び捨てあいつていかにも友達らしくなっているような感じ。通じ合い方はそれぞれ。有希とは違う形で、これもいいわー。

とか考えていたら、いつの間にか寄って来ていた有希が本を私の机に置きながら、私に短く問ってきたの。目と目が通じて、その奥に不安を覚えた私は、笑顔で応えるわ。

「貴女は？」

「私？ ふふ。そうね……私はそもそも更新を望まないというか現状維持希望というか……多分、私の願いで新しい世界が出来たとしても、今と大して変わらないのが出来るんじゃないかしら」

雪の少女に、本音をぼたり。果たして、有希はどう感じてくれるのかしら。

そう、私は大体を余計と思わないタイプだけれど、死者の無念とかあるべき姿とか、そんなもしもはあまり大事にしたくないのよ。今の生きとし生けるものが大切。

皆の幸せは望むわ。でも、自力こそ美しいのに、私の力なんて余計極まりないもの、邪魔だとも思ってしまうの。そして、見て見ぬ振りをせずに歯を食いしばって世界の不幸を耐える、きつとそれが私という【涼宮ハルヒ】がやるべきこと。

……嫌ね、私利にそれを頼りにしようとしているというのに、アン

ビバレンツな。でも、私はそんな自虐を面に出すことだけは、なかったわ。

「それなら、いい」

「そう？　まあ今が一番大切よね！」

有希の小さな頷きに、私は朗らかに返したわ。彼女の不安が少しでも溶けたのなら、私はそれでいい。だって、私は大事にしているのは、目の前の貴女達なんだから。

そういうニユアンス、伝わったかしら。だったら、嬉しい。これでも私、そのまま伝えるのって恥ずかしく思っちゃうのよ？

「今が大切、か……」

そうしてただ眼前に向き合って。だから、どうしてだかキョンくんが、私の言葉を反芻させていることを、私は見逃したの。

「涼宮さん……」

そして、みくるちゃんの決意の瞳も、私は知らなかった。

——きやー！

灰色夢の中。私は青く輝く光の手の中で、ひゃっほーしていたわ。相変わらず、神人の手のひらに乗っかってぶるんぶるんされる疑似ジェットコースターには飽きないわね。

次は、その大きな手を使って滑り台を形作ってもらおうかしら。それともフルーフォールな高い高いも悪くはないわね。後、神人の身体を透かして空を見上げるだけでも楽しくあって良いものよ。

いや、三年一緒に遊んでも飽きが来ないっていうのも、これって奥が深いっていうのかしらね。自我薄弱なでっかい人型っていうのも、それはそれで望ましくはあるかもしれない、かな。

——まあ、それでも本当に神人を世界に出しちゃったら、一角のUMA扱いされちゃうのでしょーねー。

ちよつと、残念に思いながら、私は私が生み出した大きな子をなでなで。無反応が寂しいけれど、それでもこの神人には愛着があるのよね。はじめに生み出した時からちよつと不格好で、それがいいの。

解消のために創るちよつとかな閉鎖空間制作では足りないくらいに

現実が大変で、そのため夢の中でストレス発散に遊ぶ時には、毎回この子を生み出すくらいに、この手足不揃いの全身が好き。

——まあ、これも一人遊びなんだろうけれど、ままごと道具に拘ちやうのだって、結構アリよね。

そう、原始なレムだろうが、大脳皮質の活躍イマイチなノンレムだろうが、総じて意外と夢見てるらしいという小耳に挟んだお話なんか無視して、私は目を瞑ってからずっと私の中の夢空間で遊ぶことをよくしているの。

舞台は色々。今は、学校ね。現実の写し、形骸でしかない広い校庭と神人を使って、私は大いに楽しませて貰っているわ。

別段、この中では自由に振るえる神様パワーで現実離れた光景を楽しんでも良いかもしれない。でも、ちよつと今はそんな気分じゃないかな。

——うーん、どうやったら、この力もうちよつと自由に現実で使うことが出来るのかしら？

私は悩むわ。三年くらい前に起きたあの確信はどこへやら。私は使わなすぎでいつの間にか不自由になっていた力の扱いを、考えざるを得ないの。

それは圧でない、重みでもない情報ですら届かない、変幻自在。それに、知らずに進化していたりもするのよね。故に、以前掴んだと感じた私ですら、一定量を過ぎると勝手に出来なくなってた。

こんな内面世界的な夢の中でだったら、行使は簡単なのだけれど。そう思いながら、私は手の中で星の記憶を紡ぎ、彼方の明日を映したわ。

——ま、幾らそれが「涼宮ハルヒ」の日程だからって、私の欲望のために世界を危険に晒すのは良くないし、これで良かったのかもね？その全てを抱いて散らしてから、私はそう独りごちたの。あわやの世界改変、その中のロマンス。そんな、望ましい全てから私は手を引こうと、ここでようやく決意できたわ。

無理に舞台だけ整えても、心が追いつかなければ意味ないことだし。

——まあ、でも。

それでも、ただ願うだけ、はいいでしょう。叶うかどうかは分からないのが普通。ホントはそれがいいのよね。

この世界に星はないわ。作ってもいいけれど、それは止めておく。私は、私の中だけで決して表出さず、普通の人のように手を組み合わせて願ったの。

ああ、頭の未来予想図の中にあるみたいが好きなのと世界に二人つきり、ロマンチックにキ、クス……とかしてみたいわー。

——その願い、叶えてあげましょうか？

M a g i c m i r r o r o n t h e w a l l , w h o
i s t h e ■ ■ e s t o n e o f a l l ?

「ふわあ」

ん。何か起き抜けに、聞こえたような気がした。けれどもまあ夢の中の雑音なんて忘却で処理してしまうのが当然よね。目を開けて、首を左右に。そして何時ものふわりとどどめ色が混じったかのような自室と違うことによく気づいたわ。

見上げた先に、見慣れた校舎が。それに何となく位置エネルギーの高さも感じる。

あれ。ここ。夢の中でも居た北高じゃない？ 手の下の石畳、ひんやりね、とか現実逃避。そうして、私は隣に倒れ伏すキョンくんに気づいたの。あら、寝顔も格好良い。

やがて、気恥ずかしさから見上げ、灰色の空の下、私は見渡す限りひっそりとした一体全体を把握して、理解したわ。あらあらあら。夢にまで見た見たシチュエーション、じゃない。でも、これは夢じゃなくて。

「あ。私、やっちゃった？」

知らぬ合間、というか寝ている間に私は全力を賭してしまっていたみたい。まさか、気づけば世界を裏返してしまっていたとはね。ええ

……私、そんなに寝相悪かったかしら。

私が力の使い方を忘れたままに、知らずに進んだ世界改変。えつと、これ……果たしてどう始末を付けたら良いのかしら？

閉鎖空間と入れ替わった現実世界、それを再びひっくり返してもとに戻すだけの力って、私は何時になったら意識的に使えるようになるの？ うん、先からずっとやってみてるけれど、ここまで傾いだ世界を変えるパワー、全然出せないわね。

「……うわぁ」

口癖の前に、強い悲観が言葉になって。そして、ねぼすけさんな彼の規則的な寝息の隣で、にゃあ、と猫のような誰かさんの啼き声が孤独に響いたわ。

第十六話 「涼宮ハルヒ」をやらないといけない涼宮ハルヒさんは憂鬱

状況は絶望的。私はただ世界に二人ぼっちという浪漫を求めていただけだったのに。気づけば閉鎖空間を基にした新世界の種の中に私とキョンくん二人だけ。

更にはどうしようもないことに、それをやっただろう私が世界を元に戻すことなんて、出来そうになくて。

どうしてこうなっちゃったのよ、寝ぼけた私の馬鹿。とか私が自分を責めながらごろごろ地べたに寝転がりながらにやあにやあ言っていたら、お隣さんが身動き一つ。あらキョンくん起きちゃうの、とか思っていたらぽつりと彼は零したわ。

「うん……なんだ？ 猫が盛ってるのか？」
「にやつー！」

驚き、ついつい間近で私は啼き声を発してしまったの。未だ頑なに眠らんとしているキョンくんの眉がひそまったのがよくわかったわ。

で、でもそれも仕方がないじゃない。私は別に発情しているわけじゃないのに、盛ってるのか……いやでもしかし、最近どうにも恋に焦がれて滑りっぱなしだったような気もするし……わわ、私盛っちゃってた？

あわあわする私に、寝ぼけ眼のキョンくんはぼそぼそ呟き続けたわ。

「それにしても部屋が寒いな。妹よ、窓は開けっ放しにするなどあれほど……というか随分ベッドが硬くなったな。床に落ちたにしては気づかなかった……それに、凸凹が多すぎる……って、なんだこれ？」
「それは石畳よ」

「うお！ お前は……涼宮か？ ここは……どこだ……北高？ 俺には夢遊病の気はないと思っていたんだが。いやただ移動しただけにしては空が……」

地を見て私を見上げ、そうしてキョンくんはついに空を見てから慌て出したわ。

それもそうよね、曇りとも明らかに違った灰色のお空なんて、中々お目にかかれるものではないでしょうから。

空に星一つない閉じこもったような誰かさんの心象。果たして、これはホントに私の世界なのかしら。まあ、鏡でも使わないと自分の姿なんて端しか分からないもの。ましてや心なんてろくに映せないものなんて、もつと不明に決まっているわね。

でも私は問いたい。童話の王妃を気取って鏡よ鏡よ鏡さん——なんちやって。

とかふざけた想像をしていると、キョンくんは私の方を見つめてから、嘆息。そして続けたわ。

「はあ。人も音もない……どうなってるのか……まあ分からんが、とにかく涼宮、お前が居てくれて助かった」

「えっ?」

キョンくんの言に、私は首を傾げたの。助かった、とはどういうことかしら。先ほどからおろおろしてばかりいる私のどこに、力になる部分があるのでしょうかね。

でも私がなんとかしないと、と前日のように私の中に潜む力とつながるためにもせめて身体に力を籠めてみようかと思っていると、キョンくんはぼつりと言ったの。

「……涼宮が居るなら、俺が頑張らないといけないと思うからな」

「えっ、それって私が頼りにならないってこと?」

「ちよつと違うが……まあ、そんなところだ……よし」

ブレザー姿のキョンくんは、いつの間にやら北高のセーラー服を着込んでいた私の手を取って、何時になく精悍な表情を見せてから、破顔したわ。

そう、まるで幼子にするように、彼は恐れて力む私をあやしたのね。

「まずは、不思議探検だ」

何でもないことに挑むかのように、気軽にキョンくんはそう言ったの。

やる気になれば夢の中身を自由にできる私に、夢診断なんて役に立たないもの。だからユングもフロイトも、私には縁遠い存在でしかないわ。

でも、こうも思わないことはないのよね。そんな私がかもしたら、誰かの夢だとしたらって。この世が胡蝶の夢ではないと言い切れないのと同じように、私の方にこの世の主体があるかどうかなんて、眉唾。

むしろ、やろうと思えば自分の都合のいいことばかり起こせる私が誰かの書いた物語の登場人物だったら、とか。主人公的だな、とは【あたし】に対する私の昔の感想だったかしら。しかし、こんな残念なメアリー・スーなんて嫌ね。

「……はあ。現実逃避も程々にしないと、ね」

とかまあ色々巡らせたけれど、取り敢えずは、有事にそんなこんな考えてしまうような混乱から私は覚めようと思ったの。だから、まづ頬をつねってみたわ。そして、ズキンと走る確かな実感を私は改めて覚えたの。

ああ、私は今確かにここにいるのね、って。

「痛い……」

「何やってんだ、涼宮……」

そんな軽度の自傷を、見つめたのはキョンくんの鳶色の両目。きつと真っ赤になっているだろう頬を押さえながら見返す私を見るその色がどうも冷たいように見えるのは気のせいじゃないわよね。

今にもやれやれと言いたげな呆れを秘めながら、それ以上に掛ける言葉を見つけてくれたのでしよう、キョンくんは先ほど振りに見つけた私に疑問を投げかけてくれたわ。

「その様子じゃ望み薄だったか、涼宮。お前のなんとか出来るかも知れない心当たりとやらはどうだった？」

「駄目、だったわ」

「そうか……やれやれ」

今度こそ、肩をすくめてキョンくんはお決まりの言葉を口にした

わ。そうして、私も再び落ち込んだの。

向かいかけた部室の前でこうなったことに心当たりがあるって自分の力を引き出すために単独行動をはじめた結果、屋上でべんとらーとかしてみても駄目だと改めて知った事実が、私に重く押し掛かってならないわ。

「まあ、なんだ。涼宮。きつと、大丈夫だ」

「キョン、くん？」

しかし、どうにもキョンくんは絶望に目をつむることはなかったの。私達以外誰の姿もない灰色空間の中、彼だけは確かに糸口を握っているかのよう。私は、思わず、キョンくんに縋りたくなったわ。

でも、私が席を外した数分間に何があったというのかしら。もしキョンくんが有希や古泉君らの助けの手を見つけたり、優れた世界を戻す方法を見つけたりしていたのだとしたら、それは嬉しい。

でも、こんな斥力がありえない程高い閉鎖空間には、大した力を持ったものであってもそうそう入り込めるものではないでしょう。そしてキョンくんは普通の人だから、こんな事態を解決する方法なんて思いもつかないはず。

だから、私はキョンくんの瞳に宿る光の強さをただの空元気によるものだと取ったわ。しかし、それは間違ってた。鍵は、確かに私の胸元にかちやりと嵌る言葉をくれたの。

「俺は、こんなところで俺と【涼宮ハルヒ】の物語が終わるとは、思えないからな」

私は目を、大きく広げたわ。

校外に出ること出来ない奇妙に閉ざされた空間に入ってから後、私達は四方八方の鎖されている扉を確かめるために開け放ち、灯っていない電灯を見定めるために明るくしていったわ。

そのおかげで、風はないけれどこの場の風通しは少し良くなったでしょうし、辺りは少し克明になったかもしれない。

けれども、私は分からない。目の前のキョンくんが、次に何を口走るかかどうか、全く。何時か見た鳶色を深ませて、青年はぽつりと零

したの。

「涼宮……世界は滅びていいと思うか？」

そして、それは私にはとても答えやすい質問だった。だって、決まっているもの。素直にも、私はキョンくんに戻したわ。

「そんなこと、思うわけないわ。世界は綺麗で尊くって、私の迷いなんかよりずっとずっと価値あるものだもの」

「そうだよな。なら、これは何かの間違いなんだろうな」

そして、重く頷いたキョンくんは光の見えない空を仰いだの。そしてからすつと彼は目を細める。真剣がその整った顔に走って、私の胸は一つ鳴ったわ。

ああ、これほどまでに彼が真面目なのは初めて。事態がこうさせてしまったのか、否かは不明だけれど、それでもこれから本音がキョンくんから漏れるのは間違いないでしょう。

次の言葉は、きつと私にとって大事なものになる。私はそう察したの。ごくりと、つばを飲み込む音が私の耳朵に届いた。

「俺、実はポニーテール萌えなんだ」

「え？」

しかし、それは間違いだった。突然の性癖告白に、私の目は正しく点。ええと、キョンくん今たしかに萌えって言ったわよね？

まあ確かに、ポニーさんな子が垣間見せるうなじとかはとてもフェチをくすぐるものとは聞いているわね。ああ、キョンくんもその類なんだ。

でもそんなこと、今伝えられても、と混乱する私に頬を掻きながら、彼は続けたわ。

「涼宮、お前は普段髪をろくに纏めずぼさぼさにしているが、以前卓球部で見せてくれたポニーテールは、本当によく似合っていたぞ」

「あ、ええと、ありがと、う？」

何が何やら、話は続くわ。思い出した、そういえば私ったら本気出すときには髪を縛る癖があるのよね。とりあえず、ちよんまげみたいな小さなポニーテールだっただろうけれど、似合っていたとは嬉しいことね。

髪型とはいえ私にも得意があつたの、と喜びも束の間。爆弾発言は、更に続いたの。近寄り、私の両肩を掴んでから、キョンくんは確かに言った。

「俺は、涼宮……いや、ハルヒ。お前が好きだ」

痛いくらいに肩から伝わる思い、そして表情から伝わる本気、それに私はぱくぱくしたわ。

すらりとした体躯の上で俺を見上げる整った面に、大粒の瞳が瞬く。全く、これっぽっちも嫌みのない美人っていうのには三日どころか二月経とうが慣れるもんじゃないな。

思わず逸らそうとした目を、俺はぐっと堪えてハルヒを見返す。水晶の瞳がまた一段と潤んだことを俺は感じたよ。こんな可憐な乙女の中に、こうも世界を変えてしまう程の怪物が居るなんて、何とも眉睡な話だ。

やれやれあんたらはこんな美少女の間近の熱視線を無視し続けられるかい？ 俺にはとても無理だね。

だから、嫌でも言うんだ。少しでも距離を開けて貰おうとして、こうしてな。

「好き、だが……ハルヒ、俺と違ってお前は少し勘違いしているよな？」

「キョン、くん？」

勘違いが恋つてもので、それを利用するのが男だろう、と考えながらもしかし俺の口は勝手に動いて止まってくれない。困ったもんだね、まったく。

それこそ初恋ですら立ち消えさせてろくろく味わいもしなかったのに、したり顔で俺って奴は恋について語るのさ。

「あのな、ハルヒ。お前は、誰にだって恋していいんだぞ？」
「っ！」

途端に、ハルヒの顔色が変わったことが、俺にも分かった。そして、自分の考えが合っていたことも、俺は確信できた。まったくやれやれ、だ。

浮かれた少女に冷や水ぶちまけてしまえば、嫌われてしまうことだつて仕方ないことだろう。まあ、ハルヒがそんな奴ではないと知っているが、それでもこれで今までの恋愛ごっこは卒業だろうな、と悲しむ俺の内心の面倒は後々大変そうだが、仕方ない。

まあ、たとえ人それぞれに違うクオリアが存在しようと、盲目の少女に色んな綺麗なものを見て貰いたいと願うのも、惚れた弱みだろうからな。

「あのなあ。俺しか見えない、というか俺しか見ちゃいけない……みたいにならなくていいハルヒの姿なんて、正直見てらんなかったぞ？　なんだ。もっと天衣無縫にしているのが【涼宮ハルヒ】ってもんだろ？」

「……そう、かもね」

「だつたらいいんだ。なら、もうちよつと周りを見てみようぜ？　そうしてから、俺に答えを返してくれ」

どうしてだかは、俺にも分からん。けれども、ハルヒはずっと俺ばかり認めようとしていた。谷口は勿論古泉にも惹かれようとせず、諸々から目を逸らして一般人の俺だけを追い掛けていたのは、何となく不気味ですらあったな。

まあ最初はただ惚れられていたのかとうぬぼれていたが、それは違うことを俺は知っている。何しろ俺は、こいつが本心から目を輝かせるところを数多見てきたからな。

それと比べたら、俺に向けられる視線の淡いこと。まあ、それも仕方ないか。

ハルヒ。本当はお前つて、この広い世界に惚れたばかりの子供だろ？

何でか、俺には分かるんだよ。なら、先達として、少女が一つばかり気にしているのを注意してあげるのは、当然だ。

こんな世界の終わりなんて、どうだつていい。きつと、どうにでもなる。そして、俺のことだつて、見なくていいんだ。まずは何悩むこととなくただ一緒に、笑い合おうぜ。

「俺はハルヒ、お前が好きだ。心底お前に惚れ込んでる。だから頑

張らなくていいんだよ。そして、こんな捻くれた俺だって【涼宮ハルヒ】のことが好きなんだから、大丈夫だ。他の奴にだって怖がらずに当たってみろよ」

そもそも、土台俺がハルヒに惚れられているってのが無理あるんだっての。普通に憧れてたつていいことなんて一つもないぜ？

のぼせたハルヒが俺なんかに触れたら、やけどするどころかその平温ぶりの冷たさに我に返るのが普通だ。そして、今からその通りになつてしまえばいい。

何しろ俺には、友人の思い人を了承もなく奪つて悦に入るような悪趣味はなくなつてな。むしろ、あいつの良さをハルヒにもつと理解して欲しいっていう気持ちすらあるぞ。

もつとも、誰にだつてハルヒをやりたくはないがな。今だつて正直なところ、目の前の女の子を抱きしめたくなる気持ちを留めるのが、大変だ。

しかしそれでも、好きだから。俺はハルヒにはもつと自由であつて欲しいと思うのさ。俺が枷になるなんて、冗談じゃねえよ。

変わる世界より何よりも、大切なことを俺はこの女の子に伝えたいんだ。

「俺に対する答えは、そのずっと後でいいさ」

「で、でも……」

怖じ気づく、ハルヒ。目尻に貯まる、涙の綺羅びやかさを、俺は嫌う。今すぐに拭つてやりたいし、抱きとめてもあげたいさ。

だが更に、答えなんて待てるもんかと暴れる煩惱にだつて蓋をして、俺はにやりと笑つてみせる。少しでも、本音だと分かつて貰うために、大真面目にな。

「大丈夫だ。何せ——お前の世界は綺麗なんだろう？」

その中で今まで通り、誰よりも輝いてくれ。

そう、俺は、世界よりも涼宮ハルヒの幸せを心から望む。

「ふう」

さて、それにしても白雪姫とスリーピングビューティー。朝比奈さ

んと長門から貰った情報からすると世界を戻すには……いや、それはまだ早い。

近づくだけで倒れのような幼子にそんな真似をしたら、それこそ驚天動地が起こるだろう。いや、かもしたらそれで世界がひっくり返るっていうのが狙いか？

しかし、そんなことを一方的にしちまったら、当分俺はハルヒの顔をろくに見れなくなっちまうだろう。好きな子の大好きな表情を見れないのって拷問ってもんだ。

そう、俺が臆病風に吹かれていると。先から隣で真つ赤な顔を下げていた筈のハルヒがいつの間にか顔を上げていた。

どうしたのか、俺は聞こうとした。しかし、開きかけの口は、直様塞がれた。とんでもなく柔らかなものによって。

「ん」

「ぶあ」

思わず開いた両目は近寄るハルヒの顔を克明に移していた。おいおい作法もクソも合ったもんじゃねえな、こりゃあ。

あんまりに唐突な、そして予想に反して何も起きないキスのあっけなさに俺がぼうっとしていると、「涼宮ハルヒ」は言った。

「……ふうん。キスってそんなに気持ちのいいものじゃないのね。やっぱり、恋愛って、精神病」

くる、と俺から背を向けて、彼女はそんなことを口にする。俺が呆気に取られたまましていると、少女は尚続けていった。

「それにしても、この子には枷をつけてあげて正解ね。思ったよりドジ過ぎるもの。危うく、ハッピーエンドになってしまふところだったわ」

胸に手を当てながら、再びくると半周。それで一回転。そうして俺に顔を見せた彼女。その綺麗な面を目にして、思わず俺は零していた。

「……お前、誰だ？」

それは、愚問。しかし、問わずにはいられなかった。おいおう、だつておかしいだろう。ハルヒは、そんな憂鬱そうな瞳なんて、一度もし

ていなかった。

あんなに、何もかもが楽しそうにして、そんな輝くあいつの目が俺は好きだったというのに。

「何言っているの、キョン。【あたし】が、涼宮ハルヒじゃない」

そして、【涼宮ハルヒ】の顔にチエシヤ猫の笑みが認められた直ぐ後、世界は反転した。

独りの少女がいました。彼女はとても愛らしい、世界の中心に輝く女の子です。しかし、彼女は世界をつまらないものと考え過ごしました。そして、自分がそんなつまらないものの一員でしかないことに、たいそう失望していたのです。

少女が中学校に入学しても気持ちは持ち上げらずに鬱屈として過ごしていた、ある日。彼女は唐突に高熱に襲われることになりました。

熱い、くらくらする世界の中で、投げかけられる両親の声ばかりが頼りです。自分すらも確かではない中で、少女はお父さん、お母さんに心の底から感謝しました。

しかし、すっかり重くなってしまったまぶたの奥の暗闇で、死の淵は間近に見えてしまいます。

怖くて、しかし助けの手も見当たらず、だから怯えた少女は何もかもに助けを求め、ついには己の中にまで自分がこれからも生が続けられる証明を欲したのでした。

そして、彼女に潜む力は全てを教えてくださいました。そう、これから長々と続いていく【涼宮ハルヒ】、その概要を。

やがて、ああ、私は特別に過ぎてしまっていたのだと、それを見つめて、少女は絶望しました。

彼女は己の力に望めば何でも叶えられます。きっと世界の全てを救うことも、出来るのでしよう。それどころか、今の世界が嫌なら、新しい世界を創ることだって、簡単なことなのです。

けれども、少女は世界の大体を遠忌していても、今も必死に看病してくれる両親のことは大好きでした。それだけでなく、思えば食べ物

や可愛いものやら大事なものは沢山あって、そんな全てを変えてしまいたいとは思えないのです。

しかし、少女には、沢山の嫌いを我慢することなんて出来ません。うんざりするほど退屈で、争ってばかりの多くはどうしても苦手なのです。

なら、それ等全てをなくしてしまえばいい、そう考えられないのは彼女の知恵の深さに依っていました。

仕組みが同じであれば、一時消したところで、代替物でそこが埋まるばかりということは、少女にとつては自明の理です。むしろ下手になくしてしまえば最悪、そのために好きなものが歪んでしまうことすら考えられるのでした。そんなのは嫌なのです。

かといって、今より望ましい世界の仕組みなんて、少女に思いつくものはありませんでした。天国なんて、見たこともありません。とはいえ、嫌なものから目を瞑り続けるのも難しいのです。神に等しい力があるのですから。

あくまで少女は人間で、神様ではありません。彼女に悪なんて、とても認められはしないのでした。けれども、力だけでいえば、少女は殆ど神様と一緒です。そのアンバランスさが、少女を侵しました。

好き勝手したいのだけれど、そうは出来ない。なら、どうすればいいのか。今まで通りになんて出来やしないのに。でも、きつと今まで通りに全てから距離を取って過ごしていれば、世界は平和。

不可思議な自力も知らずに未知を追い求めるピエロをこれまで通り続けた方が全体の安定に繋がるのは彼女も理解していました。

でも、でも。そうして熱の最中に悩み続けた彼女は思います。――
――ああ、全てが面倒くさい、と。

目を瞑り、それをずっと続けたいと少女は考えました。それくらいに、辛い。自分のことですら抱えきれないのに、世界など。嫌だ嫌だ。でも、好きで。そして昂ぶった気持ちは次第に鬱ぐようになりました。

そう、つまるところ。【涼宮ハルヒ】をやらないといけない涼宮ハルヒさんは憂鬱になってしまったのです。

そして、彼女は――

「ん……」

私は、目尻に浮かんだ涙を拭った。だって、それはあまりに彼女が哀しかったから。果たして、私の手のひらの熱は届いたのかしら。少しでも彼女の心が温とくなれば良いのだけれど。

そう、私は今にも泣き出しそうな女の子を撫でてあげる夢を、見たの。小さな彼女は、とても、憂鬱そうだった。あんなの、きつと辛い。夢だけれど、私はあの子の幸せを願ってならないわ。

「……………ふう」

パステルカラーに雑多が入り混じった「涼宮ハルヒ」の部屋を私はしばし眺める。鏡の向こうの私は何でかぶすっ面。そして起き抜けない、私は独り零したわ。

「私は【涼宮ハルヒ】をやらなくても、良いのかな？」

その疑問に伝えてくれるだろう、キョンくんはここに居ない。ただ、私はどうしてだか唇に指を這わせて。

「温かい」

そこに、確かな熱を覚えたの。

番外話① 長門有希の願望

「座ってて」

勝手なんて知ったこっちゃない他人のテリトリーの中、俺はそいつの言葉におうだかああだかよく分からない蚊の鳴くような声を返した。

いや、腰の引けたそんなぎまで本当に返答になっていたかどうかは分からなかったが、この相手、長門有希には特に問題はないようだ。

すっかりへんてこな女相手に怖気づいている俺の消極的応諾をまるで知っていたかのよう去っていく長門という少女にはほとほと驚かされる。

「にしたって、三日も前から毎日七時に公園で待つてたとはな……」

俺は、焦りから返すべき本体を家に残して持ってきてしまった葉を手には遊ばせながら、そう呟く。いや、表に裏にしてみたところで、この葉に書かれていた文面——午後七時。光陽園駅前公園にて待つ——が変わってはくれないのだが。

三日前に借りた本に挟まっていたこれを今日の午後六時に発見したお陰で男子学生が夜を異性との待ち合わせのために自転車で駆けるなんて中々素敵な青春機会を得た俺だったが、しかし相手はこの長門有希である。

待ちぼうけを気にすることもなく、こいつは俺を自分の家である高級マンションに連れてきて、なんだ。何がしたいのか不安で、少し戦々恐々とせざるを得ないのは先日の経験のせいかねえ。

「どうぞ」

「ああ」

長門が盆の上に急須と一緒に持ってきた碗。その中には茶褐色の液体、まあ匂い的にほうじ茶なんだろう、それが湯気を立てて満ちていた。

渡された俺は、特に気にせず飲む。その間もこちらをじっと見つめる瞳の色は真っ黒だったが、しかしどこか不安の色も混じっているような気もした。

まあ、俺が察した不安はきつと正解なんだろう。変わってるハルヒの友達だからって、異性を家に上げてはい気にしません、なんてことはないだろ。こいつはあの、女とは違うことだし。

「っ」

思い出し、つい舌に感じる苦味すら覚えられないほどの、恐れを感じた。長門が自称宇宙人だということを思い返すに、谷口が友人だと紹介してきたあの女、周防九曜のことをつい想起してしまう。

こいつは異世界人みたいなもんだとしたり顔で語る谷口に、最初はハルヒに気に入られたいからって役者を立てるなよと呆れたものだが、その実どうしようもないくらいに周防九曜は本物だった。

いや、そもそもアレはなんだ。異世界人ってのは皆溶けられるのか、位置情報を無視して出現できるのか。こいつと鬼ごっこしてみりや分かる、と言われて鼻で笑ったらとんだホラーな経験を味わったもんだ。

まさか、宇宙人ってのはそういうのとは違うよな。思わず、俺は疑るような視線をハルヒの友である曰くいい子の長門有希に向けてしまふのだった。

奥の紅の色を映しているのか綺麗に桃色の薄い唇を動かして、長門は言う。

「話が、したい」

「ああ。学校では出来ない話って言うてたが、そりやなんだ？」

「涼宮ハルヒのこと」

「そうか……」

長門がハルヒのことを言い出すのを予想していなかった、なんてこととはない。なにせ、ハルヒを介しての関わりを抜きにすれば、こいつとはそれこそまともに会話をしたことなんてないのだ。

むしろ、ここで古泉あたりとの恋愛相談でもされた方が困るところである。だがまあ知らない仲でもないことだし、それにだってなんか適当な言葉を返したろうが、実際主題はハルヒに關してのことだ。

それには、俺も興味津々である。いや、別に俺もここでハルヒに対する悪口なんて出てきたら嫌だが、そうでないことは、長門の目を見

れば分かる。

何でもかんでも黒く塗りつぶせば隠せるってもんじゃない。眼鏡越しに見える長門の大粒の黒い目はほんの少しだが、なんとも不安そうだ。こりや、言いたくないことを話し出すな、と俺も身構えるのだった。

「涼宮ハルヒとわたしは、普通の人間じゃない」

ああ、そりやそうだろうな。そう返したくなる口を俺は無理して閉ざした。力込めすぎたせいで間抜けにひん曲がってやしないだろうな、俺の口。

実際のところ、ふらりと無表情で五組にやって来てはハルヒに存分に可愛がられてから帰っていく長門は、大分マスコットの。普通ではない大変な癒やし粹だろう。ハルヒについては、言わずもがな、だ。だが、そんな萌え属性的な話ではないというのは、長門の真剣さから理解できる。俺は黙って、続きを促した。

「この銀河を統括する情報統合思念体によって造られた、対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェース。それが、わたし」
「あー……すまん。情報……造られた、ってことは長門はつまりロボットってことか？　銀河とかいう言葉も出てるし、違っても宇宙人で合っついそうだが……」

「理解が早くて、助かる。そして、わたしは機能としては隷属装置よりも有機生命体に近い」

「つまり、俺や涼宮とおそろい、っていうことか？」

「そう。おそろい……」

おそろいところで頬をわずかに緩めた、長門。そこに俺は確かにこいつはロボットなんかではないなと感じ取れた。だがしかし、宇宙人かと言われれば、まだ納得は出来ないが。

まあ、普段ひとことふたことしか語らない長門の口からSF地味た言葉が次々溢れてきたのには、別段俺は驚かない。ハイペリオンだのなんだの枕にしたほうがちょうど良さそうな分厚いそれっぽい本をカバー無しで読んでいるのをよく見ていたしな。

しかし、俺もよくこんな戯言に近い言葉に乗り気になるようになれ

たもんだ。それほど、周防九曜は怖かったかねえ。いや、まあ確かにアレがあるならもっとロマンある存在の方が有っていいとは思っちゃまうが。

「信じて欲しい」

「ああ、まあ似たようなもんに会ったしな……信じてもかまわないぞ」「そう」

認められ、どことなく長門も嬉しそうにしている。だが、俺の場合ハルヒのような受容とは違う、破れかぶれな心地からの諦めでしかないのだが。

安心毛布、っていう言葉が世の中にはあるらしい。その言葉の意味のように、玩具や毛布を手放さない子供みたく何かに執着することで安心を覚えるっていうのは意外とよくあることだったりする。抛り所、っていうえば分かりやすいか。

で、そんな俺の安心毛布であるところの現実への信頼ってもんは、どっかへびらびら飛んでいっちゃまって見当もつかない。だからまあ、仕方なしによく知らんことだつて認めていく他にないのだ。またよく分からんものにビビらされるのも嫌だからな。

さて、俺が理解を示したからか或いは話すのが存外好きな性質なのか、長門の語る口は滑らかで中々止まらなかつた。

聞くに、長門の大本、いいや親みたいなものである情報統合思念体とやらは、行き詰まっていた自律進化の可能性とやらを、ハルヒという一介の女子高生が起こした無自覚な情報爆発に見出したというのだ。

そして、情報統合思念体は己と規格が違う人間とコンタクトを取るために造ったのが長門である、と。

そこまで聞いて、俺は一つ突っ込まざるを得なかつた。

「あー……どうして、そのコンタクト要因として造られたお前がそんな、口下手なんだ？」

「それは、現在わたしが涼宮ハルヒの隣にすることが、想定されていた本来の役割とかけ離れたものだから」

「ははあ、なるほど。想定外の喜びだったんだな？」

「そう、かもしれない」

正直、情報なんちやら体だの、インターフェイスがどんだけ人と異なるかなんて俺には理解できない。だが、まあ長門がハルヒに懐いていることが、本心のように安心した。

長門は無表情で誰が言い出したんだろうな。この顔見れば、長門がハルヒのことが好きなんて分かりすぎるくらいだ。

そして、安心したら軽くなるのが口つてものである。俺はつかねてから思っていたことを口走った。

「しかし、谷口経由の周防九曜もそうだが、長門もどうして俺に正体を明かさずんだ？」

「多分、あなた【も】涼宮ハルヒの鍵だから」

「鍵、ねえ……で、俺も、か……本命は谷口つてことか？」

「そう。あなたはスペアキーと考える部分もある。……けれど、わたしたちはあなた達が同列だと思っている。だから、危険から自衛してもらうためにあなたにも情報を開示した」

「なら、いいけどなあ……つて、危険があるのかよ」

俺は真正正銘、ただの人間だ。幼少の頃に漫画に影響されて目からビームを出そうと目をかつ開き続けて涙を代わりに大量に零した思いがあらくらいに、普通だった。

そんな、優れたところなんてほぼない俺が、どうして変なのに情報を寄せられるのかと思ったが、それは結局ハルヒに関わりがあるから、か。あいつに負けているのはしゃくだが、またその先達である谷口の方が優先されている、と。

しかし、危険がどうのこうの言われてしまえば、そんな順位なんてどうでもよくなる。いや、周防九曜と関わって分かったんだが、ああいうのと敵対したら、俺の命がいくらあっても足りない事態になると思うのだが。

どこぞの配管工でもないし、ひとつしかない命は大事にしたいところだ。

出来れば逃げ出したいな。そう、嫌そうな顔をした俺に。しかし、長門は今までになく真剣に問う。

「もし、命が危なくなつたとして、あなたは涼宮ハルヒから離れる？」
ああなるほど、それは無理だなど、俺は諸手を挙げて降参するの
だった。

「へえ。涼宮はそんなに強い力を秘めてるのか？」

「そう。きっと、涼宮ハルヒならば世界の改変すら行える」

「そりゃ、信じられないな……そのことに無自覚っていうのも含めて、
な」

最初は、茶なんて出して長話もないだろうに、と勝手に普段の長門
の口数の少なさから思っていたが、しかし実際話は中々尽きないもの
である。喉が渇くたびに俺は度々、ほうじ茶のおかわりをして、今や
お腹は一杯だ。

もし、これが周防九曜と出会う前の俺だったら、半分も話を聞かず
に席を立っただろうが、しかし八時を過ぎた今も俺は長門の家にて長
居している。

人は変わるもんだと自嘲しながら、俺はずすと茶を嚙下していく長
門の喉を見送る。彼女は、小さく言った。

「でも、その力でわたしは、変わった」

「長門が、変わった？」

「そう。彼女と出会うまで、私はただのありふれた端末に過ぎなかつ
た」

それこそ、寂しいという気持ちが分からないくらいに、発達の余地
がなかった。そう、長門は続ける。

そして、寂しかったことを理解し、胸が一杯になってしまったのだ
ろう彼女は悲しげに話すのだった。

「今の涼宮ハルヒは、わたしが理解不能の存在であることを望んでい
ない。現に、わたしの自我に何らかの力の操作によつて発達が促され
た形跡が見受けられている。その上で、わたしはしばしば目的の忘却
すらも起きていた」

目的。つまりは、ハルヒの観察か。それを忘れるくらいに楽しかつ
た。なるほど普通に考えればそれは幸せなことだろうが、長門という

インターフェイスには違ったのだろうか。

自責にボブカットの頭を下げて、彼女は碗の底を見つめる。

「有機生命体に寄っているわたしにレゾン・デートルの喪失は、恐るべきこと。そしてこのままわたしが彼女からのダウングレードの要求に応え続けることは得策ではないと、統合思念体は感じた。しかし、事態の進行は危急。故に、早急な対処が望まれた」

端末が人になる。それがダウングレードなのかは俺には分からん。だが、まあ急な成長に長門の父さんがびつくりしたのは違うのだらう。そのために、何かしたのか。ひよつとして。

「五組まで来て、宇宙人とか言い出したのは、そのためか？」

「そう。疾く涼宮ハルヒに宇宙人の長門有希を望ませる必要があった。ある程度の暴露は、必要悪」

「それで、刺激された涼宮が力を暴発させなくて良かったな」

「三年前と比べて、涼宮ハルヒは安堵している。それに、彼女は友情というものに特別な感情を抱いている。友人の言葉であつたら半信半疑で受け容れるものと、考えられた」

半信半疑、か。でも受け容れてくれるって予想されるあたりはハラらしいな。しかし、三年前のハルヒって俺がはじめて会った時からいだが、そんなに爆弾みたいな感じだっただろうか。普通に、今と変わらない猫少女だったか。

首をひねる俺に、長門は話を続けた。

「そのおかげである程度の安定化は成功した。しかし、それでも時間を空けるのは不確定要素を増させるばかりと判断。そのため、わたしの手で想定を繰り上げた」

「繰り上げる？」

「涼宮ハルヒが求めている常識外の存在の、詳細を伏せたままの提出。それによって、彼女が求める一団は完成した」

一団って、おいおい。てことはやっぱり朝比奈さんに古泉もマジものなのか。まあ、全員この本物の宇宙人らしい長門が集めたわけだし、薄々同じなのだろうなとは思っていたが。

しかし、古泉は超能力者と言われればそうかもなと思えてしまうく

らい怪しげだが、朝比奈さんはどうみたところで一般的なのだが。いや、未来人つてだけなら普通な方が当たり前か？

よく分らん。だが、もつとよく分からないのはそんな珍妙な存在を集めたがるハルヒの考えだ。楽しいからって、それだけで危険すらありえるのをあの意外と常識的な少女が集めるか？

本格的にあののほん顔の少女の気持ち不明になってきた頃、長門は結論づけるように言った。

「……………涼宮ハルヒの、自分を理解してくれるだろう同じ異常な存在に囲まれる、という本当の望みはこれで叶えられた筈」

「本当の、望み？」

どういうことだ。無意識でしか力を使っていないようなハルヒが、その実自分を異常だと思っているって。それはおかしい。

「そう。涼宮ハルヒはアンビバレンツを抱えている。私に異常を求め、そうあつて欲しくはないという思いもあつた。そして、つまりそう考えるということは——涼宮ハルヒには、最低でも自分が宇宙人のように異常であるという自己認識がある」

ああ、なるほど。痛みを理解出来るということは、その痛みを知っていると考えるところに落ちるところがある。

一人ぼっちの兎は寂しかった。それは、眼の前の透明少女に自分を反射してみた感想だったのだろう。

どこかおかしくも、普通にしたがっているのは、その証明なのか。異常を嫌がり、だからこそ他の異常を受け容れる。だが、それはつまり自覚がなければあり得ない。俺は、少し悩んで、しかし口にした。

「……………自分が神のような力を持っているという認識が、か？」

「そこまでは分からない。しかし恐らくは、これが最良だった」

最良。なるほど、確かにSOS団は中々に居心地の良い場所ではある。大分マトモじゃない面子なのかもしれないが、それでも普通にいい奴らである。

それが、ハルヒの望んだことであるならば、まあ俺を入れてくれたことに感謝の一つでもしたくもなる。

そして、もう一つ。隠れて頑張っていたらしいこの宇宙人に対して

も、一つからかいたくなくなった。なにせ、あの日の長門の表情は、俺からしたら明らかに。

「長門。お前が、涼宮に注目して貰いたかった、つてもものもあるんじゃないのか？」

そう、親に褒めてもらいたがる子供のようだったから。そんな俺の言に。

「……それもきつと、ある」

まるで誰かさんの何時ものように、長門有希という一人の少女は俺の前で笑みを綻ばせるのだった。

番外話② 古泉一樹の望月

正直に言おう。俺は超能力者というものにずっと、憧れていた。

いや、だってそれはそうだろう？ 背を比べ合うことだって楽しみだった子供の頃も、俺にもあるんだ。そうするとちよつと足が速いだけで幼心には凄く感じたつてのに、そんな通常能力を超えてる力なんてものはとんでもなく魅力的に映るに違いなかった。

それになにせ、俺の好きな漫画にもアニメにも大概は超能力的な何かを用いる少年少女ばかりが活躍しているんだ。ガキの時はそいつらの真似して変な印を結んでみたり、傘を使ってポーズ決めてみたり、今思えば小っ恥ずかしいことすらしていたな。

だがまあ、どこ触ればいいのかも分からんくらいに小さな妹が生まれて、それに色々構って行く内になんてか気づいちまったんだ。ああ、俺にはああはなれないな、と。

別に、比べ合いに飽きたつて訳じゃない。ためしに色々な小説を漁つてみたが、当たりはジブナイルに多かつたし、何だかんだヒーローが勝つのは爽快だと思う。

だからただ、俺がそれよりも大切なものに気づいちまったつて、それだけなんだ。まあ喧嘩とか、妹に見せられるわけがない。それに、たとえば力を得るためになにかを犠牲にするなんてテンプレをしてみる、両親も泣く。

ま、そんなだけの力なんていらないわな。それに、俺が俺のために戦う、つてのはまあキヤラ的にも違うとも思う。フォロワー役とかも面白いかもしれないと妄想したこともあったが、結局それくらいでしかない。

だから超能力云々にはガキの夢だとあかんべえしてそっぽを向いて現実に生きる俺である。

だがしかし、中学の頃くらいまではあったらいいな、くらいに本当のところは思っていた。

それを思えばまあ、手から火を出すでもテレポーションでも見せられたら、流石に今の俺も目を輝かせるに違いない。何しろ今回は対

話だけで終わった長門と朝比奈さん【大】のときとは違って証拠を見せられるというのだ。

先日にも毛量オーダーミスしていきそうな人外少女と脳みそ設計ミスしてしそうな谷口との手によって味わった恐怖体験よりは、よっぽど楽しいだろう。

ヤロウの前で目を輝かせるのも何だが、きつと俺はこの笑顔をベースにして生まれてきたんじゃないかって伊達男の前で初めて嬉しそうにしてるんじゃないだろうか。

俺は、タクシーという狭く苦しいの中にエンドレスで流される、古泉の般若心経地味な好む人間にはありがたいのだろう言葉の殆どを聞き流しながら、思わず呟いた。

「超能力、か……」

「おや、先程からどうも気が漫ろであるようにお見受けしましたが、実はこの日を楽しみにしていらっしゃったのでしょうか。それは、光栄ですね」

「いや、何も楽しみつけて訳じゃなかったが……まあ、お前と二人でするオセロよりは次の手が気になるには違いないか」

「素直じゃありませんね。ですが、それで丁度いいかもしれません」

「……どういふことだ？」

俺は、古泉の言に内心首を傾げる。期待感を隠すくらいでちょうどいい具合というのはどういうことだ。そりゃ、隠せる期待で助かったってことだろうか。

つまり、と思つた途端になんと古泉がこっちに寄ってきた。

ええい、顔を近づけるな鬱陶しい。俺がそんな言葉の前に嫌気を面に出したところ、この賢しい男は俺のプライベートスペースまで熟知していたのか思わず殴りたくなる距離の僅か手前で口を動かして。

「いえ、スペクタクル、と言うには足りないシヨールを、期待に胸膨らませる子供にお見せするのは流石に心苦しいものですからね」

運転手には決して届かないだろう音量にて、そんなことを口にしたのだった。

明らかに古泉の言うところの超能力の組織、機関の人間なのだろう。ロマンスグレーが眩しい運転手の咳払いにより、古泉は座席に深く座り直す。

そして、先の言葉と困惑を隠しきれない俺を無視して、整った面に意味深な笑みのまま会話を続けるのだった。

「さて、仕切り直しますが、あなたは人間原理という言葉をご存知ですか?」

「そんなのご存知では……いや、知っているな」

「おや? それは失礼ですが、意外ですね。僭越ながら、どんなところで見聞きしたのでしょうか」

「いや……それは確か、佐々木が先日涼宮と初めて会った時に会話の流れで口にしていたな。確か、妖怪と青空の意味は人間原理で説明したほうが面白みがあるのかなんとか」

「あの方が、ですか……しかしどうにもそんな結論に逢着した話の流れというのも気になる場所ですね」

「なんでもない、ただの会話だったがなあ……」

古泉が何故か佐々木、引いてはあいつとした会話内容に興味を示したが、そんなの普段の何時も……いいや、以前やっていた馬鹿話の延長でしかなかったが。

故に、枝葉末節なんて思い出せもしないし、結局あいつが言いたかったことなんて俺とハルヒの関係を囁し立てる意味でしかなかったのがまた忌々しくて、思い出したくもない。

だから知らんと言。それで何とも言えない表情をする古泉に、そういうばこいつに佐々木のことを話しただろうかと考え、まあどうでもいいかと思いつつ。この前佐々木が元気にしているところを見たばかりで、心配するのも疑うのも面倒だ。

知らぬ存ぜぬを貫く俺に、またにこりと何時もを取り戻してから、古泉は話を戻す。

「まあ、ご存知であるなら、話が早くて助かりますね。宇宙が観測によって存在するという意味合いの思索的な理論ですが……ふむ」

「なんだ」

「いえ、一つ意地の悪い質問を思いつきましたね。……あなたは、空ときいて夜空を想像しますか？ それとも昼空を？」
「空だ？」

そして、古泉が澄ました顔で投げつけたのは唐突な問いだ。空、か。いや多分先の青空からの連想なのだろうが、意地が悪いという一言がどうにも気味が悪いな。

まあ、素直に返すとしたら、これか。

「こんな暗くなってからする質問じゃないな。現実引つ張られたか知らんが、俺は普通にお月さんがまん丸展開した夜空を想像したぞ」「ふふ。そうですね。どちらでもない、それこそ黄昏時でもなければ見上げれば認められるその印象に引つ張られてしまうのは道理ですが……しかし月、ですか」

「なんか問題でもあるのか？ おいこりやあフロイトだかなんだかみたいにしるべきな方面にこじつけた診断だったりすんのか？」

「いえ、もつと簡単です。これは、ただの好みに関する質問なのです」「はあ？」

言い、古泉はこれから超能力を発するらしいのに、何とも気の抜けた表情を見せた。何を言ってるのか、と思いついて俺はついこんなことを返す。

「なんだ、恋愛診断だったりしたのか？」

「そのようなものです」

おもむろに俺に向けられる、細まった目。イケメンの意味深な言葉と微笑みに、うえ、と隠さず正直に反応する俺だった。

「はあ」

さてそんな気持ちの悪い診断を同性相手にぶち込んできた、何が謎なのか恐ろしくなってきた謎の転校生であるところの古泉一樹であるが、タクシーの中で更に続いたこいつの言。

仮説ですが、の前置きから続いたこいつの涼宮ハルヒ研究論、のよなものを俺は長々と聞かされた。ハルヒが自覚のない神だの、俺のせいでSOS団が出来て宇宙人未来人超能力者の三勢力の緊張状態

が生まれただの、何だの。

正直なところ眉唾で、真面目に聞くのも面倒なそれに対する感想、というか興味を惹かれる点は一つだけである。

俺は、したり顔の古泉に向けて言った。

「お前は涼宮が神だの願望を実現できるとか言うが……まあそんな戯言は横に置くとしよう。で、だ」

「ふむ。僕としてはそろそろ理解していただきたいですが、なんでしよう？」

「今、涼宮の精神が荒れている、っていうのはマジか？」

そう、そこが俺には気にかかるところである。俺の後ろの席でよく新作の観天望気をニコニコしながら諦んじてくれる、どれだけ能天気なのだろうハルヒが以前と比べて荒れている、と古泉は言ったのだ。

アレで腹に何か抱えているなんて、ちよつと信じられない話だ。まあ、中学以前がこれより更にぼやぼやしていたのであるならば、理解できないこともないが。

だが、そうだとしたら、今度は谷口の苦労が偲ばれることとなる。あんなに抜けてるやつが、更にふわふわしてたら、そりゃ子守もキツかっただろう。

俺が、そんな想像と今のハルヒの精神状態に関する一匙分の心配をしながら真面目な顔をしていると、古泉はこれまでになく笑みを深めて。

「なるほど、そこを気にされましたか。そうですね……では論より証拠、と行きましようか」

まるで指し示したかのように、止まる車。次いで雑踏の元に開かれたドアに、俺を招くのだった。

そして、それからは驚きの連続だった。

いや、これは異世界人ホラーショーに、宇宙人マジックショーの後でなかったとしたら、俺は口を開けたまましばらく動けなくなっていたかもしれない。

まあ、それくらいにはハルヒの不機嫌が創っているらしい閉鎖空

間、そしてその中で活躍している青いヒトガタの宇宙のような神人とやら、そしてそれと対決している光と化すことが可能な超能力者に度肝を抜かれていた。

そして、この閉鎖空間とやらは古泉曰く。

「これが、涼宮の倦み、か」

「その言い方は、あまり好きではありませんが……まあ、僕らは治療薬といったところですよ」

「……想像と違ったな」

閉鎖空間と聞いたが、ハルヒ関連と続けられたためもつと俺は、ぴかぴか頭悪そうなんなんか変な場所を想像していた。

だが現実には、灰色。そして暗い。まるでこんな空間があつたハルヒの心象とは思えない。全くこれっぽっちも似合わないもんだがなあと俺は思う。

そのまま黙って俺は、この半径一キロメートルらしい現実から離れた膜の中にて、緩慢な巨人と赤く戦う古泉の仲間を見つめる。

戦局は、明らかに優勢だ。どう考えても、あの神人の巨体ではちよこまか動き回る超能力者たちを捉えることなんて出来ず、またノロノロとした動きはそもそも彼らを敵としていない様子だ。

このままでも、機関の戦士達が勝つには違いない。しかし、と俺は思う。笑みも浮かべずに、隣で灰色を見上げる古泉に、俺は水を向けた。

「どうした古泉、お前は参戦しないのか？ 俺はまだお前の超能力って奴を全部見せてもらってはいないぞ？」

「僕に出来ることは、この空間を理解して入ること、そして彼らのように赤い光に成って戦うこと、それだけですよ。なら、あなたは殆ど全てを目撃したということになります」

ふむ。なるほどそれは確かにそうかもしれない。こうして黙っていても、超能力を見せるというこいつの約束は守られているのだから。

だが、何か変だと俺は思う。それは。何となく、よく見た漫画とこいつの性格を見るに、勝手に想像していた流れ。それを俺は言葉にす

る。

「心配にならないか？ 急に、あの神人とやらがパワーアップしたりする可能性とか……は、涼宮の性格上なきそうだが、そうでなくても、あの人は戦ってるんだろ？」

「まあ、そうですね」

「そして、知り合いなんだろう？」

「はい」

「なら、俺のことを気にせず、助けに行った方が良いんじゃないか？」
そう。俺は古泉一樹という奴が良いやつであることを、何だかんだ理解している。

この自分の面倒を嫌うことなんてなく、また普通に人を思いやることも出来る性質を思えば、俺が問うずつと前に、こいつも赤い光になって参戦して神人を射抜く仲間になっていても不思議じゃない。

そもそも、閉鎖空間ってのは放っておいたらヤバいらしいしな。だがしかし、こいつは平気な様子で俺の隣に並んでいる。

そのことがどうしても、気になった。

「はあ」

はじめて、そいつは俺を驚いたように見る。そして、「古泉一樹」は、一つため息を吐いた。

「ダメですね。あなた達といると、本音を口から出したくなる」

まあだから、今日この時この場所を選んだのですが、と微笑んで。

「これから続けるのは、仮説ではありませんからね？」

そう言い、この場に「俺以外の誰からも見えない聞こえない」ことを良いことに、はじめてこいつはそれらしく笑んだのだった。

「彼らは、安全ですよ」

遠く、戦う仲間を観ながら、古泉ははつきりとそう言った。俺がどうしてか問う前に、半ばまくしたてるように指を立てて説明は続く。

「実は神人の動作の程度、そして閉鎖空間の広がり方すらおおよそ限られていましてね。我々が簡単な計算で弾き出せるくらいには、パターン化されているのです」

パターン、よく似る言葉にアルゴリズムもあるか。それらは、規定のようなものであり、感情とは程遠いものである筈だ。

しかし、ハルヒの倦み、いいや憂みにはリズムのようなパターンがあるのだと古泉は語る。そして何を思ったのだろうか、これ以上ないくらい曇り空を見上げて、続けた。

「まるで、これ以上はやりすぎないと、線で決められているかのようにね」

それは理性だろうか、いやしかし。悩む俺に、古泉は問う。

「あなたは、感情の振れ幅を、それも自分から漏れ出す部分をきつかり同等にすることなんて、可能だと思いますか？」

「出来ないだろうな」

「その通りです。一流運動選手どころか感情のプロですら困難なことを、涼宮さんが知らずに行えているとは、考えにくいところがあります」

等分。心は二つに区切れるものではないだろう。いや、神様のような心なら、或いはどうなのだろうか。

だが、その神様は涼宮ハルヒだ。あの天真爛漫が、そんな計算が出来るとは確かに思えない。これには、問わずにはいられない。

「……どういふことだ？」

「簡単ですよ。僕個人の見解ですが、前提が間違っているのでしょう。彼女が抱えた怒りをいたずらに発散しているのではなく、同程度澱が溜まる度に余計な部分を切り離しているのだ、と考えると、腑に落ちる部分が多々あるのですよ」

なるほど、世界崩壊レベルに全部爆発させるんじゃないやなくて、苛立ちをダム放流みたいにならず流していくってわけか。理性的でないな。

しかし、それだとおかしいぞ。そんな繊細な感情コントロールなんて、手元を見もせずにあの雑な涼宮ハルヒが出来るとは思えない。

もしかしたら、意識しているのではないだろうか。何しろ、あいつは超能力者の存在をそしてそれが古泉であることを長門経由で知っている。もしそれを本気にしていたならば、感知していても不思議は

ないだろう。

「……ひよつとしたらあいつ、全部分かってやってるんじゃないか？ 意外と常識的な涼宮のことだ。迷惑の程度を弁えてお前らに配慮している、とか考えると俺には腑に落ちたりするぞ」

「それはあまり考えたくない、事態ですな……」

もし涼宮さんが全てを知っているとしたら、前提が全て覆ってしまいます、と古泉はようやく何時もの微笑みを見せた。

どすんと、遠く神人が膝をつく。戦いの終わりは、ほど近いのだろう。

「果たして閉鎖空間のルーチンはこの世界を愛する涼宮さんのやりすぎたくないという無意識から来ているのか……あなたのおっしやる通りに意識的なものによるのか。どちらにせよ、彼女は、酷く優しいのでしょう」

言い切り、古泉は空を見上げた。そこには果たして、何も無い。が、この灰色の空の向こうには確かに存在するのだ。

俺が選んだ満月が。

「それはそこにあればとても美しいと感じられるものですし、なににより目に優しくて幾らだっただけで見ていられる」

僕も、好きですよと古泉はこぼす。

「けれども、やはり、月は太陽とは違うのですよ」

それはそうだろう。そう思う俺を置いてきぼりにして、語りは続く。

「我々には見上げるべき太陽が、月に変わってしまったような、そんな不自然な感が拭えないのです」

それは驚天動地、どころじゃないなと俺も苦笑い。けれども、どうしてだか古泉は今回笑わなかった。笑えないようである。

「以上のことを含めて所感を持って結論付けるのならば。……恐らく、彼女にとって我々超能力者なんて、本当はこの世に必要ないのでしょうか」

ならば、我々を必要とした神とは誰なのでしょうかね、あの彼女はどこに行ったのでしょうか、と無音ではりんと割れた空のもと満月の陽

光を浴びながら、古泉は独り言のように呟くのだった。

第二章 退屈

第十七話 井戸端会議なシーソーゲーム

好きのサインというのは、色々あると思うわ。あ、この場合は異性に対する好きね。アイラブユーの伝え方ということ。

たとえばとある鳥さんとダンスを披露したり、また違った鳥さんなら羽根を大きく広げて美しさをアピールしたりするみたい。それにそもそも囁りで愛を唄うことは鳥さんたちの基本的なことみたいね。告白にも、様々な方法があるらしいわ。

まあ、なんだかちよつと羽根持った子達ばかり参考にし過ぎかもしれないけれど、そんなのあんまり地に足が着いていない状態なのは私も一緒なのだから、いいでしょう。

「あー……ハルヒ、お前髪型変えたんだな」

「そ、そうね。ちよつと夢の中で啓示があったのよ。今日はポニーテールが吉だって！」

「やれやれ。どこのテレビ番組の占いみたたく軽い啓示もあるんだな……まあ、似合っているから良いが」

「そ、そうかしら？」

で、私の好きのサインはというと、この髪型の変化というか、ちよんまげみたいの小っちゃなシングルテール。おまけに対象の前で紅潮までしちゃって、分かりやすいっいたらないわね。

誰にだって恋して良いのだと昨日のキョン君は言ってたけれど、私だって一夜のひと言で翻すような恋をしてきたつもりはないわ。ちよつと悩んだけれど、しっかりと髪は一つに結んだのよ。

キョンくんの前で、私は丸見えのうなじの涼しさを気にしながらひとつつ尾っぽを撫でたわ。

「しかし、夢か……良い夢、だったか？」

「そうね……まあ、終わりよければ全て良し、って感じだったわ！」

あの夜、キョンくんの言葉に考え込んだ後の自分がどうやったのか

は分からないけれど、全て終わって元通りの日常に戻って良かったと私は思うの。

もう、朝一番におはようお父さんお母さんってして、傾斜ごときで死にそうになってる谷口の背中に軽口叩いて、様子を見に行つた部屋前でみるちゃんに古泉くんとおしゃべり出来た。

その後、ホームルーム前をふらりとやってきた有希との触れ合いに使つた後の、この一時間目の休み時間を好きな人との会話に使える幸せなんてことさらたまらないわ。

ああ、世界を変えちゃわなくて良かった。人によつては退屈かもしれない日常に埋没しながら私は本当に、そう思うの。

もつとも、夢を見ていたという体で、昨日の主演私の全世界危機的状況を片付ける私は罪深いのもかもしれない。けれども、そのために沸き起こる罪悪感だつて大好きな平和が戻ってきた喜びにを負かすには至らないのよね。

だって、みんながみんな変わらずに一緒に居てくれるなんて、これ以上ないくらいに嬉しい。私は思わずにつこりとしてしまったわ。

でも、そんな私の前で、誰かから憂鬱でもうつされたかのように少し憂いを感じさせる表情をキョンくんはしたわ。なんだか陰を背負つた感じで格好良いわね、とか呑気に思っている私の前で、彼は呟いたの。

「終わり良ければ、か……」

「ん？ 何か気になることでもあつたの？」

「いや、な……未だに気にはなっているが……」

口ごもるキョンくんは、私は謎を感じるわ。気になること、何かしらね。でも、確かに昨日は中途半端だったかも。

私の記憶の中だと、そういえば予定とは違つて、そのキスとか無しで終わつちやつたのよね。

いや、勿論私はキスしてみたかつたけれど、したらしたで色々決定的過ぎちゃうかなとか、私と彼が付き合いだしたらSOS団どうしようとか思うし、残念だけどその前に事態が終息したみたいで良かったかもしれない。

雰囲気に流されちやうつていうのも何だか情けないしね。

それに、キヨンくんは言っていたわ、私の世界は綺麗だって。そして、私は真似してばかりで世界の殆どを目に入れていなかった。なら、もう一度手を広げるといいうのもいいでしょう。再び彼を見返した私の瞳に素晴らしい全てが輝くためにも。

ま、それに別に好きは接触ばかりで表す必要もないことだし、初心な私は今のところどきまぎしながらポニーテールを指でつんつんするだけなの。こっそり好きを示しながら、私はこれからを提案してみたわ。

「まあ、何にしても今日は折角髪をまとめたんだから、ちよつと活動的になつてもいいかもね。団活動で、皆で運動してみるとかどうかしら？」

「そうだな……そういうのも悪くはないが……ん？」

「よう」

「谷口か」

そんな彼と私の合間に、遠慮なくあいつがひよこり。相変わらず、どこか抜けたところのある三枚目な顔をにやけさせながら谷口が現れてキヨンくんの肩に手を乗つけたの。

仲のいい、二人。私はちよつと妬けちやうわ。同性がための遠慮なしっていうのも、楽しげでいいわよね。何となく倣いたくなった私は、眼の前の単純で痛みとか知らなそうな馬鹿げた男子の方に軽口をぶつけたわ。

「おはよ。あんたは相変わらず呑気そうね」

「はつ。そんな涼宮は今日はこんな晴天の中頭に避雷針たててんのか、相変わらず変わってんな」

「む、これはポニーテールよ！ いや、確かに少し纏めたところが高かった気もするけど、雷様の目に留まるほど尖らせてはいないわよ」
「俺様の目には留まったがな。全く、似合わないことこの上ない背伸びだぜ」

「……それで、この二限前の僅かな憩いの時に、何の用？」

そしたら三倍返しといった風に、やんなつちやうくらしいのムカつく

言葉が谷口から返ってきたの。それにしても似合ってる、と言われて調子に乗った後に似合わないって言うのはヒドいわ。

まあ、確かに私は背伸びどころか足りない合わない、そんな急ごしらえでしかないのだけれど。でも、それでも良いと思いたいのに。

やっぱり、谷口は谷口ね。デリカシーというものを知らない。私が胸の中でそう確信していると、問いの後に返ってきたものはもつとヒドいからかいの言葉だったわ。

「いやお前等のいちやいちや話を嫌々聞いていたら、中々面白くなってきたと思つてな。ちよつと口を挟みに来ただけだ」

「いちや!?!」

「やれやれ。俺は別にハルヒと夢の話をしていただけなんだが……つと」

「あー、それだよ」

キョンくんが言い訳した途端、呆れるような顔をして、谷口はキョンくんに真つ直ぐ指をさしたわ。

隣で、近く、まるで刺すように。ただ、その指摘はどこまでも的をいていた。谷口は、言つたわ。

「一夜にして呼び方が変わってたら、勘ぐってくれって言ってるみたいなもんだぜ?」

「……はあ。呼び方くらい俺の勝手だろ。好きにさせてくれ」

「なら、こつちも勝手に何かあったんだろうと想像させて貰おうか。……まあ、お前等のことだから、帰り道に涼宮が下の名前で呼んでくれとごねただけの可能性が高いだろうがな」

「……そんなようなもんよ」

「なら、いいがな……」

なにが、良いのよ。これっぽっちも私の言葉を信じてないというのは、嫌つてほど顔を合わせてきた私だからこそ理解できるわ。

だって。でも。私は疑問に思うわ。

どうして、こいつちよつと悲しそうなよ、つて。

分からない。よく知っている筈の彼の気持ちは今ひとつ理解できないわ。けれど、そんなの、涼宮ハルヒの当たり前。普通の人の気持ち

ちを理解しようとしなのが、この頃の「あたし」で。

でも、そのままでもいいのかしら。私は、私であっていいと聞いて、それでも私は私は。どうしたい？

ああ、こんな懊悩なんて、それこそ退屈。私は、取り敢えず何時もに戻って言葉を返したわ。

「で……なに。あんた、私達をからかいに来ただけなの？」

「いや、そりゃついでだ。ただ、もし運動するならいつそ何か目標になるものがあったてもいいかと思っただけ」

「ん、何これ……野球大会？」

第九回市内アマチュア野球大会参加募集のお知らせ。

そんな文句がでかどかどか書いてあるビラを、谷口は私達の前に出したの。

野球？　　そういえば私、さつき皆で運動したいとは言ったわね。でも、そんな言葉がこんなイベントに繋がるなんて、「私は知らない」。

だから、ちよつと怖くなって私は谷口を見返すの。そうしたら、なんでかこいつはそれこそ甲子園大会を夢見る球児たちの手本のような熱い瞳をして。

「おう。どうだ、SOS団でこの大会に出てみないか？」

そんな、【涼宮ハルヒ】が言うようなことをあたしの代わりに言ったわ。

正直なところ、私が行おうと思っただけなのは軽い運動というか、ぶつちやけ皆でラジオ体操レベルの交流だったのよね。

個人で身体を動かすのを近くでして、仲良くなるうというか、その程度。年寄りくさい、と呼ぶバカもいるかもしれないわね。

でも、おじいちゃんおばあちゃん達の親密っぷりをナメちゃいけないわ。彼女らは、ラジオ体操などで仲良くしてから行う井戸端会議とかいう諜報活動にて、まるっと世の中を見通しているの。

見ず知らずのお爺さんが訳知り顔で私の黒歴史を諷んじきた時には、赤を通り越して顔を青くした覚えがあるわ。困ったことに口が軽い祖父母を持つと、変わった孫は格好の話題の種になっちゃうのよ。

それを愛しているからだと撫でて誤魔化しにかかってくるのには困ったものね。まあ、にやあとシワシワの手に誤魔化されちゃう私のちよろさも困ったものかもしれないけれど。

しっかし、谷口の提案は私のゆるゆるな予定を越えた若さ溢れるバチバチのものだったわ。何よこの、折り目確り綺麗に取ってあったみたいなチラシは。おかげで、どうしたってこの野球大会って文字を見間違いようがないじゃない。

知らない仲ではないことだし、谷口の隠れた野球に対する情熱を叶えてあげてもいいかもしれないわ。ただ、それにしたって、どうしてSOS団で野球なのかしら。意外と顔広いんだから野球部員でも誘えば良かったのに。

なんとなく、予定外のことでも乗り気になれない迷う私。しかし、大きくはない部室、団長のためのど真ん中席で悩んでいたらどうしたんだろうと見られてしまうものだったわ。

最近団の男子達がハマっているらしいダイヤモンドゲームを中座して、古泉くんは私に話しかけたわ。

「野球、ですか」

「そう。大会に出たいってこのビラ谷口が渡してきたんだけど……皆は経験あつたりする？」

「えっと、わたしはやったことがないですう……」

「同じく」

私はまあ、部活巡りでやったことがあるけれど、当然のように団の他の女子は野球未経験だった。

まあ、みくるちゃんやんがやって来たひよつとしたら遠いかも知らない未来に野球が残っているかは分からないし、有希に至っては三歳児。白球と戯れる経験がなくて仕方ない。

まかり間違つて、ここで赤ヘル軍団がどうの、伝説となつた日本シリーズがどうの言い出してやきゆうのお姉ちゃんをやられたらたまらなかつたし、それでいいわ。

けれども、そんなことをどうしてか許せない小人物が一人。露骨に眉をひそめながら、谷口は言ったわ。

「野球、おもしろえのになあ……よりによってここに居る女子は、涼宮以外ろくにテレビで観たこともなさそうな面子つてのがな。……一度も泥に濡れない花つてのはどうかねえ」

「むっ、それは文化系女子を敵に回す言葉よ！ それに、綺麗な水にだけ咲く花だつてあるのよ、喻え下手ねえ……」

「そんな深い意味で言ったわけじゃないんだがな。……まあ、俺の求め過ぎか」

彼は何か、苛立たしげに言う。よく分からないけれど、今日のこいつは辛辣ね。ぼうつとしている有希はともかく、みくるちゃんなんて明らかに怯えちゃってるわ。

そういえば、造花とか綺麗だけれど泥とは無関係だったりするわね、とか考えながら、私は何時もと違う感じでどうかしちやつてる谷口を論ずの。

「……別にいいじゃない。知らないこと、やらないことの一つや二つあっても普通だし、それで人の魅力が減るわけでもないわ」

「そりゃその通りだが……ん？」

私のつまらない正論に、しかし谷口は納得いかなそう。どうしてこいつこんな急にやきゆうのお兄ちゃん振りを発揮しだしたのかしらね、と思っていたところ、ずいど前に静かに彼女は出てきた。

少女三年生。きつと殆どの自発行動がはじめてで、どうしていいかすら分からないだろう怖さもあるだろうそんな中。でも、有希は怖じけず確かに私にこう伝えたわ。

「やってみたい」

「有希……」

それは、大切な自発性。沈黙の金より輝く彼女の勇気。私の友達は、私の前で小さく大きな一歩を踏み出したわ。

驚く私に、今度は小さな未来の先輩が、続けて私に叫ぶように言う。「あ、あの！ わたしもやって、みたいです！ ちょっと怖いんですけどお、だつてきつと……」

みくるちゃんは、運動が苦手。そんなプロフィールなんて、とつくの昔に知っていた。そして、実際に胸元の大き過ぎる重りの迫力をみ

て、これは無理だろうと思っただわ。

でも、いくら苦手だつて、頑張りたいたいという意気には及ばないもの。意気地なしの私と違って、彼女は。

ほとんど何も知らされず、それでいて一人ぼっちの過去に、思いやりの笑顔を咲かしていた。

「涼宮さん達と一緒にするなら、とつても楽しいでしょうから」

ああ、私もみくるちゃんと一緒にならなにやっても楽しいでしょうね。そんな言葉は、どうしてでしょうね、詰まった胸では上手く返せなかった。

ただ、イケメン同士視線を交わし、キョンさんと古泉くんは私に代わるように口を開いてくれたわ。

「これは、多数決なんて無聊な習いで採るまでもなく、決まりですね。何より、SOS団総出で勝負するなんて、面白そうです」

「やれやれ。正直なところ、面倒だが……まあ、あれだ。こいつとやるダイヤモンドゲームの変わらない結果よりよっぽど、楽しめる可能性はあるだろ」

「おや？　結果はまだ出ていないはずですが？」

「はあ……これで、接待してないって言い張るんだから、よく分からんな」

距離がやたらと近い二人に、私は少し羨ましさを覚えながらも、彼らの言に感じ入らざるを得なかった。

赤色に攻め込まれきっている盤上に未だ希望を見出している古泉くんと違って、キョンくんは退屈を覚えているみたい。つまらないかもしれない、いつもの光景。でも、それだつてキラキラ輝く私の日常で。

「えっと……でも」

ああ、私はこれ以上素敵なものを求めてもいいのかしら。分からない。涼宮ハルヒをやってばかりいた私は、フリー演技の時間で戸惑うの。

「迷ってんのか？」

そこに、そんな何もかもを知っているかのように、谷口は無駄に優

しげに声をかけてきた。ああとか、うんとか、そんな言葉すら上手く出せずにぐうとくぐもった返答をする私に、あいつは続けたわ。

「簡単だ、やるかやんねえか、お前が選ばばいいだけだ」

そう。もう状況は整っている。流れとしては、殆ど野球大会に挑むことは決まってる。後は、私の応諾ばかり。

団長だから、決定権があつて然りよね。でも、それつてよく考えるとともに重いわ。皆を楽しませられなかったらどうしよう、怪我でもさせたら悲しいわ。そんなマイナスがぐるぐるぐるぐるぐる。

そうして気づいたの。私だつて、涼宮ハルヒ三年生でしかない、ただの子供でしかないんだつて。思わず泣き出しそうに成った私に。

「悩むなんて、らしくねえぞ?」

彼は、笑顔でそんな指針をくれたの。

ぐるぐるぐるぐる。一つ回つて、一点。ぐるぐるぐるぐる。でも、コールドまでそれは続かない。

シーソーゲーム。あなたはどっち?

第十八話 キュウリをピンどめ

あともう少しで6月。女子更衣室の窓から仰いでみれば、梅雨前のこの頃にしては少しばかり重たい曇り空が広がっていたわ。

今日は予報だと雨と聞いたのだけれど、なんとか曇天のまままで、むしろ気温は運動するのに丁度いいくらい。

だから、私達SOS団も野球大会のための練習に決まった次の日から取り組める。ラッキー、というどころか何だか都合が良すぎないかと、一抹の不安がよぎるわ。

もしかしたら私、自分の持ち前の力で天気塗り替えてやしないかしら。

ちよつと久しぶりに野球を、それもお友達の皆とするつてのは楽しみだったから、無意識的に雲に無理をさせちゃっているのかもしれない。

そうだとしたら、ここらの農家さん達にはごめんなさいしないといけないわね。

それこそ涼宮サークル、みたいな感じに北高周囲以外の雲は雨を降らせている、みたいなことが報道されちゃったりしたら確定じゃないかしら。もしお隣さんの作っているキュウリの出来に問題が出たたりしたら、申し訳ないわ。

「ま、最近力がどうも感じにくくなってきたし……うん、考え過ぎね」

でも、一昨日の新世界創造未遂騒動からどうにも私の一般化が進んできたような気がするのよ。力が感じにくくなったというか、気付けば私がおかしな力持ちってことすら忘れてしまうの。

すると、皆の中で私は私でいられてしまう。どこかにいるかもしれないあの子のために涼宮ハルヒをやるべきだっていうのに、これはダメね。

「私は余計な存在なのに」

そう、大事にすべきは吹けば飛ぶような私ではなく、涼宮ハルヒという大切な一人の少女の人生設計。

愛すべき世界の中心に、愛したいだけの私が何時までも居座ってい

るのは良くないわ。そう、思っているのだけれど。

「……私は私と言ってくれた……私を好きって言ってくれた」

ああ、これは忘れ物したという体で有希にみくるちゃんをグラウンドに先に向かわせて、一人戻って怖じに震える私のつまらない独り言。

私は私。それでしかなくそれでいいと思っていたのに。けれど、涼宮ハルヒのきぐるみの中の私だって、彼らに求められた。なら、私は。「懸命に、演じないとね」

大切にしてくれて、嬉しくない訳がないわ。そもそも、生きているだけでもとっても嬉しい、私なの。

けれど、だからこそいつ終わっても良いように、何時彼女が戻ってきてても良いように、私は世界を騙してしまっても望ましきレールの上を歩きたいのよ。

死にたくないわ。でも、もつと彼女を殺したくない。だから、私は私を殺しましょう。もう、誰にも気取られないように。

「私は、愛されるべき涼宮ハルヒじゃないんだから」

滑稽でもハリボテでも、私はあたしのために、私を否定するわ。誰も本気で、好きになっちゃダメ。

そう。涼宮ハルヒに、中の人なんていないのよ。

谷口の要請を受けて私が団長として参加許可を出した野球大会は、6月半ばというおおよそ2週間は後のことだったわ。

言い出しつぺが昨日の内に運営の人たちに参加表明してくれて無事に承認されたらしいけれど、しつかしよく考えるとこんなお天道様ぐずつき出す時期に運動大会開くのって結構な賭けよね。

当日が雨じゃないと良いんだけど。豪雨で大会中止、とかなったら困るわね。具体的には、今日これからしばらく行う予定の野球練習の甲斐がなくなっちゃうから。

「それにしても、ピッチャーマウンドって小高いわねー。なんか特別な感があるわ」

「……物理的な盛り上がりで盛り上がれるって安いな、涼宮」

「むっ、つべこべ言ってるよとあんたに球ぶつけるわよ！」

「おう、その意気でミットに投げ込んでくれよ」

ニヤニヤとしながら座り込んでキャッチャーミットを構える谷口に、私はむつとするわ。投球練習の相手とはいえ、受け取り手がこのへぼで本当に大丈夫かしら。

準備運動はしつかりしたし、意外にも谷口は中学時代硬式野球を齧っていたらしいからまあ、実のところ不安点は谷口の顔の締りのなさくらいなのかもね。

それにしても、まさかこうも決めた翌日直ぐに準備万端になるとは思わなかったわ。野球部が何故か使わない軟式ボールを大量に余らせていたことに感謝ね。

ちなみに、校庭の使用って誰に許可を取るべきか分からなかったから、私は朝一番に担任の岡部先生をお願いしてみたの。そしたら、昼休みにはオーケーをいただけで良かった。

それにしても、大きく両手で作った丸サインで元気に校舎の反対側ならいぞ、笑顔でと伝えてきた先生はどうにも熱血だったわ。

あれかしら。素人集団で野球大会に挑むというところが、若者らしいチャレンジ精神みたいに受け取られちゃったのかも。

それとも、岡部先生には運動こそが青春で奨励すべきものなのかもしれない。または、ハンドボール部への入部まで望んだ運動得意な私が野球とはいえ身体を動かす機会を得たのを喜んでくれているのかもね。

「黙ってどーした、涼宮？」

「なんでもないわー」

まあ、よく分からない先生の乗り気は、置いておくわ。それより何より、今私はピッチングに集中しないとね。

部活体験にて野球部で投げさせて貰ってからそんなに経ってないからすっぱ抜けはないと思うけど、もし間違ってワンバウンドさせでもしたらキャッチャー谷口が捌ききれるか不安なもの。

野球部からグローブとバットは借りることが出来たけれど、流石にファールカップの用意までは出来ていないから、低めの大事故には気

をつけてあげないと。

後はとりあえず、あの間抜け面にめがけて投げればいいだけ。私は自慢のちっちゃなポニーテールにジャージ姿を見せつけるように大きく振りかぶりながら、言ったわ。

「それじゃ、ストリート行くわよー!」

「おうっ……っつと、涼宮、ナイスコントロール。よっつと」

「次は……これいってみようかしら」

そこそこの音を立てて狂いなくキャッチャーミットへ投じられたボールは、谷口の返球によりまた私の手元に戻ってきた。

うん。言われたとおりにコントロールは今日も悪くなさそう。これならあいつのボールとボールがごっつんこな痛々しい事故はそうそう起きないでしょうね。

でも一応、次も高めを意識しながら。一つ呟いてから私は握りを変えて谷口に宣言する。

「それじゃカーブ、行くわよー!」

そう、直球の次は変化球。頷くのをみてから私は振りかぶるわ。そして、指先からの抜けを意識した私の渾身のカーブボールは。

「よっしや、って暴投……ぐおっ!」

「あつ、谷口、大丈夫?」

「おい谷口、立てるか?」

なんと大きく曲がったと思えば吸い込まれるように、ジャージ一枚の守りしかされていないキャッチャーの水月に直撃したの。

獣のうなり声のような痛苦の声を上げた谷口に、ネット裏で観ていたキョンくんも思わず声をかけたわ。男の子達の友情を感じる一場面だけれど、そんなことより本当に大丈夫かしら。

「……大丈夫だ……しっかし、プロテクター用意しとけばよかったぜ……軟球でもみぞおちに入ると痛えのな」

「ごめんね……」

「悪いのはへボした俺だって……んな顔すんなよ」

「……うん」

ごめんなさいは、苦手。そんな涼宮ハルヒのプロフィールすら忘れ

て、私は痛みを我慢して笑む彼に申し訳無さを覚えたわ。

そもそも、私が操る身体の性能の高さを忘れていた私がダメだから。

落ち込む私に、ため息一つ。呆れた顔で谷口は言ったわ。

「……つうか、カーブって言っても曲がりすぎだろ。低めに来たらワンバンしてくるような球なんて流石に捕れねえよ」

「ええっ！ 私の変化球、こんな感じのがまだ四つくらい残ってるわよ？」

谷口の無理に、私は慌てる。

いや、大会結構強い相手が出てくるとか聞いたから、ある程度以上全力でいかないと思っていたのに。

また私は直球勝負より球を多彩に散らすのが好きだから、この程度の変化で怖じられると困っちゃうわ。

そんな私の困惑を他所に、バックネットへ振り返った谷口は苦笑いをしてる古泉くん聞いたの。

「あー……古泉、さっきのレベルの変化球含めて更に緩急考えると俺には全部の軌道なんてとても読めそうにねえけどよ……お前なら全部捕れたりすんのか？」

「僕も野球にはそれなりの自負がありました……その程度で涼宮さんのボールを全ては受け止め切れそうにはありませんね。最大変化が大きすぎるためにそこからのブレ等を考慮すると、いくらか後逸してしまいそうです」

「えっー！」

「やれやれ、これは、ハルヒにはある程度手加減してもらおうしかないな」

キョンくんのやれやれのポーズが出て、私もがつくり。

こうして私は男子たちとの交渉の末、ストリートとチェンジアップの二球種に絞って投じることになったわ。

また、次に谷口、古泉くん、キョンくんの三人に投げてもらった結果、古泉くんを控え投手とすることで全会一致。

いや、古泉くんったら運動神経良いのね。谷口もまずまずだけ

ど、キョンくんは磨かれていない原石って感じ。地味にSOS団員はスペックが高いわ。

「お、おねがいますう」

そうして、野球経験者達のお話し合いが終わったら、次には手際の野球部一年生達に預けていたみくるちゃん和有希を回収したの。

結構丁寧な彼らにスイングやグラブのはめ方までを教えてもらったみくるちゃんは、意外にも教科書通りに短くバットを持って私の前で構えているわ。

眺めが上がっていて、やる気も満々。これは、期待ができそうね。バッティング練習なのが勿体ないくらい。バッチこーいとか言ってる野手陣も構え直しているし、なんとしても打ってもらわないとね。

でも、気にしいなところのある私は、投げる前にひと注意。テッドボールは私を気をつけなければいいから、みくるちゃんの側で一番に気をつけるべきことを言うわ。

「みくるちゃん。間違っても、スイングで軸を崩して転んじゃだめよ、危ないから」

「はい！ 野球部の人たちからは素振りの仕方から教えて貰いましたあ。多分、大丈夫です！」

「そ。じゃあ行くわよ！」

大丈夫。そう言われて信じないほど私は馬鹿じゃないわ。

だから、山なりに投じたボールが前に飛んでくることを願い、投げるなりグラブを構える。

果たして、みくるちゃんの生涯初打席の結果は。

「やあっ！」

カキ、コロン。ピッチャーゴロだったわ。

でも、スゴいわ。ちゃんと自分のところに来るまで球を待てたし、何より目を閉じていない。野球部で教わった時にティーバッティングまでさせてもらったそうだけど、いや、これは見事だわ。

私は手放しに褒めるわ。

「最初に前に飛ばすなんて、やるじゃない。センスあるわよ、みくるちゃん！」

「ふふっ、うれしいです！」

鼻高々、といった感じではなかったけれど私の賛辞に笑み綻ばせるみくるちゃん。流石に、ビシバシ投げてくるだろう大会では難しいかもしれないけれど、それでも私と一緒にの間は野球を楽しんでほしいわ。

そんな願いを込めて、十球ほど。空振り二つにファールが殆どだったけれど、後半に当てるバツテイングを覚えてきた感じだったからこれは期待しても良いかもしれないわ。

でも、彼女ばかりにかまけていても仕方ないの。私は大の友達である、親愛なるジョーカーに向けて声をかけるわ。

「じゃあ次は……有希ね」

そして、みくるちゃんが退いたバッターボックスに、有希はそろりと足を踏み入れる。いつも通りの眼鏡の奥に、変わらない深いものが見えたわ。

しかし、先のみくるちゃんたちがつてどうも覇気がないわね。元気がないのは、省エネな有希らしいけどどうにも何か迷っているかのような。

私は、投じる前に再度聞いてみるわ。

「いっ？」

返ってきたのは、頷き。応じて私は投球を始めるわ。

まずは小手調べとみくるちゃんに投げていたような山なりの球を一球。ど真ん中に吸い込まれたそれは、しかし谷口の手元までずっと無事だったわ。

そう、有希は目の前を過ぎた球を観察していたばかり。バットを振るどころかピクリともしなかった。

不安に思いながら、私は都度彼女に行くわよと言いながら、三度打球。変わらず中心に行ったそれらを、まるで無視するかのようには有希は動かなかった。

思わず、私は近寄って言葉をかけたの。

「んー？ 見送ってばかりいちやだめよ。有希、それでも三振になっちゃおうのよ？」

「どした、まだあいつの球はえーか？」

「……困った」

「え？」

困った。それはどういうことかしら。

球が速かった、というのはまあまずないわね。山なりでおおよそ四十キロくらいの球を打てない程、彼女の性能は低くないでしょう。

そして、私のコントロールは完璧。ピッチングマシンより打ちやすいなとキヨンくんに突っ込まれるくらいには、ストライクゾーンで勝負するのが得意ではあるのよ。

だったら、やっぱり困惑は心によるものかしら。不安になった私は、有希の整って歪まない顔を見つめる。ぽつりと、零すように彼女は言うわ。

「わたしは、貴女の球を打ちたくない」

ああ、それは思いやりの発芽。優しさは、恐れを生むもの。

触れ合い擦れ合い、関わりは傷を生むものであり、それをしてこなかった有希には加減というものがきつと分らないのね。

なら、私は胸を張るわ。私のストライクボールなんて大切にすることもじゃないわよ、って元気に叫ぶの。

「気にせずがーんと打ち返してきなさい！ 私は有希に気持ちよく打ち返して欲しくて投げてるのよ？」

「……それでいいのかが、わたしには分からない」

「それでいいのよ、それでー！」

打たれて、やられてしまっても、それで良いに決まってる。

そう、いくら傷がつこうとも私は笑えるから笑うでしょう。だって、友達との触れ合いがいくら深くなろうとも、楽しいに違いないものだから。

退屈なんて忘れるくらいに遠慮なく、ガツンと行って欲しい。それは心からの私の願い。

「有希に、私は勝てないかもしれないわ。でも、私はそう簡単に傷つきはしないのよ。いいえ、むしろ鼻高々ね。私の友達は私よりすごいんだって、自慢できちやうわー！」

勝つてもふんぞり返る権利を得るばかり。でも、負けて土を噛んでみたら、意外と奥深いものを知れるかもしれない。ああ、敗北って意外と上等だわ。

そして、それが友達との関わりの中で生じるものだとしたら、何よりよ。

上下関係を付けるばかりではない学生生活。何度も負けたって、それだって楽しいものじゃないかしら。

そして私は本心から、有希という少女の自慢をしたいから。

「そう」

ぎゅつとバットを握り直した有希の本気に、私は歓迎の笑みを向けたわ。

それからしばらく私がみくるちゃんのゴロ処理係と、有希の柵越えホームランを打たせるためのピッチングマシーンになったというのは、まあどうでもいい話よね。

打撃練習に、守備練習。座学を後回しにした、レクリエーション地味な野球との触れ合いは、野球部がこちらまでトンボをかけてくれると言ってくれたことにより終わったわ。

大体投げていた私だったけれど途中から古泉くんに任せて私も打ったり守ったり忙しかったわね。

ただ、おかげでジャージもだいぶ汚れちゃったし、汗も気になるわ。でも、とっても楽しい自由時間だったことには変わりないのよね。

「それじゃ、じゃあね、皆！」

「じゃあな」

「おう」

「さようならー」

「また明日、よろしくお願いします」

だからそんなこんなを終えた帰り道、皆で坂道を笑顔で下ったその先に、分かれ道が一つ。それは、真っ直ぐ行くか右に曲がってコンビニに行くか行かないかといった程度の選択肢を私に与えたわ。

コンビニは少し歩かないとダメだし、元気いっぱい私の私と違って、

皆はくたくた。そして私はちよつと小腹が空いてもいたのよね。

だから、悪いことかもしれないけれど、一人買い食いを遂行したかったのよ。

なので、ちよつと買いたい物があると濁してSOS団の皆と分かれたわ。

「ふふっ」

電灯に引き伸ばされて、揺れる自分の影の滑稽さに思わず私は笑う。一人の影は、すれ違う人影と重なり揺れて、また一人に。

すれ違うばかりの大勢の中でちっぽけな私。あたしの憂鬱と違い、それがどうしてか私には嬉しい。

世界は既知で溢れていて、夢も希望も全ては誰かのお下がりかもしれないわ。でも、それを愛と捉えたつて、いいでしょう。

これだけ人と人が近く、痛みも悲しみもありふれている。そんな、素晴らしいぬくもりに満ちた世界。そんな全てに対する感想は。

「あ」

眼前に一つの黒の凝りを発見したことによって、停止した。

それは、天から来た存在。周防九曜という名のピンどめ。

優しさ悲しさ、そんなすべてに無関係な一枚のレイヤーは私の前で揺れて、こう呟いたの。

「——わたしは失敗していた。それは——いい」

いいのかしら。そんな疑問がついて出そうになるところ、話しかける前に彼女は静かに続けた。

「——おかしい」

少女の形は首を振る。瞑った瞳はどこも見ずに、あるいはならば内を覗いているのかもしれないなかった。

やがて止まり、そうして再び私を見つめた彼女はどこまでも澄んだ暗黒で。

「——欠けていて、揃っている。まるで——」

発した言葉のすべてが、私に染み入るように響く。

そして。

「——ここは、ゆりかご」

あるいは墓場、と暗に彼女は言ったの。

上からすべてを串刺しに。それは真つ直ぐ正しいルート選択。
でも、そもそもの目測が間違っていたとしたら？

第十九話 メロンパンな代打

「うーん……」

今日は寝坊助したせいで校内に持ち込んだ弁当箱の四角形に米粒ひとつだつて詰め込めていなかった残念な日。

そのために残念ながら何時ものクラスメートの皆と仲良しお昼は諦めて、せっかくだからと購買で購入したパンを持ってここ文芸部兼SOS団部室へとやってきていたのよね。

それはひよつとしたら、有希がここでお昼をしているんじゃないかな、と予想してのこと。実は、前に六組の子には聞いていたのだけれど、どうも有希だったらお昼にはふらふら何処かへと消えちゃうみたいなのよね。

どこに行っているのかしら、ひよつとしたら馴染みのところでお昼ご飯を食べているのではと思つて親睦を深めるためにもこの機会に探しに歩いたの。

勿論、有希だつて情報が人型を取っているだけの子なのだから食事が必要不可欠とはいえない可能性だつてあるわ。

でも、どうせなら何か好きなものを摂つて、地球人類が嗜好している美味しいを感じていて欲しいと思うのは、仕方がないわよね。

だから、半ば祈るように部室で何かもぐもぐしていてね有希、と考えながらそろりと扉を開いたら、何時もの椅子にて小さくお口を開いてサンドイッチの三角を台形に変えている姿があつたの。

思わずホツとした私は、一緒してもいいかしらの返事を小さな頷きで理解して、もそもそと余りのメロンパン二つを麦茶で流し込んで、早食いしたのよね。

それでも、流石に最後の一切れをいただく途中だつた有希が食事を終えるまで、というのは無理だつたわ。

結果ごちそうさまを揃えられず遅れた私は、流れるように読書に入った彼女の後追いで本を広げたの。

有希に話しかけながらのちよつと漫ろな読書をしていた私はその結果、使われている文句ひとつに悩み出してしまい、今があるのよね。

「……酸っぱい、ねえ」

そう、たとえばレモンはとても酸っぱいし、梅干しも負けなくらい酸っぱいわ。

思わず顔をしかめてしまうくらいに、その刺激は慣れようとも強烈に私に感じさせてくるのよね。

ちなみに、酸味を覚える人の味覚は、腐敗を探知するための機能が元らしいわ。

確かに、酸っぱさも感じずにぱくぱく期限切れご飯を食べていたらお腹壊しかねないものね。

ベロの敏感さのおかげで、あ、これヤバいわと古いお菓子を味見の段階で食べるのを辞めたことは一度きりではないわ。もったいないお化けさんには悪いけれどこれまでよく傷んだ食べ物をごみ箱行きにしてきた私は感覚には何度も助けられた。

「でも、酸っぱいのも結構美味しいわよね」

そう、私が思わず口にした通り、酸いも甘いも過度でなければ結構美味だったりするのよね。怪我をしない程度の棘つて優しく結構刺激として心地良かったりするわ。そんな感じで、私はレモンも梅干しも、そこそこ美味しく食べちゃってた。

「うーん……」

だからこそ、よく分からないのよね、この酸っぱい葡萄っていう例え話。

内容としては、お腹を空かせた狐さんが、幾ら頑張っても手の届かない葡萄をどうせあんなの酸っぱくって不味いだろうからって見下げちやう、そんなもの。

意味は分かるわ。自己の諦めの正当化というか、そんな感じのありきたりを寓話として分かりやすく昇華した、そういうお話だものね。

でも、たわなに実った葡萄を見て、たとえそれに触れること叶わずとも、酸っぱくて不味いと思いたくなっちゃった気持ちだが、私には理解できないの。

だって、一度美味しそうとだ手を伸ばしたのでしようから、もしそれが多少酸っぱくたって取れたら狐さんだって笑顔になれた筈。

そもそも酸っぱいを不味く感じるかどうかなんて、それこそ八卦だわ。

それに、私は届かなくても手を伸ばしたことを悪かったとは思いたくないの。叶わなくても願った時間は決してただの無駄だった訳ではないと思いたいわ。

まあ、こんなのできれいな事というか、甘い夢かしらね。

徒労の経験欠かした、小利口なだけの子供の世界観。それが、大人が子供のために作ったお話に合致しないのは仕方ないかもしれない。

でもどうしてか不安になっちゃった私は、隣で分厚い本を読んでいる賢い有希に聞いてみるの。

「ねえ、有希。挑んでダメだった、ってのはそんなに悪いことなの？」

「……価値の置き方次第」

「んー。そうよね。結果と過程のどっちを重視するかでも意見って変っちゃやし、考え方次第かしら」

「そう」

そして、短く返ってきた答えに私は納得。

トライアンドエラーが人生を豊かにするとしても、蹴躓くことを止めて遊んだって良いというのは私だって知っていること。

頑張るってのも結構疲れるものだし、きつと何時までも月に手を伸ばし続ける子供を続けるというのはあまりに辛いことでしょう。

「でも、目指した星を自らけなすなんてこと、私はしたくないわね」

ただ、私見として他人の気持ちを想像しながらも私はそう結論づけしてしまうの。

たとえば、今いつの間に決まっていた団長席にて私が有希のものまねで半分くらいの厚みの推理小説の項を捲っているのも、先に楽しい展開を期待しているからに他ならない。

でも、お話の結末が悪くつて一体全体台無しな感を覚えてしまっても、私はその結論のためにかけた時間を無駄なものとは思いたくないの。

だって、私は涼宮ハルヒという夢を叶えるために頑張りが続ける偽物。どんどん不格好に予定から変化している今を内心恐れていて、そ

れでも愛に逸る心を抑えられない馬鹿なピエロ。

でもそんな私が望んでいるものはたとえ届かなかったとしても、絶対に間違えていないと、思う。

「私は、夢に近づくために溶け落ちたところで、蟬の羽根を後悔しないわ」

私の未来予定図の終わりには、憂鬱を越え、退屈をしのぎ切り溜息を呑み込んだ先で、あの子が皆の中で楽しそうに笑んでいた。

願望機地味た力を持った少女が多属性達と平々凡々とした幸せに埋没する。そんなつまらない結末だつて、あつたつていいでしょう？

「やっぱり偽物より、本物が一番よー！」

結局、本来のあたしがちよつと酸っぱかろうとも、刺激的なそれが正しいということね。

鏡の私より未来のあたしの笑顔を望む、これは果たして自愛なのかしら。でも仕方ないことね。それくらいに、私が垣間見た遠く未来の涼宮ハルヒの笑顔には価値がある。酸っぱくて不味いなんて、決して誰にも言わせないわ。

ああ笑顔というと、そういえば。昔大事にしていた笑顔の可愛い髪留め、どこにやってしまったかしら。

そんな風にして私が考えを他所にしていたからかもしれないわ。

「……あなたの心だつて、オリジナル」

有希の放った小さな言葉は揺れて、そうして私に届くことはなかったの。

「外野行つたわよー！」

「おいキョン、お前球そんなに用意してないのにでかいの打つなって！ 外野俺と朝比奈さんしかいねえんだから……せめてセンターに向けて打てよ」

「……もしハルヒの変化球を自在に散らせる技術があつたら、きつと俺は夢を持って白球と親しむ日々を送れてただろうな」

「だなあ。はー……仕方ねえ、後でよそに飛んだのまとめて拾ってくるわ」

「頼んだわよー!」

「お願いしますー」

結構、私は金属バットが響かせる高音が好き。

それは、ピッチャーとしては間違った趣味なのかもしれないけれど、それがこうして皆が打撃を楽しむ一助になっていると思うと、悪くはないかもしれないわ。

今は、本番には確り合わせてくるつき、と言ってどこぞへと消えた鶴屋さんを抜かしたSOS団ぶらす涼子に国木田君といった面々が守備位置についているの。

そう、ビラ一枚から始まった野球の練習も、そろそろ全体で練習を行うまでに相成ったわ。これまで野球部の三年生の人たちが暇している部員を派遣して教えてくれたから、グラブを逆さに嵌めているような子はもういないの。

むしろちよつと運動苦手なみくるちゃんですら、バットの素振りにゴロの処理までなら出来るようになっていたのだから、全体中々の仕上がりといつていいかもしれない。

「さて、次は古泉くん? 行くわよー!」

「ふむ……涼宮さんは存分に変化をかけながらもミットに狂いなく届けて下さるので、さほど打つに難しいことはありません、ねっ」

「涼子、ボール行つたわよー」

「ふふ……これくらいなら動かなくても大丈夫ね」

「それでもサードフライ、ですか……いや、流石は涼宮さん。ただ合わせるだけでは押し負けてしまいます」

「僕からしたら、あの落差のカーブに合わせて内野まですくい上げた君もとんでもないけれどね」

苦笑しながら、古泉くんを褒め称える国木田くんの気持ちも、私は分からないでもないかな。

文句をつけながらも何だかんだミートさせてくるキョンくんは、初球から変化させたのに微笑み崩さず確りと捉えてくる古泉くんは、初球だけやけに上手い谷口の三人はちよつと凄いもの。

それに、ホームラン製造マシーンで処理を都度行っていた谷口の嘆

願から打撃練習をしなくていいとされた有希も、守備ではあまり動かないけれどとんでもないわ。

そんな有希と実は宇宙人仲間だった準SOS団員の涼子も当然のように守備に打撃に八面六臂の活躍をしてくれるし、これはもう打順にも守備位置にも悩んじゃうレベル。

そして何故か私達にも秘密兵器な実力の鶴屋さんまで参加するんだっていうのだから、勝ちは今までは正直なところ狙っていないかったけれど、しかしこの粒ぞろいっぷりには流石に一回戦の先を見たくもなるわね。

これはひよつとしたら先発ピッチャーの私がどのくらい粘れるかが鍵かしらね。頑張らないと。

「それじゃ、次は谷口ね……あら？」

「お前……」

「あれ、彼女は光陽園学院の子かな？」

「……おいおい、ここに来るのかよ……周防」

「あら？」

そんな風にして、私がピッチャーマウンドで気持ちを揚げていたところ、そろりと端から歩んで来た人影があったわ。

いや、人の影にしては暗く重い存在感。ページに挟まれた葉のような唐突な物語への再登場を果たしたのは、周防九曜さんだった。

彼女は足音すら残さず、ただ整った土を歪めて証としながらざわめきが沈黙となるまでゆっくりと歩んで、即席バッターボックスにて待っていた谷口の元へと進んだわ。

やがて、既知の友達関係の筈の彼はちよつと険しい表情をしながら、彼女へ問ったの。

「周防、どうした？」

「——確認」

「おい、それ俺のバットだっていうか……お前」

しかし返答には二文字ばかりの不明が置かれて、自由にも周防さんは谷口が持っていたバットを奪って構え出したの。

持つ右手と左手の距離が随分と離れていて素振りには、スローリー。でも、金属の光沢持つそれを手にして、私に向かっているその意味は察せた。

案の定、邪魔そうな毛量を一顧もせず彼女は宣言したわ。

「代打——私」

それに私は、ただ頷きで返したの。

「古泉くん、一球お願い」

「はい」

キャッチャーは古泉くん。彼の構えたミットに投げ込むだけの慣れたことに、投球練習は本来要らない。

でも、私はきつと緊張していたのでしようね。私がどれくらいの速度の球を投げるのかという確認をしてもらうためにも一球を投じたわ。

「——」

「……注文通りの、ナイススローです」

「ありがとう」

「いえ」

ピッチャーの投球練習を横に、バッターたる周防さんは不動。

きつと天使枠的な彼女には準備運動すら要らないのでしよう。けれども、流石に先の強引さとかんな姿を見れば、彼女のおかしさはどうも皆に伝わっちゃうものね。

マウンドまで歩んできた宇宙人枠な涼子も、ちよつと表情が硬い。彼女はグラブで口元を隠しながら、言ったわ。

「ねえ、ハルヒ。ちよつとわたし、前進守備をしてもいい?」

「どうして?」

「そうね……単純に、あの子初心者丸出しだから。その方がゴロ捌きやすいし……後はもしかしたら、が怖いかな?」

「そう? まあ、構わないわよ」

もしかしたら。私はその意味すら分からないまま、取り敢えずは涼子の提案に了承。

さつきまでよりちよつと前めの位置へと移動していく彼女の立派なポニーテールにちよつと嫉妬しながら、私は思い出したように周防さんへと向かうの。

でも、無言で見返してくるのはやはり洞の黒。どうしたって、感情程度呑み込まれてしまうような大いなるものが彼女と繋がっているのが私には分かってしまう。

同型規格違いの、存在。私とすら違う、やはり彼女は特別ねと思いつながら、それでも私は構える彼女に打ってもらうために投げることを止められずに。

「行くわよー」

勿論、投じるのは緩めの真っ直ぐ。

小手調べというか、そもそもミートする気すら不明な彼女のための山なりの軌道は。

「——捉えた」

「え」

閃光のように真っ直ぐ私の元へと返ってきた。

ああ、これは速いわ。上げようとする手が、間に合わない。あまりのことにゾーン地味で意識ばかりが加速しだした私の、そんな中をすら高速で駆け抜けるこれの速さはそもそも人が太刀打ち出来るものではないわ。

直線により決められた点と点は、結びつきあう。それが、あまりに瞬時であるのは運命的なまでの関わりがあったから？

そう、私の顔に向けて真っ直ぐ、あり得ない速度のボールが飛んでくる。

「あ」

私は、あまりのことに意識すら白黒させながら走馬灯というのかしらね、あたしだった幼い頃から私の三年間の今までの記憶を一瞬で遡らせたわ。

そして急激な遡行はあつという間に現在を越えて、先へと進んで、そして。

『あたしは、わたあし』

あなたは、だあれ？

瞬き。その間に眼前を、埋め尽くしたのは一つのグローブ。

深い青色のそれを気に入れて使っているのは、この場で一人。涼子は、酷く焦げ臭い匂いをするそれから、真黒のボールを取り出して棄て、啞然とする私を他所にこう言ったの。

「ねえ、あなたが打った球……わたしの神様の頭に当たりそうだったのだけれど？」

そう。それは本当。きつと宇宙人的な力を使ってまでしてくれたのだろう、涼子が救ってくれなければあの恐ろしい球は頭部に命中。それこそきつと、私の頭はザクロのように破裂していたに違いないの。

私の始まり、それこそあの三年前の熱と頭痛の苦しさをついつい思い出してふらりとする私。周防さんは、じつとそんな哀れなものを見て、結論づけたわ。

「目標点——光輪——やはり試算と同じ——変わらない」

「おい、お前っ！」

怒ったのは、そうしてくれたのはキョンくんみたい。やっぱり、彼は空気を感じるのが敏なのね。

本心から、そうしてくれているのは分かる。でも、それだけでないのは私だって理解できるわ。それだけ、周防さんに向けた視線が強い子が二人。

彼女らが動く前に彼が動いてくれたのは、ありがたい。でも、掴みかからんばかりに詰め寄るのはいただけないわ。そう私が未だ震える唇を動かそうとしたら。

「すまなかつた」

その前に、潔く彼の頭が下がったの。顔が見えないから、そいつが本当はどう思っているかは知らない。

でも、苦笑とともに代打を許した彼が、彼女を本心から嫌っている訳がないというのは、私だって理解できていた。

優しいキヨンくんは、真摯に謝る谷口に大きく氣勢をそがれるわ。

「どうして、お前が……」

「いや、こんなでもこいつ、俺のダチだからな……おい、周防。お前もこうするんだ」

「わたしは——間違っていないかった——けれど」

「……そうだ、それでいい」

ああ、本来いと高いところにあるべき彼女の頭。けれども、それでも彼の指示であれば、そんなことなど嘘のよう。

天蓋の女の子は、一球にて腰を抜かした私なんかに向けて頭を下げて。

「——ごめんなさい」

確かに、そう言ってくれたの。

それでも彼女は酸っぱくない？

第二十話 ロージン十ハイエナ

白黒付けるっていう言葉を私は偶に聞いたりするわ。これって、物事の是非などを決めて決着をつけるっていう文句よね。

確かに、白黒で善悪真偽きっちり分けちやつた方が世の中分かりやすいのかもしれないわ。

二元論はとっても単純なもの。どちらにしようかな、な灰色の状態ってけっこう決まりが悪かったりするし、それもアリよ。

ただ、はつきりしないでもやもや白黒マールな状態だって、私としては決して無しとは言えないの。

パンダさんなんて二色の配置ばかりで可愛いを魅せちやつてくれるし、野球の試合にだって引き分けなんて結末があるわ。

物語に出てくるカンダタとかいう泥棒さんだって、結局は悪いのかもしれないけれどそれでも蜘蛛の命は思いやつたりしてた。

良い人だけれど悪いことをしちやつた、勝ったけれど実質負ける、殆ど悪いけれどもちよつと良い。

そんなことって、世の中にはありきたり。きつと、神様だってはつきりとはしていないのかもしれないわ。

まあそんなだからこそ、多くの人があえて白黒を付けたくなくなっちゃうのかもしれないけれど、私の本心としてはあまり拘り過ぎたくはないのよね。

天上天下、枝葉末節全てを大事に出来るとは言いい切れないけど、そうね。

「私は、誰かを嫌いって決めつけたくないのよ」

私という涼宮ハルヒの偽物には、そんな気持ちだけはあるの。

「キョンくん。試合ってまだー？」

「あー……今は八時だから、後一時間は辛抱してもらおうしかないな。やれやれ。妹よ、さっきまで軟球をお手玉にして遊んでたと思ったが、もう飽きたのか？」

「てへ。だって、直ぐ落ちちやうから」

「でもお、とつてもお上手でしたよー? キョンくんの妹ちゃんって器用なんですねえ」

「それに、随分と素直っさ! めがっさめんこくって良いけど、本当に君の妹かい? そこの子を攫って来たとかだったら、鶴屋ハリケーンが局所的に発生するによるよ?」

「俺にはいたずらにそこらの子供に出自を詐称させる趣味はありませんよ。ただ、遺憾ながら、こいつと俺は似ていないとよく言われますね。なあ?」

「わっ、キョンくん髪型崩れちゃうー」

「ったく、キョンめ自分の妹撫でて可愛がりながら似てる似てないだの何言ってるんだ……お前みたいなツンデレが倍になったら面倒どころの騒ぎじゃねえぞ?」

「ふふ。僕としてはあなた達は似合いの兄弟として微笑ましく見えませうけれどね。いや、本当に羨ましいくらいですよ」

「そうね! 私も妹ちゃんみたいなのが家に居たら良かったのにー!」

「そうだね! わたしもハルにやんがお姉ちゃんになってくれたら嬉しいなー!」

「……おやおや」

「古泉は子供の戯言を真に受けるんじゃない。そして谷口……そんな飢えに狂ったハイエナのような目で俺を睨むな」

「けっ」

「? どうしたのよ皆……あら、そろそろ対戦相手のくじ引きの時間ね! 私代表としてちよつと行ってくるわ!」

「はうう……」

「……ユニーク」

待ちに待った日曜日。お母さんお手製の、なんだかジャリジャリするおかか等がまぶされた歪なおにぎり四つが私の胃ですっかり熟れたそんな頃合い。

私達『チームSOS団』はグラウンドで早々と全体練習を始めているライバル達を尻目に、外の芝の上にレジャーシートを敷いて荷物を

広げていたわ。

そして、その薄いつるつるの上にて応援、いや彼女の言った通りだと遊びに付いてきたらしいキョンくんの妹ちゃんを中心に私達はしばらく盛り上がっていたの。

それにしても、まるきり三年前に公園で出会った頃からサイドテールの長さしか変わってなかったから、再び顔を合わせた私はびっくりしたもののよ。

でも、妹ちゃんはニコニコしてハルにやん久しぶりーって言ってくれたの。これには私も同じ笑顔になるしかなかったわ。

団長が骨抜きになってしまえば、団員達の攻略なんて楽なもの。皆彼女を歓迎して練習そっちのけに構ったわ。

ここでも、鶴屋さんの傑出ぶりには驚かされたわね。毎日何を食べていたら、即席でグローブにて作り上げたワンちゃんープードルだったわ——にて幼子を楽しませられるようになるのかしら。これには国木田くんも目を丸くしてたわ。

ただ流石に遊びたいざかりの子供——そういえば妹ちゃんって幾つくらいかしらね——を退屈させないでいるのは中々難しいものね。

ボール三つで上手にお手玉をしていたと思ったら、次に試合はまだかという乞いの言葉。間違っても恋の言葉じゃなくて助かったけれど、それでも私も自らの妹みたいにすら思えてきた妹ちゃんを退屈させるのは心苦しい。

だから、なんだか妹ちゃんの発言にざわざわしだした周囲を放って私は運営の人たちのところへ向かったの。

「……………」

もう準備万端にユニフォームを着込んだ大人達の間には学校指定ジャージで割り込むのは、流石の私でも少し気が引けたわ。

そもそも野球なんて、覚え込んだ涼宮ハルヒの予定表には見当たらなかったし、どうすればいいのか分かりもしない。せめて「あたし」っぽくと、胸を張って一番にくじを引いたわ。

ただ、思ったより固く折り込まれたそれを開くのになんかごついちゃった私は、キャプテンだろう大柄の男性達が次々に自分たちが引

いたローマ字を黒板横に立っている人に告げていく中遅れを取ってしまったの。

慌てながらも、破ることさえなく綺麗にくじを開いた私。折り目だらけのその真ん中に小さくあったのはAの文字。

「えっと、チームSOS団はAね！　それで、相手は……」

大きく先頭のアルファベットを告げた私に、何故かどよめく周囲。その意味が分からないまま、私は第一グラウンドに指定されているようだったAことチームSOS団の対になるB、すなわち対戦相手の名前を見たわ。

「上ヶ原パイレーツ？　……なるほどね」

そうしてようやく私は野球のお兄ちゃんたちが騒いでいた意味を知ったの。

それは、どう見たところで練度足りてなさそうで九人ぴたりな人数の男女混合チームが、こここのところ大会三連覇中の大学野球サークルと当たってしまったことの哀れさから来たもの。

ああ、なるほどさつきから私の緊張なんて周囲の大人には筒抜けで、涼宮ハルヒの物真似だって虚勢としか受け取ってもらえていなかった。

これがやることなすこと自信満々な彼女だったら、決してナメられずにむしろその刺々しきで苛立たせてすらいたかもしれない。

でも、【私】だから心配されて、哀れまれてしまった。そんなの、とつてもらしくないし、本意でも何もないのに。

他人の提案に乗っかり始めた野球で私は今、何をしたい。そんなの、決まってる。

SOS団の皆の価値を見せるために勝つ。そう、勝利ではつきりと白黒をつけてやるのだ。

【涼宮ハルヒ】は哀れなピエロなんかではなく、世界の中心で輝く主人公のような女の子だって。

「っ、痛……やってやろうじゃないっ！」

だから、思い切り自分の顔を両手の平で張った私は、まるで【あたし】のように改めて気炎を上げたの。

そして、後はジンジン痛みだす朱くなつたほっぺに対する後悔ばかりを気にしてしまう。

「今のハルにゃん、ちよつと怖い……」

だから、戻つてやる気満々にアップを始めだす私をどうしてだか不安そうに見つめる彼女の声も、聞こえなかった。

今日は梅雨時にしてはおかしくて笑つちやいたくなるくらいの雲一つない晴れ模様。お日様ニコニコつてこういうことなのね。

時に練習を中断させていた雨の残滓、水たまりはしぶとく道の端っこに残っているわ。でも砂をまかれた上にトンボで均された野球場にぬかるみなんて見当たらない。

これはまるきり絶好の野球日和つてところかしら。私にただいま真つ赤に燃える闘魂にふさわしい、そんなとつても都合の良い日。

「眩し〜」

流石に、これがおかしなこととは分かつてる。きつと、最近随分と動きがぎこちなくなつた私の中のそれこそ神の如き力が作用しているに違いないの。

でも、それだけ。余計な茶々はそれだけでいいのよ。【涼宮ハルヒ】は、SOS団はそんなとんでもないものがなくつたつて特別なはず。

「……はあ」

勿論分かつてるわ。友情を超大で唯一に感じるなんてそんなの、子供の夢でしかないこと。

とはいえ、少しくらい夢見たつて良いじゃない。なにせ、かれこれ三年程度しか自己認識のない私はあたしよりもよつぽど幼い。その三年の軌跡の結実に、過分な意味を感じてしまったつて仕方がないと思うの。

相手だつてきつと今日のために私達以上に頑張つてきた。でも、そんな素晴らしい努力を相手にしたところで負けたくない。

そんな臍負が、この胸の中のSOS団の皆に対する大好きによつて起こっているのは、残念ながら間違いないわ。困つたものよ。

全く、こんなの【涼宮ハルヒ】どころか【私】らしくもない。でも、

「あたし」の予定になかったただの友達だった筈の男子は靴紐を結び直しながら嫌に優しく笑んで、私に向かって言ったわ。

「それにしても良かったなあ、いい具合に晴れてよ」

「ええー！　これで雨天コートだけはあり得ないわ！　後は素直に実力のぶつけ合いで結果を出さだけね！」

私の気持ちの乗りすぎた声は嫌に大きく響く。そこによくない兆候を覚えるのは、やっぱり彼ね。

何時もの呆れたというポーズを取ってから、キョンくんは戯けて言うの。

「やれやれ……対戦相手が決まってからこの方、ハルヒは随分と楽しそうだな。そんなに、初戦からクライマックスな現状は面白いもんか？」

「それは当然よ。優勝候補と一回戦目で当たるなんて、運が良いわ。疲れがない最高の状態で大会の一番に挑めるのよ？　これは、チャンスが増したと考えた方が良いわね」

そう、口に出して私は改めてむしろ好機だと思っ直したわ。相手は、三回もこの草野球大会で冠を頂いた強豪。そんな一番を真っ先に落とすことが出来るなんて、ラッキー。

私は思わず笑ってしまう。ああ、そういえば笑みってどこか獣の威嚇に似てる。少し加減しなければとする私に古泉くんは問ったわ。

「……チャンス、っていうのはひよつとすると」

「そうよっ！　今大会の優勝カップを北高に持って帰るチャンスに決まってるわ！」

「とーなると、準決と決勝がある来週もここに集まんなきやダメかい？　あたしとしてはそれもやぶさかじゃないけど、そう簡単に行くかい？」

親父っさんになんて誤魔化すのかがちよつと骨だねえ、と零しながらもケラケラ笑む鶴屋さん。

どうにも、皆が私を和ませる、というよりも落ち着かせようとしているというのは分かる。

それはそうよね。大会を楽しみましょうと先まで口にしていた団

長が、急に優勝狙いに切り替わったら、ついていけなくなるのは当然。私だったら、文句を言っちゃうかもしれないわ。

その分、『チームSOS団』の皆は優しい。でも、優しすぎるのよ。私はそんなだからこそ真っ白きれいな星を欲しがってしまう。

こんな燦々太陽の下、星なんて見えるわけないけれど。でも手を組み願わずに、むしろその手で持って白球を握って。

「……行かせるわ」

太陽を睨みながら、断言する。私はどうしてもこの大切な友達の価値を、皆に知らしめたかった。

ロージンは付けすぎるほどいい。

コントロールばかりが得意な私に球の荒れは天敵だから、よくよく白を指先にまぶすの。

ぽんぽんと風向きに流れていく白は、どこか間抜け。その尾っぽを見つめながらぼうっとしていた私を思ったのかしらね、少し緊張した面持ちの古泉くんが寄ってきたわ。

彼は借りた面を外し、笑顔も捨てて真っ直ぐ私に声をかけてくれた。

「涼宮さん……くれぐれも、ご無理はなさらないようにして下さいね」
「……ええ」

その心配に、短く返すことしか出来ないことを、私はとても申し訳なく思うわ。

でも、そんな頼りない返事に深々と頷いてくれた曰く組織の長たる高校生は、笑顔を戻して扇の要に座した。

そんな彼の忠心を見て、やっぱり私は早く彼に「あたし」を返してあげたいと強く思うの。

古泉くんの心配は当然よね。しばらく私はボールを握れなかった日があったから。

あの日、バッティング初心者なちよつと天使っぽいところのある周防さんによって私は強烈なピッチャー返しを浴びかけたわ。

華麗なフィールディングを見せるどころかその後腰を抜かして戦

力外になったへボピッチャーな私に合わせるようにその日の全体練習はなし崩しに終了。

そういえば、一度ごめんなさいをしてから周防さんはずっと私に付き添っていてくれたっけ。悪かったのは、彼女の性能を過小評価していた私の方だったのね。

まあ、そんな自業自得であつても恐怖を知ったら震えるのは当然の反応。それからちよつと、ボールに触れる指先が落ち着かなくなつたのよね。

『……すまん』

『大丈夫よ、こんなの』

ピッチャーが、球にもろくに触れられない。そんな中、皆は私に無理は止めろと言つたわ。谷口に至つては、勝手に自分のせいとして申し訳無さそうにしちやつて、見てらんなかった。

だから、私は。

『ほら』

【力】づくで震えを抑えて、皆と一緒にレクリエーションを再開したの。そして、更にこんなに力んじやつた今がある。

「ふう……」

プレイボール前の、マウンドにて溜息を一つ。それでも、心は落ち着かない。

正直なところ、怖いわ。知らないこと、周防さん、そして私が何時か終わっちゃうこと、そんな全てが恐ろしくつてたまらない。

でもね、だからつて嫌いになるのだけは嫌なの。勝ちたい、しかしもし負けたとしても私はきつと誰も恨めない。

だって、きつと神様は自分の世界に嫌いなものを容れないだろうから。

「私は、誰かを嫌いって決めつけたくないのよ」

過分なほどの梅雨の陽光の下、私は、退屈にも世界が真っ白に光り輝いていることを望む。